
家庭教師ヒットマンREBORN! ?の牙 来る！！

クロサマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN！ ？の牙 来る！！

【Nコード】

N6606W

【作者名】

クロサマ

【あらすじ】

山で遭難し死亡した少年 雪見刹那 は神様に神友が少なかったために唯一転生することを許された 家庭教師ヒットマンREBORN の世界に飛ばされることになった。これはボンゴレ史上最強のボスと守護者、いや、彼の親友たちの物語である。

キャラ紹介（前書き）

とりあえず、キャラの紹介とか

キャラ紹介

ゆきみせつな
雪見 刹那

性別..男

年齢.. 転生前 17 ↓ 転生後 12

一人称..僕

性格..友達思いの普通にいいやつ

誕生日..12月25日

髪..黒髪で短髪

目の色..黒

身長..168cm

体重..58kg

追記..登山部所属

運動神経

学力

山本>獄寺||刹那>綱吉

獄寺>刹那>.....

.....>綱吉||山本

将来的には、ツナと同じく死ぬ気弾または死ぬ気丸で死ぬ
気（ハイパー死ぬ気）になって戦うだ
ろうと思われる

僕と神様（前書き）

リボン性がまだ薄い……

転生まではしていないので当然ですが

ちなみに、他二次創作の神様のアンチじゃありませんよ？
神もたいがいですし……

こここの

僕と神様

油断していた……

入念に道具の準備をして、天気のチェックもしっかりやった

ホント、いつも通りのはずだった……

なのに……

「こんな雪山で遭難するなんて――！！！！！」

やっぱり、登山に来たのが間違いだったのか？

くそっ、引きこもり生活にそろそろ終止符を打とうと登山部に入ったのが間違いの始まり……

「せんぱーい、どこにいるんすんかあゝゝゝ！！！」

ホントどこ？ やばい、さみしくなってきた。うさぎはさみしいと死んじゃうんだぞ？ 僕はうさぎじゃないけどさっ

僕はてくてくと歩を進めてみる。こういうときは、動かないほうがいい？ 動いてないと不安で死にそうなんだよ（涙）

突然、僕の脚が雪の中に深く沈む……

「くっ、痛っ！？」

あ、足りじいちゃった。歩けない歩けない、無理すれば可能だけど精神的に歩けない……

僕、死ぬね。父さん母さん、天国で待ってます。

いやいや

「死にたくない！！　こんなことなら死亡しないために、もっと脂肪をつけておけばよかった」

余計に寒くなりました……なっちゃいました！！

で

そのまま僕は死にました！！

急展開すぎ？　でも、事実だもん。

まあ、追記するなら死ぬまでずっと泣いてましたよ？　そりゃ、走馬灯も見ろ暇無しに……

「さようなら！！」

「そして、はじめまして」

僕の前には、サンタさん（女の子のコスプレバージョン）がいた。

「誰っ!？」

「私は、君の世界の世界の管理者だよ。君たちの言葉では“神様”
ってやつさ」

絶対うそだ……現実になんかかわいい神様がいてたまるものか。漫画だったらともかくね。神様なんてものは、髭もじゃでどこか人を安心させる雰囲気を持つてるものさ。彼女は逆逆。だって、見られるだけでドキドキして心臓止まりそうだもん。あとはあれかな、よく二次創作で見かける異常に軽薄な神様位だよな。

「ふふっ、確かにほとんどの神様はおじいさんだ。軽薄なやつは残念ながら少数だけだね。そして私はそのどちらにも当てはまらないケース。天立 五ツ櫛見大学卒業のスーパーエリートなんだ♪」

そう言って、彼女はえっへん、と胸を張る。

「もう、最近は神様業界も学歴ありきの社会になっちゃったからね。それでこの職に就いている僕からはあまり言えないんだけど……」

「職なの!？ 他にはどんな職業が……」

「天使とか？ でも彼らには墮天があるからね。あ、墮天ってのは君たちで言う“リストラ”のことなんだけどね」

「墮天使って首切られた天使のなれの果てだったんだ」

なんて言うかすごいがっかりだ。よもや天界にまで学歴社会が浸透してしまっているなんて……

正直言って、学校で習ったことが生活に役に立つとは思えないのに

「さて、雪見 刹那君。君が勉強に挫折してしまった中高生みたいなことを言い出してしまったから、冗談はこれくらいにして本題にはいろうか」

ひどい……信じてたのに。父さん母さん、神様は実はいじめっ子らしいです。

「確認だけど、君は死んだね？」

「ええ、そりゃなさけなく。自分はもう少ししっかりしたやつだと思っていましたよ」

「それは悲観することはないさ。死を恐れない人間なんてほんの一握りだけさ」

慰めてくれたよ、神様って実はツンデレ？

「で、それに関してなんだけどね、実は……」

「もしかして、よくある神様のミスだから転生させてくれるやつ？」

「違うけど？」

違うの！？ これは完全にそのパターンだったじゃん。

「いや、転生はさせてあげるけどね？」

「それじゃ、理由は？」

「いやもう、すごく笑わせてもらったからさ」

こっちはすごくがっかりだよ!! ひどいよ神様、やることが人々を導くような存在がすることじゃないじゃないか

「それで転生先なんだけどね、私神友少なくてね、家庭教師ヒットマン reborn のとこしか承認してくれなかったんだよ。それでもいいかな？」

「リボーン!? 僕その作品大好きなんだよね。やったー、うれしいな」

「そうなんだ。それはよかったよ……ちっ」

わーいわーうれしいな。神様は舌打ちしてた気がしたけど気にしない気にしない

「それじゃあ、いまから送るからね」

僕の視界が突然グラリと揺れる。感覚で言えばぐにゃぐにゃぐにゃって感じ。わかりやすく言うると乗り物酔いかな。

先ほどまで真っ暗だった風景が、徐々に明るくなっていく。

「そうそう、君は並盛中に転校することになるから、がんばって〜」

そうして僕のジャンプっぽい生活が幕を開けたのである

俺と彼 僕と彼（前書き）

俺流REBORN!!

“まだ” キャラ崩壊してないと思います。
しないように頑張るつもりッス

俺と彼 僕と彼

Side 刹那

元の世界から移動して僕が最初に見た光景は、まっさらの何もない部屋だった。まあ、何もないというのは大げさで、部屋の隅っこにお金がつまれていた。

「ひと束100万円として、1・2……………」

間違えないようにゆっくりと数えていく。

結果

「1億円!？」

これで家具とか、日用品を買えということだろうか。いやいや、それにしても

「こんな大金を適当に置いておかなでよ!!」

お金は確かに必要なものだから、正直言っておりがたい。でも、1億円ってはじめてみるよ。盗まれたらどうしよう……

よし、ポジティブに考えよう。ここは間違っても、少年ジャンプの漫画の世界。まして、この世界はマフィアがどうのという話ではあるけれど、お金というより人情とかそういうった組織としての団結力

がメインになっている。だからきつと泥棒なんていないさ……

とその時、ガラガラガラと家の窓が開いた。

「おおっ!? なんだこの大金……」

ちよ、おま。なんで窓のカギがデフォルトでかかってないのさ……

「よっし、盗むか」

宣言しなくてもいいよ

「ガキ、じゃまだ」

そういうと、泥棒さんは僕に向かって突進してくる。もし、戦闘に関して少しでも経験があればよけられたかもしれないが、あいにくインドア派だった僕はそんな物騒なスキルを持ち合わせていない。反応できず、もろに突撃をくらってしまい壁に打ち付けられてしまった。モブっぽいわりに結構な威力である。

「くそ、多すぎるぜ。持てる分だけ持ってとっとと逃げるか」

彼は、適当に僕の札束を持って早々に退散していく。

「まっ待て!!」

インドアだからって舐めてもらっては困る。なにを隠そうこの僕は、なんの覚悟も無く訓練も無く、適当に登山で先輩たちについている程度のポテンシャルを持ってるんだよ。ただ運動が嫌いってだけで、にがてなわけじゃあない!!
だって僕は、体育は5以外と

ったことがないからね。

僕も泥棒さんに続いて窓から出ようと目論むが

「ここ2回じゃん!!」

あのおっちゃん飛び降りたのか……なんてアクティブな人なんだ。

「くっ、ええい。為せばなる」

意を決して僕も飛び降りる……なんだ、意外と簡単だったな。
とと、追わないと。運よくまだ彼の姿は視認できる。あの速さなら
なんとか追いつけるかもしれない。

「逃がしはしないよ、僕のお金ええええ!!」

僕がこんなにお金に執着するやつだったなんて……でもいいよね、
700万も盗られてるし。

「ヒィヒィ。あのガキ細っこいくせになんて速いんだ」

だんだん、泥棒さんの姿が大きくなっていく。なんだか、ミニゲー
ムをやってるみたいだ。

右……左……右、そしてすかさずAボタンでジャンプみたいになっ
!!

射程範囲まで追いついたところで飛びかかった。

ドシーン

捕まえたか？　　と思い前を見ると（怖かったので目を瞑っていた）
目の前にいるのはおじさんではなく、髪がぼさぼさの少年だった。

「あたた、すみません。大丈夫ですか？」

僕は彼の姿をみて、一瞬停止してしまった。

「まさか君は……」

僕はやっと、家庭教師ヒットマンrebornの世界へ来たことを実感したのである。

Side 綱吉

リボーンが家に来てからもう大変なことだらけだ。突然学校に現れるし、裸で京子ちゃんに告白もさせられてしまった。

あいつは家庭教師とか言っているけれど、絶対にそうじゃないと確信している。どっちかといえば、スパルタ教官だ。答え間違ったら爆破ってどんな赤ん坊だよ……

「ボンゴレファミリーか……」

「どうしたツナ。やっとやる気になったのか？」

リボーンはただの赤ん坊ではない。最強のヒットマンらしい、信じてないけど……

そんなヒットマンが俺のところに來た理由、説明とかあまり得意じゃないから結論だけを伝えと、俺はイタリアのマフィア“ボンゴレファミリー”の10代目の正統後継者であるらしい。そんな俺を、りっぱなボスに育てるために來たんだと、信じてないけど……

「そんなわけないだろ。俺は絶対に継がないからな」

「そうか、ツナがなんと言おうとカテキョーはやめねーけどな。さっそくだがツナ、この問題解いてしろ」

「マフィアのボスに勉強なんて必要ないだろ？」

「いまどきのマフィアってのは、おつむもないとやってけねえのさ」

なんだよそれ、と言いながらもとりあえず問題を見てみる。……全然わかんないぞ？

「早くしろ、まだとけねえのか」

「ちょっと待ってよ」

「10・9・8・7」

「わわっ、だから待ってっ」

「6・5・4」

「え〜とえ〜と……」

「3・2・1」

「5!」

「ブブー」

ドカーン

俺の部屋が爆発した。爆弾なんていつの間に用意してたんだよあいつは……

ドーンドーンドーンドカーン

「おい、リボーン。いつまで爆発すんだよ」

まだ全然収まらないんだけど……

「スピー」

「ねてるー!?!」

起きろ! と体を揺らすと案の定殴られた。

「痛え〜〜」

「俺に触るんじゃないわねえ」

「そんなことより早くこれとめろよ」

「無理だ」

「なんで!?!」

「元々、最初の爆発で既に終わってるはずなんだ」

「つまり?」

「ちょっと、他の爆弾が誘爆しちゃった」

「なああああああゝゝゝ!?!」

これ以上続いたら家具の破壊だけじゃすまないんだけど……

「ダメツナ、とりあえず避難するぞ」

と俺はリボーンに片手で投げ飛ばされ、窓から外にはじきだされた。

そのまま運よく怪我無く（痛かったけど）地面にたたきつけられて、転がっていく。

ドシーン

その時、別の衝撃が走った。

「あたた、すみません。大丈夫ですか?」

俺がぶつかったのは、黒髪・短髪の少年だった。俺の顔を見てなぜ

か驚いているように見える。

茫然としていた彼は、突然思い出したかのように声を出した。

「まさか君は……」

まあつまり

これが

俺と刹那の

僕と綱吉の

出会い

そう

これこそ

後にボンゴレ^{デーチモ}? と呼ばれる少年と

Una zanna della decima
ione (?の牙) と呼ばれる少年の

出会い

僕とリボーン

Side 刹那

「まさか君は……」

沢田綱吉——REBORN の主人公

ボンゴレファミリーに伝わる死ぬ気弾と言う特殊弾を額に受けることで、自分の潜在能力を引き出して戦う。持ち前の優しさと仲間を守るための努力で彼らを引っ張って行った。

彼にこんなところで会うなんて思ってもみなかったな。

「えっと、俺達会ったことあったかな？」

そうだった。僕だって彼のことは知識で知っているというだけ……

って、なんか忘れてる気が……

「ああっ、泥棒さん!!」

しまった……沢田君に気を取られて忘れてた。あの人の背中はまだ点ほどにしか見えない。

「君、どうしたの？」

「ちょっとひったくりに会ってね、追いかけていたところで……も

う少しのところで捕まえられそうだったんだけど……」

「それってもしかして」

「十中八九、ツナのせいだな」

「リボン!!」

ほほう、彼がリボン君か。実物はもっと小さいかったんだな。
彼らに会えたんだ、700万なんて安いもんさ、そう安い……（涙）

「あゝあ、ツナのせいで泣いちゃったな」

「なっ泣くほど!?! いったい何を盗られたの?」

「え? 700万」

「なあああ!?!」

「大金だな、ツナが弁償するしかないだろうな」

「そんなの無理だよ!!」

沢田君とリボン君が喧嘩をはじめてしまった。ありがとう、そしてごめん。僕なんかのために

「じゃあツナ、あいつをとっ捕まえて取り返してこいよ」

「もう無理だよ」

ホントだ、泥棒さんは既に視界にすら入らない。

「だから、死ぬ気でやれって言ってんだ」

コンマ1秒で銃をかまえ弾を装填し、次の瞬間には沢田君の脳天を打ち抜いていた。

わお、あれが噂の、リボーン君のクイックショットか……

バサッ、と沢田君の体が倒れる

そして、次の瞬間にはモゾモゾと動き出し

「死ぬ気 リ・ボーン 復活!!」

と叫びながら真っ裸になり、うおおおおおおおおおおおとおおおお、とか叫びながら走って行ってしまった。

「「イツツ 死ぬ気 タイム」」

気がつけば僕はそう呟いていた。

「やっぱりおかしいな。おまえ、なにもんだ?」

ミスった……やっぱりリボーン君は見逃してくれないか。でもここはあわてちゃいけないとこだ。もしそんなことになれば、ダメ刹那呼ばわりされそうだ。

深呼吸ー。スーハースーハー……よしっ

「僕の名前は雪見刹那。異世界からやってきたんだ」

字面ではわからないだろうけれど……おもいつきり裏返りました、裏返っちゃいました。

「言ってることには興味があるが……なんだ、ダメツナと同類か」

やっぱり、いわれると思いましたよ？ 思っちゃいましたよ？

Side 綱吉

なんとか死ぬ気で、700万取り返して来たのはいいんだけど……

「なんで2人して、俺の部屋でコーヒー飲んでんだよ!!」

しかも、なんか仲良さそうだし。

「遅えぞ、ツナ」

「お邪魔してます、沢田君」

あ、どうぞ散らってますけど……じゃなくて

「リボーン、この人お前の知り合いか？」

「遅えぞ。初対面だ」

「じゃあ、なんでそんな談笑してんだよ」

リボンらしいと言えらしいけど

「ああ、怪しかったし面白そうだったからな、家に引っ張ったんだ。どうせ、ツナのこと待たなきゃなんなかったしな」

怪しい？ そうは見えないけど……服だって俺らと同じ様に普通のやつだし、なんて言うか、全然怖い感じがしないよ……

「当然だ。こいつは一般人、マフィアとは無関係の人間だ」

一般人！？ 分かってんのに、なにやってるんだよ

「でもな、こいつは、死ぬ気弾のことを知ってやがった」

「なっ!？」

「それどころか、明らかに俺達の事を知ってやがる。スーパーカッ
コ良くてもてな俺はともかく、ダメツナ、お前のこともな……」

酷いよ!! って

「なんでそんなこと分かるんだよ。証拠なんてないんだろ？」

「あるぞ」

「なんだよ」

「俺が長年ヒットマンやって来た中での勘だ」

「なああああああ!？」

勘なんて証拠になんないよ、リボーンめ、いつも俺に迷惑かけるんだから。しかも、今回は知らない人まで巻き込んで……
とりあえず、謝っとうかな

「すみません、家の赤ん坊が迷惑かけちゃったみたいで」

「いえいえ、構いません。リボーン君が言ってることは大方正しいですから」

「そうですね」

って、ええええええええええ!？

正しいの!？

「僕は、雪見 刹那と言います。とある事情でこの世界にやって来た異世界人です」

異世界人!？ 見た目に反して、電波な人だったのか

「事情？」

「はい、実は僕、元の世界で遭難しまして」

しまして……

「凍え死んだんですよ……」

「んなあああああ!？」

じゃあ、この人なんでここにいるの？ まさか幽霊？ そーっと、良かった、足はあった。

「で、神様のご厚意で、この世界に転生させてもらいました」

転生いいいい!？ さっきから俺、叫んでばかりだ。

「それで実はですね、この世界は僕の世界に漫画として存在してたりするんですよ。だから知っている。疑わしいなら、君達しか知らない様な知識を披露しますけど……」

俺達がお願いすると、雪見君は丁寧に説明してくれた。時々俺には隠して、リボーンにだけ話している時もあったけど、なにか理由があるみたい。それを聞くと、あのリボーンですら驚いていたこともあった。

「そんな訳で、僕は地球を侵略してきた、火星人なんです」

とか、自分の言葉を覆したりしてなかなか面白い子だった。

最後に、お互いに、ツナ・刹那と呼ぶということにした。

「それじゃあ、またね」

うん、また……また？

俺のクラスにやって来た転校生

「僕の名前は、雪見 刹那。実は火星人了。仲良くしてね」

しかも結構もててだった……はっ、京子ちゃんは……？

こころなしか、ニコニコに見える

僕と沢田と剣道部（前書き）

綱吉 「この作品って、結構作り荒いよね」

リボーン 「作者がいい加減なやつだからな」

刹那 「では、本編の前に一言……僕の年齢おかしくない？」

僕と沢田と剣道部

S i d e 刹那

僕が転校して来てから、もう3日もたった。その間、特に変わったことは起きなかったけれど、1つだけ発見があったんだ。

歴史の動き方についてなんだけど。

ツナは、素っ裸で笹川さんに告白はしたらしいよ。でも、その直後に発生するはずのイベントの剣道部の人（名前はなんだったかな）との対決をしていないみたい。つまり、僕がいることで若干、歴史が変わってしまったと言うことなんだね。

まあ、正直どこまで変わっていくのかは分からないんだよね。あれの様に、小さな出来事しか左右されないかもしれないし。

それにしても、対決やらないのかな。あれって、ツナと笹川さんを繋げる最初のイベントのはずなんだけどな。

「沢田 綱吉~~~~~!!」

あ、噂をすれば影だね。

教室の入り口の所に胴着を着た人が仁王立ちしてるね。

突然名前を呼ばれたツナはあんぐりと口をあけちゃってるよ……

「沢田 綱吉！ 笹川 京子を賭けて決闘しろ。貴様に泣かされた彼女の代わりにこの俺が、貴様のことを叩きのめしてやる放課後だ。放課後に剣道場にこい」

それだけ言うと、とつと行ってしまった。

教室の中がざわつく。

女のコ達は、敵討ちだってさあ、とか言っただけで笹川さんをからかって
いるし、男のコは楽しそうなイベントにワクワクしているのだよ。

ツナ本人はというと

「おっ俺が、持田先輩に勝てるわけじゃないか。刹那、どうしよう」

そうそう、持田持田。

えーと、どうするかだっけ？

「そうだね……素直に闘うか、エスケープのどっちかだよ」

「だよなあ……」

きつと逃げ出すんだろうな。特にこの頃のツナは……

「よし、帰……」

「ホントにそれでいいの、ツナ？」

「……え？」

「逃げるって言うことは、笹川さんを諦めるってことだよ……」

「でも、俺じゃ絶対に勝てるわけないし……」

「僕は……やろうとしたやつが勝者だと思う」

語調を強める。

「思い出しなよ。先輩が言った言葉と、その時の風景を……」

「……あの人、京子ちゃんを賭けの対象にしてた。まるで、ものみたいに。それに、あの時、京子ちゃんは笑ってなかった気がする。もしかして、京子ちゃんのことを汲んでないのかな」

さてね、僕にもそれは分からない。本当は彼女の事を考えての行動で、たまたま、ああいった言葉にただけかも知れないし……

「だったら許せない!!」

確かに怒りはマイナスな感情なんだろうなあ。でも、最初の取っ掛かりには丁度いいんじゃないかな。

「刹那、俺いくよ」

「応援してるよ。」

……ちよっと、トイレ行って来る」

僕は立ち上がって教室をあとする。

するとどこかから

「ちゃおっす、刹那」

と声が聞こえた。僕の傍のアジト（らしい）からリボーン君が出てきた。

ワオ、2本足で歩く赤ん坊が1人で中学校にいるのを実際に見ると、すごい不自然だね。

「ちゃおっす、リボーン君」

「随分と穴だらけの答えを出すじゃねえか。ツナじゃなければ気付いてたぞ」

「気づかなかったから結果オーライ!!」

「ツナのカテキョーからすれば、有難いけどな……おいダメ刹那、そっちはトイレじゃねえぞ」

やっぱりバレました……バレちゃいました。

「どこいくつもりだ？」

「ちょっと剣士さんの所へふらふら〜と」

「決闘には手えだすんじゃねえぞ。ツナのためになんねえからな」

「手を出すのをやめさせるだけだよ」

リボーン君だって、死ぬ気弾使うだろ？

そんでもって、僕はカッコ良くポーズを決めて立ち去りましたとき。

S i d e 綱吉

気がつけばもう放課後になっていた。俺は今、刹那と一緒に剣道場に向かっている。

「ああ、今になって緊張してきた」

多分無様に負けちゃうんだろうな……今日は何故カリボーンも出てこない。こういうときはいつも出て来れるのだから、どこかで見ているんだと思う。なに出て来ないということとは、自分の力——死ぬ気弾をあてにするってことなんだろうなあ。

「リボーンのやつ、どうしてこうやる気になったときにいないかなあ……」

「生徒の進歩を見守ることにしたんじゃない？」

刹那はそんなことを言うけれど、俺にはあいつがそんなことするとは思えない。

「まっ、一生懸命がんばりな」

気づけば既に、剣道場に到着していた。少し覗いてみると、中は生徒たちであふれかえっていた。

「なんかいっぱいいるー！？」

「僕たちの年代はこういうのが大好物だからな」

だとしても集まりすぎだろ。俺なんかが出る決闘を見に来てどうすんだよー

「考えられるとしたら……ツナがボコボコにされるのを見に来た？」

「なあああああっ！！」

そんなの迷惑だっ……でも、ありえそー

「あははは、あとはリボン君が集めたってところじゃない？」

……それだ、絶対にそうに決まってる

「ツナ、最後まで戦えばきっと、笹川さんは君を見てくれるようになるはずさ」

「そんなかつこ悪いところ見せたくないよ……」

「さっ、観客たちは君のことを待っている。進め、沢田 綱吉!!」

刹那はかつこいいポーズを決める。どんなポーズかは、ご想像にお任せする。

でも、おかげで少し落ち着いた……

俺はドンッ、と扉を開けた。

歓声で迎えられるのかと思えば、みんなはびっくりという顔をしていた。

「ダメツナが来た!？」 「信じられない」 「また、トイレエスケープかと思ってたぜ」

なるほど、そういう意味ね……

「よく来たな、沢田 綱吉。こっちにこい、ルールを説明してやる」

俺はその言葉に従って、観客をかき分けて中央に進んだ。

S i d e 持田

のこのこと来るとはヴァカな奴め。剣道とは、素人が運で勝てるも

のじゃないんだよ。圧倒的な運動能力でも持っていない限りな!!

「ルールを説明してやる。聞きながらいい、その防具に着換えろ」

クククッ、そう防具には2人で持ち上げるのが大変なくらいの重りが仕込んであるのだ。貴様程度では動くこともできん。

って、なにー!? 簡単に持ち上げるだと? 噂と全然違うではないか!!

いやいい。まだ仕掛けはあるからな……この審判は俺の息がかかっている。いくらあいつが1本を決めたところで絶対に有効判定は出さない。

「沢田 綱吉、この勝負は経験者と素人の戦いだ。だから、10分間のうちに1度でも俺から1本とることができれば貴様の勝ちとする」

まっ、無理だがな……ハハッハッハ

Side リボーン

「おっ、始まってんな」

俺が剣道場に入ると、すぐそこに刹那が立っていた。

こいつは何がしたいんだか全くわかんねえ。ツナの仲間とか言ってるわりには、今回はツナのやつの背中の後押しと途中までだけ手助けして、最終的には達観してやがる。

「ちやおっす」

「リボーン君やっと来たんだ。もしかして来ないのかとおもったよ」

「生徒の行動を見張るのは教師の仕事だからな」

ツナの後押しはこいつのおかげでしなくて済んだから、楽だったし

「お前、結局あのあとになにしてたんだ？」

「見張られてるもんだと思ってたよ」

「お前は、俺の生徒じゃねえからな」

「交渉に行ってた」

なんだ、ボコボコにでもしに行ってたのかと思ってたのにな。

「剣道部の全員の善意に訴えて、ツナが時間通りに来るのを条件にして、不正を働かないようにお願いしたんだ」

なるほど。育てる側としたら、これもまた有難えな

「持田はそれを知らないから、自分は絶対に負けないと油断してんじゃないかな。だとしたらツナにも勝ち目はあると思うんだけどね……」

そのときツナの相手が馬鹿な声を上げる。

「ハーハッハッハ、ヴァカめ、自分の弱さを思い知ったか」

俺達が話している間も、ツナはボコボコにされてたからな

「おい、ダメ刹那。ツナの運動神経をなめんじゃねえぞ」

S i d e 綱吉

痛い痛い痛い痛い。やっぱり勝てないよ。どんなに頑張っても俺なんかじゃ持田先輩にはかなうわけがない……

「もう降参しろ、沢田綱吉。これ以上続けていても時間の無駄だ」

そうだよ……万全の状態でも手も足も出なかったんだ。体中痛くてもう動ける気もしない、そんな状況で続けても意味ないよ。

「先輩、俺……」

——逃げるって言うことは、笹川さんを諦めるってことだよ……

あの時の刹那の言葉を思い出す。

……京子ちゃんを諦める。……京子ちゃんを……諦める？

「なんだ、沢田？」

いやだな……だって、あの子は俺にとって太陽みたい女のゴだから

「……………」

「先輩、俺は……諦めません」

痛む体に鞭打ってなんとか立ち上がる。

会場が一瞬静まり返る。

次の瞬間

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「あのダメツナが立ち上がった！！」「沢田くーん、かっこいいぞー」「負けるなー、がんばれダメツナー」

「突然なんだ!？」

よし、いける!!

その時、入り口の方から声が聞こえた気がする。そっちを向くと、そこにはリボーンと刹那がいた。

「よく立ったな。お前えにしちゃ、上出来だ」

リボーンは銃を構えていた。

バンッ

俺は脳天を撃たれた。

せっかく立ち上がったのに、せつかくなら勝ちたかったな。死なずに……勝ちたい!!

「死ぬ気

リ・ボーン
復活!!」

「死ぬ気で持田から1本とる!!」

茫然としている持田に向かって竹刀を振りおろす。

「しまった!？」

さすがは経験者だな……もう受けの体制に入れるのか。でも

「おおおおおおおおおおお!!」

バリバリバリッ、という音がして持田の竹刀は折れてしまう。そしてそのまま振り下ろす。

バシーン

遠くから声が聞こえる。

「僕の交渉も役に立ったかな」

なんのこと？

「面あり、1本!!」

わあああああああ!!

そんな訳で、なんとか俺は、持田先輩に勝利した。

僕と沢田と剣道部（後書き）

刹那 「すごく最終回みたいだね」

リボン 「まだまだ続くけどな」

刹那 「きっと次回からは、ダメツナに戻るよね」

リボン 「そうだな、理由は、今回は京子がどうのってのがあつて精神が高ぶっ

てたから、だな」

刹那 「そんなところでしょ。？の牙はまだまだ続きますよ」

??? 「それでは、シーユーアッゲインですー！！」

髪の毛（1本）と小指（左足）（前書き）

何度も申し訳ありません。またまた、主人公設定に不備を発見してしまいました。髪の色が白から黒になります。

いい加減な作者ですが、呆れることなく、これからも読んでいただけるとうれしいです。

髪の毛（1本）と小指（左足）

Side 刹那

そろそろだとは思ってたよ。正直に言えば、やっとかよって感じ。黒のまじった白っぽい髪。ふむ、言い得て妙だな、タコヘッド!! 皆さんのお待ちかねかな。

「イタリアからの帰国子女、獄寺 隼人君だ。仲良くしてあげなさい」

ギロツ

わーい、やっぱりツナのこと睨んだよ。おお、どんどんツナの席に近づいてきて……

ガタッ

イエーイ、蹴ったー。不良だー

このシーンに立ち会えるなんて……神様ありがとう。

S i d e 隼人

「やわすぎる……」

ボンゴレファミリーの10代目候補者、沢田 綱吉。俺と同年く
らいだって聞いてやってきたって言うのによ。あんなやつにボスが
務まるわけがねえ。いや、もしかして実力を隠しているのか？能あ
る鷹は爪を隠すって言うしな。

「しょうがねえ。まずは少し様子を見るか……」

S i d e 刹那

「いやあ、ツナ大変だったね。同情するよ」

嘘だけど

「ホントだよ。なんだよあいつ」

「さあねえ」

いやーどうなるのかな、楽しみ楽しみ

「なに、刹那知ってんの？」

「ツナのくせに！！」

なんか賢くなってるよ。いや、こうすれば……

「もう頭来た、助けてやんない。勝手にしなよ」

「逆切れ～～～！？」

とりあえず、少しの間はツナに近づかないようにしよつと。もちろん、学校裏は張るけどね。

……

……

……

……

いやあ、ホント、ツナって運動苦手だなあ。どうやったらあの状態でボールが顔面直撃するんだろ。

あゝ、獄寺君見てるなあ。タバコ吸ってるよ、イライラしてるなあ。

.....

.....

.....

.....

おっ、遂に動くか。屋上から眺めよーっと

Side 綱吉

「やわすぎる」

どーしよー、ここ俺と獄寺君しかないよ。がんばって逃げるしかない！！

「そうはさせねえ、2倍ボム！！」

なああああつつつ、ダイナマイト！？ なんで中学生がそんなの
持ってるんだよー！！

「今まで様子を見てきたがなんてまだ、お前なんかボンゴレを継

ぐべきじゃねえ。10代目にふさわしいのはこの俺だ」

ボンゴレ!? まさか、マフィアの関係者?

「死ね」

うわぁ、死んだー!! こんなことになるなんて、だからマフィアなんて嫌だったんだ。

バンツ、と音が鳴って導火線が打ち抜かれた。

「チツ、あんたが9代目の最も信頼する殺し屋、リボーンか」

「そうだぞ、思ったより早かったな、獄寺 隼人」

「リボーン、獄寺君を知ってるの?」

————漫画と同じなので略————

「こいつを殺せば、俺がボスになれるんだな」

そんな、リボーン裏切ったのか!?

「そうだぞ。ただし、こいつと戦うには段階を踏まなきゃならねえ」

「段階?」

「ああ。こいつの前に、部下を倒してこい」

部下？ 俺にそんなのいないけど……

「まさか!？」

「そのまさかだぞ、獄寺 隼人。お前はこれから、雪見 刹那を倒してこい」

やっぱりー!! 刹那にげてーー

Side 刹那

あれ、おかしいな。獄寺君なにもしないで帰っちゃったぞ？ ここは、ツナが死ぬ気になって、彼の落したダイナマイトの導火線の火をすべて消すことで解決して、獄寺君がツナの右腕を名乗るようになるはずなんだけどな……

持田先輩の時みたいに歴史が変わっちゃってんのかな？

ガチャッ

こんな時に誰だ？ 屋上だから……雲雀さん！？

「あんたが雪見 刹那だな……？」

あつれ〜？ 獄寺君なんで居んの〜？ 僕、彼と接点持った記憶ないんだけど……

「リボーンから言われて来た」

え、リボーン君が……なんで？

「ボンゴレ10代目候補、沢田 綱吉と戦うためにてめえのことを殺しに来た。おとなしく爆ぜろ……！」

リボーン君にはめられた〜〜〜〜〜〜！！

どうするの、この子ダイナマイト持ってるよ？ え〜と、投擲物だから……とりあえず、動きまくる……！！

「チッ、2倍ボム……！」

やっぱりか……。というか、あれどうやって持ってるの？ いやいや、そんなこと考えてる暇ないよ。え〜とえ〜と……

「オールドシーフ直伝奥義……！」

投げられる前に……

「奥義だど……！」

「とりあえず突進!!」

はっはー、この世界での記念すべきファーストコンタクトの相手である、泥棒さんの技だー!!

そういや、あの人どうなったんだろ……ま、いつか。

ドーン

ダイナマイトのばら撒き成功!! この隙に、なるべく突き放そう。

「待ちやがれ、このもやし!!」

もやしだって、初めてあだ名貰っちゃった。ださいな

「待てと言われて待つ奴などいない!!」

僕に追いつけるかい、タコヘッド

……

……

……

……

「うひゃー……」

獄寺君、いつまで追いかけてくるのさ。

「てめー、逃げてばっかないで戦いやがれ!!」

「嫌だ!!」

爆弾魔なんかと戦ってられないよ

「つてうお!? すみません、根津センセ」

「廊下を走るな、雪見、待て!!」

無理無理

「先生の言うことがきけないのか？」

もう邪魔!! ただのキーク!!

「グボラッ!?」

「邪魔だ、どけ!!」

「ゲハッ!?」

あゝあ、獄寺君蹴っちゃった……僕もただどね

「貴様ら、教師に暴力を奮ったな。退学だ――!!」

また、そんなことを……。しなければ、幸せのままだったのにね

「ああっ、しまった。たまたま見つけた40年前のタイムカプセルの中にあった、実は学歴詐称している根津センセの過去の2点の答

案が――！？」

ポロっと一枚の紙を落とす。退学クライシス ― 完 ―

……

……

……

……

「あひい――――」

ホントにしつこいな。あれ使っちゃおっかな？ いやでも、道德的に……いいや、獄寺君のせいにしちゃえ。

パッパパー、さっきどさくさにまぎれて拾ったダイナマイト！

引火、えーい。ドカーン

「のわっ、あのとくにパクってやがったのか」

場にあるものを全て使う……それがプロだ！！ 僕はプロじゃないけどね。

……

……

.....

.....

「ハアハアハア……」

死ぬ、死んじゃう……

「てめ……待ち……やがれ」

なにこの粘着質。ゴキブリホイホイもびっくり、ゾウが引いても剥がれない。

あつ、向こうにいるボサボサ頭は……

「や、やあツナ。ひさしぶり、大丈夫？」

「刹那が大丈夫か!？」

イヒヒ、大丈夫大丈夫

「いつまでやってやがる。ちゃんと戦え!！」

グホア!？ リボン君、さすがに今のはきいたよ。

「刹那——!！」

「イテテ、しょうがないな。獄寺君、かかっておいで」

「最初からそうしやがれ」

獄寺君が何本ものタバコをくわえる。それが彼の戦闘態勢なんだろ
う……

対して僕は……どうしよう。武器無いから素手でやるとして、どう
構えよう……棒立ちでいっか、カッコいいしね。
次はどう戦うかだけど……まあ、あれしかないか。

「2倍ボム、爆ぜろ!!」

投げた瞬間にダッシュ!!

「狙うは獄寺君!!」

「なに!？」

喰らえ、カッコいい右ストレート!!

「ぐはっ……やるじゃねえか。ならこれはどうだ……3倍ボム!!」

数が多くなっても関係ないよっ、喰らえスマートなとび蹴り——!!

ポロポロポロ……

「「あ」」

そーだった、この人この時はまだ“3倍ボム”できないじゃん。

「「ジ・エンドオブ・オレ（ボク）」」

「どうしよう、リボーン!？」

「決まってるだろ、ファミリーの命はボスが守れ」

バンッ

「リ・ボーン復活 死ぬ気で友達を救う!!」

「死ぬ気弾追加、両太腿でジャンプ弾だ」

脳天以外来たー。でも、ジャンプって……

「刹那・獄寺、しっかりつかまれ!!」

え、まさか、嘘……上に逃げるの？

「ぎゃああああああああああああああああああ」

ドカーン

校舎の屋上に降り立つ。

「2人とも大丈夫？」

「心臓以外は大丈夫」

心臓の被害は甚大だけどね。

あれ、獄寺君は？

「御見それしました!!」

「なっ!?!」

「命を投げうってまで、自分の命を狙っていた俺をたすけてくれるなんて。あなたこそ、ボンゴレファミリーの10代目にふさわしい。俺はあなたに命を預け、最高の右腕となることを誓います!?!」

「ええ〜〜!?!」

「(ファミリーゲット)」

……あれ、結局僕が戦った意味なくない? ……ま、いっか

「ところで獄寺君」

「なんだ、もやし」

「……君には、右腕というのは荷が重いなと思うな」

「なんだと!?!」

「そう、君には足の小指くらいで十分だ、左足のね」

「んだと? この髪の毛1本が」

「なに言ってるの、僕は右腕だよ? 机の角にぶつけられてシネ」

「お前は、最後には邪魔なだけの存在だろうが。散髪屋で刈られてシネ」

「ドクロがかっこいいとも思っているのかい、オシャレガンバリ

スト」

「てめーよりはマシだ、オシヤレ無関心者」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

髪の毛（1本）と小指（左足）（後書き）

ツナ 「なんでこんな仲悪いんだろ？」

リボーン 「さあな。それに、なんか見たことのある関係性な気がするしな」

刹那 「キノセイダヨ、キノセイ」

僕とツナと人生相談

Side 刹那

皆さんこんにちは、雪見 刹那です。最近色々面白いことが良くありますよ。この前は、笹川さんの喋らない死ぬ気も見れました。え、下着姿を見たかですって？ それは勿論、ツナに後頭部ぶん殴られたせいで一瞬しか見てませんよ。下着はしょうがないとしても、死ぬ気はもう少し見ていたかったですね。

さてさて、世間話はここらでお開きにして、本編に入りましょうか。小指に次いで、今度はあの人。

Side 武

最近何だが調子が悪い。スランプってやつだな。周りのやつらは、それでも俺らより上手いからいいじゃん、と言ってくれるけど、俺としては納得いかないんだよな。

って、あれツナじゃん。なんで、1人で掃除してんだ？ 雪見は来

てたよな。あいつなら、手伝ってくれるんじゃないのか？

まっ、いいや。折角だから、最近活躍が目覚ましいツナに相談してみるかな。

「……助っ人とーじょー」

Side 刹那

カキーン

「流石、山本」「お前は片手1本で打てよ」

「ははっ、悪いね」

これはあれだ。山本の自殺未遂イベントのやつかも。ってことは、ツナのチームは負けるな。で、掃除押し付けられて、助っ人登場の流れか……

どうしようかな……獄寺君のときは、我関せずを貫いたせいで、知らないところで酷い目に遭わされたんだよね。でも、僕が近くにいと話しかけて来ないって可能性もあるし……取りあえず様子をみて、途中から乱入しよう。

あ、僕の番だ……

カキーン

いえーい、ホームラン

………

………

………

………

授業中の野球はいいね。なんたって、あんまり動かなくていいんだもん。

さて、掃除は任せて、盗み見しようかな……

「助っ人とーじょー」

うん、やっぱりシナリオ通りだね。

「あ、山本!」

——— 漫画と同じなため省略 ———

「ツナ、俺どうすればいい」

あゝあ、ツナに聞いてどうするんだろうね。

「え〜と、やっぱりど……」

よし、今だ!!

「気分転換だね」

「うわっ、刹那!？」

「そういう時は、悩んでも泥沼化するだけだからね。少し遊んで気分をリフレッシュすればいいよ」

「聞いてたのかよ、何時からそこに!？」

「最初から」

「嘘〜!？」

嘘だよ、近くにはいたけどね。

「気分転換か、いいかしんねーな。放課後に、どこか行くか」

流石、山本。獄寺君とは違うな、話が分かる。

.....

.....

……

……

と言うわけで、ゲームセンターに到着。さーて、何をしようか……

「お、対戦しようぜ」

うぬ、格闘ゲーム？

「……」

「どうした、雪見？」

「刹那でいいよ」

「サンキュー、で、どうした刹那？」

「いや別に……そうだね、やろうか」

30秒後……You lose

「刹那……恐ろしく弱いな」

ツナくんのクセに……。ああ、そうだよ。弱いよ？ 僕はRPG専門なんだからね！！ ふう……。んだ。

「あははっ、そう拗ねんなって、な？」

拗ねてなんかないやい。ツナめ、絶対に許さな……

UFOキャッチャーだ。あれやろー、ワイイ。

ポチっとな

ウィーーン ポトツ

もう一度！！

ウィーーン ポトツ ウィーーン ポトツ ウィーーン ポトツ
ウィーーン ポトツ ウィーーン ポトツ ……………

「「……………」」

うがあああああああああ！！

「落ち着けて、あれ欲しいのか？」

「…………うん」

「よっしゃ、待ってろ」

ウィーーン ガチャ

「ほらよ」

ワイイ、アソパソマソだあゝ。山本君すげえゝ、キャー、イケメー
ン。

……………イラネ

「ツナ、やるよ」

「ええ~~~~~!？」

「ははっ、なんだよ、それ」

.....

.....

.....

.....

レッツ、バスケで1対1対1!!
3人で、一つのゴールを狙うんだよ。

ふふふ、ツナめ、先ほどの雪辱晴らしてくれる。

フェイントフェイントフェイントフェイントフェイントフェイント
フェイントフェイントフェイント

「うわぁ、痛え」

ふっふっふ、ツナよ。ひれ伏せ!!

「刹那、まだ根に持ってるの？」

「おし、隙あり。敵が1人だけじゃないのを忘れんなよ!」

「しまった!! でも、取り返せば良いだけだからね」

山本は頭のまで、ボールを持ち上げる。

え〜い え〜い え〜い え〜い ……

あれ、おかしいな。僕って確かに身長が高い訳ではないけど、低くもないはずだぞ? ……そうか、山本がでかすぎるんだよ!!

「シュート」

このスポーツ万能人間め

……………

……………

……………

……

「んじゃ、俺そろそろ帰るわ。今日はサンキューな」

「これくらいいいよ。俺も楽しかったし」

「右に同じ」

ツナは僕の左側だけどね

「じゃあな、また明日」

バイバイ

「僕たちも帰ろうか」

その時、後ろから呼ばれた

「ちやおツス、何だが嬉しそうだな」

「リボン！！　それが今日、クラスの人気者から相談受けちゃってさ」

「その山本だけどな、ファミリーに加えろ」

「なあ！？　無理無理、山本は今野球に燃えてるんだから」

「お前も燃えてみろ」

火炎放射機、ボォー

「あちちっ」

「そっちの燃えるじゃねーよ」

「俺のセリフを取るな！！」

ここで、言ってみたいセリフあったんだよね

「え、じゃあ萌えてみる？」

「そっちでもない」

目標達成!!

あゝあ、疲れた。今日はとっとと帰って寝よ

.....

.....

.....

.....

翌日

「大変だゝ、山本のやつ、昨日無理な練習したせいで怪我しちゃったらしくて、自暴自棄になって、飛び降りしようとしてやる」

驚いて、慌てて皆は屋上に向かっていく。

……えゝ、結局そうなの？

1人の女のコが近づいてくる。

「ツナ君達も、早くいこ？」

皆さーん、笹川さんの初登場だよー。それで、今回はこれで終りだよゝ

まあ、この後は、漫画通りに山本助けて、ハッピーエンドだったんだよ。

……ホント、僕の意味ないなー

僕と毒物専門家（前書き）

おはようございます。こんにちは。こんばんは。クロサマです。
折角の前書きなのでなんか喋ります。

でも特に話すことはありません。

あつ、そうですね。勝手にプロフィールとか言っちゃいましょうか。

僕の誕生日は2月9日、シャマルと同じみたいです。わーいわーい
え、それだけですけど何か？ これ以上は個人情報ですからね。自
慢したかったですよ？ え、あなたはツナと同じだって？

では本編どうぞ

僕と毒物専門家

今回は、あの女性が来ましたよー

Side ビアンキ

「ちっ、失敗したわ」

最初のジュースで決められなかったのはいたいわね。これからはどうしても警戒されてしまうもの。次はどうしようかしら。ピザ屋にでも化けようかしら……

「おはようございます、どうしました？」

なっ!？ いつの間に……声をかけられるまで、全く気がつかなかったわ。

「あのーあなた、毒サソリさんですよね」

マフィア関係者!？

「ツナを殺しに来たんですか？」

ボンゴレのファミリー？ 見つかったからには、始末しないといけ

ないわね。

「そうなら、手伝ってあげましょうか？」

え、どういうこと？

「んー、面白いことになりそうだなあ」

S i d e 刹那

「おはよう、ツナ」

「もやしてめえ、10代目になんつー口をきいてやがる」

「あ、山本もおはよー。腕大丈夫？」

「おう、もう大丈夫だぜ」

「おい髪の毛、無視してんじゃねーぞ」

「朝からうるさいな、もう少し落ち着けないの、小指？」

「あはは、お前らホント、仲悪いのな」

「野球バカは黙ってろ」

「黙るべきなのは小指の方じゃないの？ 机の角にぶつけられてシネ」

「誰よりも黙るべきなのはてめーだったな。散髪屋で刈られてシネ」
おっと、タコヘッドのせいで忘れるところだった。

「ツナ、今日クッキー持って来たんだけど食べない？」

「食べる、サンキュー」

ふっふっふ、ヴァカめ。おっと、持田先輩みたいになっちゃった。

パカッ、ブショワーーーー

「……なにこれ」

「クッキー」

ポイズンクッキングバージョンのね。

「まっまさか、これは……」

そうだ、獄寺君の弱点の、姉貴の料理だ！！

「さすがにこれは、俺も喰いたくねーな」

別に山本は食べても食べなくてもいいよ。食べてくれると面白くていいけどね。

「てめー、10代目になんつーもん食わせようとしてやがる」

えー、なんのこと？ 僕分かんない

「獄寺君、これ知ってるの？ 朝にも、女の人に似たようなやつわたされたんだよなあ」

「知ってるもなにも、腹違いの姉貴——毒サソリビアンキのポイズンクッキングですよ」

「なあっ!？」

「もう1度聞けど、どういうつもりだ」

あー、聞こえない

「なあ、毒サソリとか、さっきからなんの話してんだ？」

そう言えば、山本はそうだったね。

「リボーン、ドーしょー」

「なんだ、ビアンキのやつもう来てたのか」

知ってたのかよー！

「俺も、ツナが学校に行ってる間に、子分達から聞いて知ったんだぞ」

子分ってなんだろう？

「その人ってどういう人なんだよ。ポイズンクッキングだとかは獄寺君に聞いたけど、どうしてそんな人に俺が狙われなくちゃならないんだ」

ピンポーン

こんなときになんだ……母さんいないんだった。出なきゃ

パタパタパタパタ

「どなたですか？　って刹那？」

「ヤッホー、連れてきたよ」

連れて来たって、誰を？

「ポイズンクッキング——！！」

「んなぁ——！！？」

Bannon

リボーンが、ビアンキが持っていたピザを撃ち落とす。

「……リボーン。久しぶりね、会いたかったわ。あなたのこと、忘れられなくて……また一緒に仕事をしましょ！！」

「無理だぞ。前も言っただろ。今はツナのカテキョーしなきゃなんねーからな」

「やっぱりそうなのね。……今日は帰るわ。ボンゴレ10代目が、不慮の事故で死んだときにまた来るわ」

えー、俺そんな理由で狙われてたの！！？

「それじゃあ、帰りましょうか。次の作戦を立てましょう。じゃ、ツナ。また明日」

ちょっと、刹那？ どうしてそっち側に？

刹那は答えてくれなかったけど、代わりにリボーンが推測してくれた

「どうせ、面白そうとか、そんな理由だろ」

きつとそうだ、と思った。

次の日

「家庭科で作ったおにぎり、男子どもにくれてやるー!!」

ときどきある、変わったイベント。3人は女のコに囲まれている。皆カッコ良くて、獄寺君と刹那は頭も良くて運動もできるし、山本の運動神経はずば抜けてるからな。俺も、京子ちゃんのおにぎり食べたいなあ。でも……

「10代目、ここで絶対に飯食べちゃいけません。こんなときに、姉貴が何か仕掛けて来ないわけありませんから」

そうなんだよなあ。……でも、ポイズンクッキングって見た目で分かるじゃん

「口を開けた瞬間、中に投げ込まれるかもしれませんから」

その時、誰かに背中を押され、丁度京子ちゃんの前に出てきてしまった。

「お、ツナ積極的だな」

なんて山本が言う。

「あ、ツナ君。おにぎり食べる？」

嘘っ、ホントに!?!? でっでも……

「あ、しゃけ嫌いだったかな……」

京子ちゃんがしゅんとしてしまう。

「そっそんなことないよ、大丈夫。ありがとう!!」

もらっちゃった。見た目ポイズンクッキングじゃないから大丈夫。

「いただきます」

突然、叫び声が聞こえた。

「ぐはぁ、そこにいるのは姉貴!? ……まさかっ」

え、なに?

「耐えろ俺!! いけません10代目。それはポイズンクッキングです」

でも、見た目は……

「外じゃありません、具です!!」

あっ!!

もう半分位、嚙んじやってるんだけど……

「すみません、10代目!!」

獄寺君に腹を殴られた。思いつきり……

「グヘー！？」

なんとか吐き出せた。でも、俺は衝撃で吹っ飛ばされて、大量のクラスメイトを巻き込んで倒れた。つまり、同時に食べようとしていた人はおにぎりを落とし、女の口はお盆ごと落とした。

遠くに陣取っていた刹那以外は誰もおにぎりを食べることは出来なかったという。

その後、俺だけ皆に怒られた。

因みに、ビアンキとはちゃんと和解することができた。

僕と毒物専門家（後書き）

ビアンキの話なのに、出番すくないですね。

まっ、いつかWWW

ツナとアホ牛（前書き）

勇者と魔王、どちらかの力を貰えるなら普通に魔王を選びます、クロサマです。

将来的にはみなさん。僕のことはクロサマ様とでも呼ぶがよいです。

では、本編をどうぞ。

ツナとアホ牛

Side 刹那

ツナの家に行くのは、ビアンキさんの時ぶりかな？ あの時、中まではいらなかったし、そう考えればもったかも。そう言えば、ビアンキさんって原作通りにツナの家にいるんだよな、会えるかな？

って、あれ？ 木の上なんかいる……あれってまさか……！！

Side 綱吉

今は勉強中なんだけど、これってやつぱりおかしいよな。なんで横に起爆装置がセットされてんだよ……

「リボーン、今度は前みたいに誘爆とかしないんだろ？」

「なんだ、間違えること前提なのか」

「そうじゃないけど、もしそうならまた大変なことになるだろ」

「安心しろ、多分大丈夫だぞ」

多分じゃ安心できないんだけど……

はぁ、とため息をついて、何となく外をしてみる。

「……………」

気のせい気のせい……よし、もう1度

「……………」

なんか変なガキがいる、モジャモジャなガキがいる、何あれ!!

「久しぶりだな、リボーン。ボヴィーノファミリーのランボさんがお前のことを殺しにきたよ」

リボーンの知り合いかよ!!

「死^ちにさらせ」

カチツカチツ

なんも起こらないんだけど……

「そうだった、昨日よーいどんごっこやって、弾全部使っちゃったんだっ」

バカだー、バカがいるー!!

その時

バキバキバキイ……ドッシーン

あー、木が折れた……

「リボーン、なんだよアイツ。お前の知り合いなんだろう？」

「あんなやつ知らねえぞ」

「でもアイツ、久しぶりって言ってたじゃん」

「だとしても、ボヴィーノってのは弱小マフィアだからな。無視しろ」

「んなっ!?! そんなこと言ったって、向こうは止めないだろ。お前を狙って来たんだから、お前がなんとかしろよ」

「ツナ、俺は格下の相手はしねーんだ」

カッコいいっ、でもそんなの知らないよ!!

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン
ポンピンポンピンポンピンポンピンポン

1階から声が聞こえる

「どなたですか……きゃ!?!」

「がはははは、作戦成功だもんね」

ドンッ、とドアをあけて侵入してくる。

「久しぶりだな、リボーン」

「ツナ、次はこの問題だ」

完全無視かよ。

「死ねー」

ナイフを構えてリボーンに襲いかかる。

……ヒョイツ、ずざざざざ

「……がはははは、ボヴィーノファミリーの5歳のヒットマンで、大好物はブドウとあめ玉、イタリアのバーでリボーンと会ったランボさんは何かにつまずいて転んぢまったぞ」

一所懸命、自己紹介してる……

「ということで、いようリボ……」

パンツ、「ぐぴゃ!？」ランボを吹き飛ばしてまたまたドアが開いた。

「なんか、牛柄の服を着た子供が入って来なかった？」

刹那ー、タイミング悪いよっ!!

「来たけど……」

「どこっ!？」

そこ、とドアの裏側を指差す。

「え……? うわぁ、ランボさんごめんよ!！」

謝った瞬間に、ランボは刹那にぶつかって、またリボーンに突進する……返り討ちにされるに決まってるのに、バカだ。

「うおっ、あぶなっ……」

避けるために、刹那が体制を崩してしまった。

ガシュッ

あ、起爆装置のスイッチが………ドカーン

「ぐぴゃー」

刹那、お前帰った方がいいよ。この子と相性悪すぎるよ……

それでも刹那は、ランボに近づいていく。が、凄まじい拒絶で追い返されてしまった。そりゃ、あれだけ短時間の内に、同じ人間のせいで酷い目に遭えば……

「……………(涙)」

悲しみすぎて、キャラ壊れてるよー?

その後は、自分で投げた物を悉く跳ね返されて、額にナイフがささるわ、手榴弾で爆破されるはで騒がしいし、拳句の果てに母さんに面倒みるように言われて夕飯と一緒に食べることになってしまった。そう言えば、ビアンキはどこ行ったんだ？

あゝ、空気悪っ……

リボーンは喋らないで、ずっと食べてばかり。刹那はあれから喋らないし、ランボはリボーンの間を探して挙動不審になってるし……予想通りと言うか何と言うか、沈黙を破ったのはランボだった

「隙あり、死ねえー！！」

グサツ

……フォークって刺せるんだ。

「が・ま・ん……………びゃーーーん」

我慢出来てないじゃん。って、モジャモジャの中からバズーカ出てきた……！！

撃つんじゃないよな、そんなことされたら、流石に家壊れちゃうよー！！

「ツナ、多分大丈夫だと思う。あれ、きっと10年バズーカだから……」

刹那がやっと喋ったー。って、10年バズーカってなに？

ランボは取り出したバズーカを自分に向かって撃ち出した。

「えゝゝゝ!？」

「やっぱりあれは、10年バズーカだったみたいだね」

ランボを包んでいた煙が晴れていき、人影が映る。煙から抜け出した姿は、モジャモジャの子供ではなく、伊達っぽい兄さんだった。

「お久しぶりです、若きボンゴレ。そしてセツナさん。泣き虫だったランボです」

嘘ーー!？　　どういことがあれば、あれがこれになんのおー

「10年バズーカ、名前の通り10年後の自分と入れ替える特殊弾。あれは正真正銘、10年後のランボさんだよ」

「んなーー!？」

「その通りです。……よう、リボーン。見違えちゃっただろ」

「くっちやくっちゃ」

なお無視かよ!？

大人ランボは一瞬停止したけど、微笑むと頭に角をくっ付けた。

「サンダーセット」

そういうと、角に雷が落ちた……って、なんでー、ここ家の中な

んだけどー！？ 今日も、叫んでばかりだ。

「俺の角は100万ボルトだ」

エレットウリコ・コルナータ
「電撃角！！」

……ガチャ、ドアが開いた

「ツナ、私の夕飯を用意しなさい」

ビアンキーー！！

「……ロメオ、生きていたの！？」

え、どういうこと？

「しまった。大変だ、ランボさん逃げてー！！」

どうしたの、刹那！？

「ポイズンクッキング、死ねえー！！」

えゝえええええつつつ！？

「が・ま・ん……ガクッ」

ランボーー！！

今回の落ち

大人ランボが、ビアンキの昔の恋人であるロメオにソックリだったらしく、つい殺したくなってしまったみたい。

そんなこんなで、何故かランボも家に居候することとなった。

僕と変な女の子（前書き）

器の小ささに誇りを持っています、クロサマです。

ある本屋 「オオカミと香〇料どこにありますか？」と聞いた人が
おりました。

その横で Kさんは思います 「聞く前に探せ。よく見ろ、目の前
にあるだろうが！！」

同じ人が 「傷んでいると値段が安くなるんですよね」 「この本
かなり傷んでるんですけど高いんですよ、納得いかないなと」 勿
論Kさんは 「じゃあ、買うな」

では、本編をどうぞ

僕と変な女の子

Side 刹那

今日も、いつも通りにツナ達と登校中。ツナとは、いつも通りに何でもない普通の話をして、リボン君は塀の上をてくてく歩いている。いつもと違うのはここから。

うわー、女のコが塀の上歩いてくる……かなり、シユールな絵だなー。

やっぱり来るんだ

「はひー！ー！ー！」

うおっ、落ちた。いつの間にそこまで話が進んだんだろ。というか、着地上手いなあ。流石、新体操部だね。

「あの、ギュートしてもいいですか？」

「ダメだ。俺に触るんじゃない。俺は殺し屋だからな」

「……………」

パァーン

……あれ、僕？ ツナは？

「なんてこと教えるんですか。赤ん坊はピュアなハートの持ち主なんですよ。それなのに、殺し屋なんて……赤ん坊のいたいけな純情を腐ったハートでデストロイですか!？」

おー、名ゼリフ聞いた。でも痛いなー。フォローしとかないとまた殴られるかも。

「……知らないの？ 最近赤ちゃんの間では、殺し屋ごっこがブームなんだよ?」

バキィッ

女のコにグーで殴られた……ツナ、笑ってごめん。結構キツイね。

「そんなわけじゃないですか、バカなこと言わないでください。あなた、この子のお兄ちゃんなんでしょ?」

ツナじゃないの?

「3人とも一緒によく歩いてますよね、知ってるんですよ。見るからに、リボンちゃんと仲良いのは貴方でしょ」

そう言えば、山本ほどではないけど、ダメ刹那って呼ぶわりには、僕の頭に座るときあるんだよね。触るだけで殴られたりしなくてラッキーって思ってたけど、こんなところに穴があるとは思わなかった……!!

他人って言ったら、ツナは『他人の赤ちゃんをデビル化なんてー』とか言われたんだよね。なら……

「うん、そうだよ」

ゲシッ、バキィッ

「俺をお前なんかの兄弟にすんじゃねー」

「なんでワザワザ、弟に変なこと教えるんですか!!」

……否定した方が、リボーン君に蹴られないだけましな選択肢だったのか。

「へっへっ、だーまさーれたー」

バキィッ

いてて、何回目だ？

「ふざけないでください。もう怒りました。リボーンちゃんを貴方の傍に置いておくのは教育上良くありません。私が連れて帰ります」

凄いこと言いだしたなあ……

「それは無理だぞ。俺はこいつらをちゃんとしたマフィアに育てる為に、傍にいなきゃなんねーからな」

バキィッ

あーもう嫌だ、同じところばかり殴るんだもん。
それとリボーン君、前はお前は俺の生徒じゃないって言ってなかった

たっけ？

「マフィアなんて教えて、それにそうやってリボンちゃんを拘束するなんてさいてーです」

話ができない子だなあ、なに言っても殴られそうな気がする

「今日はもう行かないと遅刻してしまうので帰りますが、絶対にリボンちゃんは助けて見せます。覚悟しておいて下さい！！」

ラッキー。それにしても、なんか凄く恨まれちゃったな。まあ、いっか。

S i d e ハル

その夜。私は、早速行動をおこしました。具体的には彼らを尾行したんです。

「リボンちゃん、私が解放してあげますからね」

「それには、私も賛成だわ」

うわっ、いつの間に？　凄く綺麗なひとですね。彼らの知り合いでしょうか。

「今日は、彼処の屋台で語りあいましょう。奢ってあげるわ」

彼女はビアンキさんというらしいです。リボンちゃんや、彼ら、ツナさんと刹那さんというらしいですが、その3人の話を幾つか聴かせてもらいました。昔、リボンちゃんと殺し屋をしていた時の話をしてくれた時、泣き出してしまつて大変でしたよ。

……ちょっと待ってください。お姉さんの話はホントなんですかー
ー？

S i d e 刹那

ガチャン、ガチャン

なんか変な音する。

あー暑さで耳鳴りがするー、なんてことではないんだろうな……

「昨日ぶりです。頭がぐるぐるしちゃって、眠れなかったハルですよ」

「……寝不足だとそんな格好しちゃうの？」

「違いますー。もし、刹那さん達がホントにマフィアなんだったら、

貴方達は強いはずだと思うのですよ」

「……へー、大変だね」

じゃあね、バイバイ

「はい、大変なんです。と言うわけで私と勝負してください。貴方達がマフィアであるかどうか確かめさせてもらいます」

嫌だ

「しょうがないなあ、ちよつとだけだよ？」

あ、つい承諾しちゃった……女のコの頼みって断るの苦手なんだよね。

「それでは、いきます。えーい!!」

三浦さんは、ゴルフクラブを振り回してくる。剣道の防具つけてるのになんで竹刀じゃないんだろ。

彼女はそれを無理してやっているようなので、軌道は単純なもの。上半身の動きだけで避けていく……うわっ足狙うのは反則だよ。

「どうしたんですか、避けてばっかり。私相手に手も足もでないんですか？」

そうなんだよねー。だって、女のコに手をあげるなんてナンセンスだもん。だからと言って、傷付けないように拳圧でー、なんてことも出来ないし。

とその時

「待ちやがれアホ牛!!」

「がはははは、獄寺なんかには捕まんないもんね……あー、刹那めっけ。遊べー!!」

ランボさんが鬼の形相の獄寺君を引き連れてやってくる。その足の長さじゃ追いつかれるよ……

「おら、捕まえた。覚悟しろよ!!」

「あらら、あれ何かしら？」

「あゝ？」

目潰しー。獄寺君、そこで振り向いちやだめだよ……

「てめー!!」

獄寺君の回し蹴りが、ランボさんの頭に炸裂する。モジャモジャのせいで、体の 2／3 が頭に分類されそうな気がするけどね。

蹴りの勢いで、ランボさんはそのままふっとんで行く。ってここ橋の上何だけどー!？

「危ない!!」

やっぱり行くのね!!

川に落ちそうになったランボさんを捕まえるために川に落ちそうになった三浦さんをなんとか掴むことに成功する。……ああもう、防具重いよ!!

「刹那さん、なんとかこの子だけでも……」

「ランボさんは腕をよじ登って!!」

「（コクコク）」

なんとかランボさんは大丈夫だったけど、この侍ガールはどうしよう。この態勢、力入らないよ。はっ、そうだ。

「獄寺君、手伝っ……」

ツルツ

「しまった!?!」

「はひひひひひひひひひひ!?!」

ドボーン

こんな暑い日に、外で防具なんて着るから、汗でっ……

「あわわ、防具が重くて……泳げなっ……」

「ええい、為せばなる!!」

女のコとは言え、防具つけた人なんて川岸まで運べるかな……

.....

.....

.....

.....

「ぜえぜえ」

死ぬかと思った。ツナは死ぬ気でかつスクリュー弾使ってたんだよ？
それ無しでやったんだから誉めてもらいたいかな……

「……すみませんでした。それとありがとうございます」

「ホントに死ぬかもしれなかったんだよ。反省してね」

「……僕に捕まって、ですか」

「!?!」

何？ 僕も、ツナと同じ様に恥ずかしい思いしなくちゃならないの！？

「安心して、僕が絶対に助けて見せるから……ぷぷっ。そんなセリフ言う人がいるとは思いませんでした」

だあああああ、やっぱり!!

「でも、カッコよかったですよ、刹那さん」

……え？

「ハルは刹那さんに惚れてしまった模様です。今は、刹那さんにギョツとしてもらいたい気分です」

まじで？　今回も結局は原作通りになると思ってたのに……ここで変わるの？

どうしよっ、こんなの初めてだよ。確かに三浦さんは可愛いと思うけど……僕には、釣り合わないんじゃないかな。そうだよ、例の吊り橋効果だ。

ギョツ

どうだ、僕はこんなに手の早い男なのさ。君の思いは気の迷いさ、これで幻滅して我に返るんだ。

「はひっ！？　……／／／／」

あれ、失敗？　かえって悪化した？

それに、この状況は……

「見て、あの子達ずぶ濡れで抱き合ってるわよ」　「最近の若い子はやーねー」　「（ヒソヒソ）」

しまったー、どうしよー！！

「てめーら、いつまでやってんだよ。気色わりー」

おお、獄寺君！？

「がはははは、ツナ達に言ってこよー。バイプー」

うわあああああああ！！

今回の落ち

翌日、ツナというか山本発信で、クラス中に噂が広まり、大変なこ
とになりましたとさ……とほほ。

僕とボクシング（前書き）

クロサマです。

そろそろ、黒曜編に入ろうと思ひまして、初めてアクションを入れてみました。こんなに難しいとは……（涙）アクションを見慣れたかた、駄文でごめんなさい。見たことがないかた、これが最高峰のアクションです（嘘）

そして、日常編でディーノやら、脇役的キャラクターとの話を期待していた方。申し訳ありませんが、飛ばさせていただきます。ネタを思いついたとき、番外編的な感じでアップするかもしれません。

いい加減にまえがき長いよと思う人も多いかと思いますが、もう1つだけお願いがあります。それは……刹那の声優イメージの募集です。皆さんがこの作品を読むとき、刹那にどういうイメージを持っているか気になります……声優という型でお聞きしたいと思います。え？ 趣味じゃないですよ？ 声優名のみ、ドンツと書いて頂ければ嬉しいです。数がある程度あれば、発表とかもすると思います。

では、長くなりましたが、本編をどうぞ！！

僕とボクシング

Side 了平

「死ぬ気で1本とる!!」

凄まじい気迫だった

最近、京子もあやつの話をよくする。素晴らしい話ばかりだ。

「……………」

「どうしたの、お兄ちゃん。ご飯、冷めちゃうよ?」

うむ、そうだったな。

「いただきます!!」

ぐおおおおおおおおお!!

「ごちそうさまでした!!」

パンツ、と茶碗をテーブルに叩きつける。

極限にボクシング部に欲しいぞ。沢田 ツナ!!

S i d e 刹那

「始業式から寝坊なんて大変だね、ツナ」

いつもより大幅に遅れて通学路を歩いている。これは、走っても遅刻だろうな。まっ、構わないけどね。

「ごめん、寝坊しちゃって」

「いいよいいよ、始業式なんてめんどくさいし」

校長先生の話って長いし、そのくせ、つまんないとかじゃなくて当たり前のことを偉そうに言うから、嫌いなんだよね。

「大体、待たなければ僕は遅刻しなかったからね」

確信犯です

「ツナならともかく、刹那、お前ならまだ間に合うだろ」

堀の上から、リボン君が言う

「だからツナ、お前は死ぬ気で行きやがれ」

バン

リ・ボーン
「復活!!」

とツナはダダダダーと行ってしまった。僕は、あれを追わなくちゃならないのかな？

「刹那も早く行きやがれ。お前だけ遅刻することになっちまうぞ」

無茶言わないでほしーな。まっ、行くけどさ。

.....

.....

.....

.....

どこまで行っちゃったんだろ、ツナ。全然追いつけないなあ。
あれ、あそこにいるのは.....

「おはよー、笹川さん」

少し先にいる女のコに声をかけた。.....間違いだったらどうしよう。

「あっ、おはよう、刹那君」

よかった、本人だった。

「あれ、どうしたのその鞆」

「これ、お兄ちゃんのなの。途中で落としちゃたみたいで、届けようと思って持ってきたんだ」

どういう状況で通学鞆を落としたんだと思うんだろ……

「どうして落としたんだろうね」

わかってなかった!!

「きつと重戦車みたいに走る人を捕まえようと腕を掴んだら、そのまま引っ張られちゃって、その拍子に落としちゃったんだよ」

「そうなんだ!!」

信じちゃったー、事実だけどね。

「あつ。あそこにいるのがそうじゃないかな」

「ホントだ。お兄ちゃん!!」

「うむ、京子ではないか。どうした？」

「お兄ちゃん、道に鞆落として行ったよ。気をつけてね」

「そうか、すまん」

ツナだけ取り残されている。ふふ、この僕が君の疑問に対する答え

を教えてくださいんぜよう。

「この先輩、笹川さんのお兄さんなんだよ」

「えゝええええええええ！？」

そりゃ、そうだよな。この2人、タイプが違いすぎるもん。片や天然系ほんわか女のコ、片や熱血極限男だからなあ。

「そうなの。ツナ君、お兄ちゃんをつまらないボクシング談義なんて、聞き流していいからね」

「……ボクシング？」

「そうだ、自己紹介が遅れたな。俺はボクシング部主将、笹川 了平。座右の銘は“極限”だ！！」

ドーン、とか効果音が聞こえて来そう。

「沢田、お前の活躍は知っている。我がボクシング部に入れ！！今日の放課後に部室に来い！！」

……行っちゃった

それにしても、凄い迫力だったなー。

「ごめんね、ツナ君。嫌だったら断っていいからね」

「あ、いや、うん」

「でも凄いね、ツナ君。あんなに嬉しそうなお兄ちゃん見るの久し

ぶりだよ」

いやいや、凄いのは笹川さんじゃないかな。そこまでナチュラルに、断りづらく出来る人いないよ？

Side 綱吉

放課後、ボクシング部部屋前

どうやって断ろう。お兄さんの申し出を断って京子ちゃんに嫌われたくないし……。

「さっ、入りましょう、10代目」

「あっ、うん」

なんか皆ついてきちゃったし。あれ、そう言えば……

「刹那いないんだ。こんなときは絶対に来ると思ったのに」

「そうな。なんか用事でもあったんじゃないの？」

用事があったても、すっぽかしそうなんだけどな……

「10代目、あんなやつ気にすることありませんよ。どうせ、どこかでトリートメントしてるに決まってます」

そう言いながら、獄寺君は部室のドアを開けた。

「あっ、ツナ遅かったね。あれ、皆も来たんだ!!」

既にいた――!!

「ちっ」

獄寺君、舌打ちしないで、怖いから。あれ、なんだかボクシング部の人たちボロボロな様な……

刹那は、俺の視線に気付いたのか

「ん、これ？ これにはちょっと事情があってね」

事情？

Side 刹那

「ボクシング部行くんだってな」

「うん、笹川先輩がツナに入部して欲しいんだってさ」

昼休み、1人でいるところをリボン君に話かけられた。どうしたんだろ、そんなの、ワザワザ僕に話しかけるほどのことじゃないと思うんだけど。

「刹那、ツナのファミリィとして、ボクシング部に危険がないかを確かめに行って来い」

……それってつまりは

「僕の力試しってことかな？」

「よくわかったな。そういうことだぞ」

僕、ボクシングのルールすら知らないんだけど

「獄寺の時は、中途半端で終わっちまったからな」

「そうだったね。でも、残念。今日は僕、用事があるんだ」

グワシッ

リボン君にハイキックをされた。

「つべこべ言わずに行きやがれ」

「……了解」

……

……

……

……

「たのもー!!」

僕は今、ボクシング部にいる。昼休みに赤ん坊に脅されたからだ。今回はじつくりと、フィクションのノンフィクションを楽しもうと思っていたのにな。

僕を見つけた笹川先輩がこちらを向く。

「貴様は……誰だ!!」

えー……酷くないですか？ 朝に会ったばかりですよ。

「……はじめまして、雪見 刹那です。ツナの友達なんですよ」

「沢田の？ だったら沢田はどうした!!」

んー、ツナしか眼中にないって感じだなー。

「ツナはあとから来ますよ。でもその前に、僕とバトってくれないですかね」

「む、何故だ!?!」

ありゃ、笹川先輩なら四の五の言わず戦ってくれると思ったんだけどな

「笹川先輩がツナと戦えるだけの实力があるか試してこいってツナ
の家庭教師に頼まれちゃったんですよ」

「なるほど、そういうことなら!?!」

「ちょっと待ってください、主将!?!」

部屋の中で見守っていた部員達が集まってきた。それなりに部員は
いるみたいだ。

「さっきから聞いていれば、主将に沢田と戦う資格があるかだど?」

ああ、そういうことか。つまり、自分よりも強いと認める人間に実
力があるか、なんて聞いたせいで、尊敬していた人をバカにされた
怒りってのと自分達のプライドを傷付けられたってことで、来たの
ね。

「えっと、じゃあ……貴方達も僕のこと試してください。あ、面倒
なので全員でかかって来てくださいね?」

「なんだと!?! ……いいだろう、後で吠えずらくんじゃねえぞ」

ボクシング部部員が襲いかかってきた。ボクシング部部員Aの攻撃
……いやいや、ふざけてる場合じゃなかった。

6人ね……なんとか大丈夫かな。

「余裕ぶっこいてんじゃねえ、喰らえー!!」

部員Aは正面から向かって来て、顔面にストレートを打ち込んでくる。僕は、首を傾げることでそれをかわし、その流れのまま腹に蹴りを叩き込む。

「ぐはあっ!!」

1人目

「てめえ、卑怯だぞ!!」

「いや、僕ボクシングのルール知らないし、多対1の時点でこれはただのケンカでしょ?」

次は僕から前に出る。フェイントを折り込みつつ、撃つ!!

「ぐうっ」

2人目

「隙ありっ」

背後から声がする。君達だって卑怯じゃんか。咄嗟に頭を下げてパンチを避ける。とそこには、他の拳が待ち構えていた。

「ブラボー、ナイスチームプレー」

喰らってはあげないけどね。

部員Dのアップパーが自分の顎に当たる寸前、体を半歩引くことになんとか避ける。有効範囲が狭いアップパーじゃなかったら当たってたな……

そして、がら空きになった胴体に思いっきり拳を突き出す。

「ガハッ」

3人目

後ろにいた部員Cも、回し蹴りで落とす

4人目

「くっ、もう1度挟み撃ちだ。今度は同時に行くぞ!!」

部員Eと部員Fが左右に分かれて向かってくる。言葉の通り、同時にストレートが僕に向かって伸びてきた。

ギリギリまで引き寄せ……避ける!!

「なあっ!?!」「避けっ!?!」

「挟み撃ちは、味方どうしの相討ちに気を付けたほうがいいかな」

これで全員。

疲れた……

「極限に素晴らしいぞ!! 雪見と言ったな。貴様もボクシング部に入れ!!」

なるほど。こういうことも起こるのか……

「嫌です!!」

男相手なら断れるよ

「なぜだ、沢田とお前ならば日本1も夢ではないぞ!!」

「そんなん知りません!!」

「そうか……」

思ったより引き際がいいな……よかった

「ならば、俺と戦え!!」

よくなかったー、なんで!?

「そして、俺が勝ったら入部しろ!!」

横暴だよっ、酷いよっ

「では、行くぞ!!」

「ちょ、待って」

部室のボスが自分からやってきたー!!

「しっ!!」

ビュン

先ほどのパンチとはレベルの違う、鋭い拳が突き出される。
真っ直ぐな攻撃で避けるのは容易い。でも、その人の性格が出ていいパンチだ。
こういう人はかなり好きだな。

「俺の極限ストレートを避けるとは、さすがだな!!」
しかし、これならばどうだ!!」

先ほどのパンチを連続して撃ってくる。
これが、極限ラッシュってやつかな。

最初は避けられるけど、後々は厳しいな。
なら……僕は先輩の拳を手で受け、その衝撃を受け流すように回転する。

「何だと!?!」

相手のサイドを取る。そして、顔面にパンチを打ち込む。

「適当に右パンチ!!」

「ぐはあああっつ——!!」

「……僕の勝ちですね、先輩」

「くう、無念……」

とその時

ガチャ

「……トリートメントしてるに決まっています」

獄寺君たちが入ってきた

「あつ、ツナ遅かったね。あれ、皆も来たんだ」

ツナが周りを見ている

「ん、これ？ これにはちょっと事情があつてね」

「お前たちが来る前に、刹那のやつが全員のしちまっただぞ」

「リボーン！！ どういうこと？」

どういふこともなにも……

「しょうゆうこと？」

「ははっ、刹那ってつえーんだな」

それで済みますか山本君

「けっ、調子に乗んじゃねえぞ。右腕は俺だからな」

予想を裏切らないな、獄寺君は……

「そうそう、笹川先輩。悪いけど、ツナのことともあきらめてください。入りたくないみたいなんですよ」

「うむ、そうか」

意外に引き際がいいな……よかった。

「今は引こう。しかし、俺は極限に諦めんぞー。いつか絶対にお前たちをボクシング部に入れてみせるー!!」

よくなかった――!!

「でもまっ、とりあえず一件落着かな、ツナ？」

「うん、ありがとう刹那!!」

どうだ獄寺君、僕は役に立ったぞ。

………

………

………

………

帰り道

「普段と大分、雰囲気が違ったじゃねーか」

「まーね。いつも緩くはいられないよ」

「どっちが本物だ？」

「んー、どっちも」

「だろうな」

ホント、リボーン君には敵わないな

僕と風紀（前書き）

どうも、クロサマです。

最初のころのやつと読み比べると、今のやつ、全く雰囲気がいま
すね。正直自分ですら、刹那が毎話同一人物とは思えません。そん
ないいい加減な作品ですが、読み続けていただけると幸いです。

では、本編をどうぞ。

僕と風紀

S i d e 刹那

「あの人とワザと逢わせたのか!？」

僕が、屋上の入口の上でお昼寝をしていると下の方から声が聞こえてきた。この声はツナかな。

「ああ、危険な賭けだったけどな。やっぱりあいつ、つえーな。ファミリィに加えればきつと、相当力になってくれるはずだぞ」

下を覗くと、ツナ・山本・獄寺君・リボーン君が丸くなって話している。リボーン君以外は、何故かボロボロになっていた。

「でも、いくらこちらの不良のトップと言っても、あそこまでつえーとは思わなかったな」

と言って山本は笑い、獄寺君は悔しそうにしていた。

「それにしても……」

なるほど。今回の相手はあの人だったのか。

最強風紀委員長、雲雀 恭弥

「そりゃあ僕には荷が重いよ……」

僕は3人には気付かれない様に、屋上から退散した。もちろん、気付いているのはリボン君である。彼に気付かれないとか、それもまた、僕には荷が重いんじゃないかな。

S i d e リボン

入口の方から気配がする。こいつは刹那だな。あいつがこれを知いたらどうなるか。考えるまでもねーな。おそらく、雲雀の所に行くだろ。この前、了平との戦いを見せてもらったが……あいつじゃ、勝ち目はねーだろうな。それは、異世界人であるあいつなら、自分でわかってるはずだ。

どーゆーつもりで行くのか、見させてもらうとするか。

僕の目の前には、応接室の扉。我ながら頭が悪いな。なんでこんなところ来たんだろ。まあ、友達がボコボコにされたのに黙っていられるほど、僕は大人じゃないんだよね。

さて、突っ立ってても仕方無いし、中入ろー

「失礼しまーす」

やっぱり、応接室って豪華だね。家具のせいかな。ふかふかそうな黒いソファー。あれは高いんだろうか、それとも、見かけだけなのかな。

「応接室になにか用かい？」

直視したくない現実が声をかけてきた。いっそ、居なくなっていてくれたらよかったのに……そうすれば諦め、もとい言い訳がたったのにな。

「さっき、友達がここに来たときに忘れ物しちゃったみたいで……」

「さっきの？ ああ、それじゃあ、あの赤ん坊と知り合いなのかい？」

「ええ、まあ」

そういやこの人、リボン君にご執心だったかな。

「それで、忘れ物って言うのは？」

あれ、なら君を咬み殺せば、また赤ん坊が出てくるね、とか言っ
て襲いかかってくるかと思っただのにな。

「君は、今のところは風紀を乱していないし、群れてもいないから
ね」

「獄寺君はともかく、あとの2人は乱していない気がするんですけど
ねー」

「飛び降り騒動、下着姿で校舎内を駆け回っているよ」

そうでした、乱しまくりですね。

「で、忘れ物は？」

「ああちよっと、殴られた分だけ、殴り返すのを忘れてたみたいで
す」

まあ、つまり

「僕に仕返しにきたと……」

「エレス コレクト」

たしか、メキシコ語かなんかで『正解だ』って意味だったはずっ
つ！！

「そうか、それなら僕は安心して、君のことを咬み殺そう」

そう言って、仕込みトンファを構えた。

「それじゃ僕は、噛み付き返して、喰い千切ってあげますよ!!」

心の中では、『ヒィー、恐いっっ』と思ってるけどね。

バトル開始直後、雲雀先輩は行動を開始する。決して狭くない距離を2歩で詰め、トンファを振るう。

「うわっ!？」

速っっ!？ なにあれ、人間業じゃないよ!!

なんとかかわせたが攻撃は止まらない。

動きを最小限に、とかいう理由じゃなく、肉体的な限界で全てをギリギリでかわしていく。

「わお、なかなかやるね」

誉めてくれたお礼を言いたいところだけど、そんな余裕はない。今だって、一種の反射神経のようなもので、なんとか避けているに過ぎないのだ。

しかし、これはまずいな……このまま、この動きに慣れたら

「これでどうだい？」

「くうっっ!!」

パターン化された動きは……フェイントに対応しづらくなる!!

腹部にトンファーを喰い、後方に吹っ飛ばされる

「……………」

「早く起き上がりなよ。僕の攻撃がヒットする瞬間、自分から身を引いたから、ダメージはほばないだろ」

……バレたー!!

「……返事がない。ただの屍のようだ」

「屍なら、もっとコンパクトにして埋めよう」

しゅぽっ

僕は制服についた埃を払う。

「雲雀先輩、勝負はこれからですよ」

僕は、雲雀先輩に向かって飛び出し、顔面に拳を突き出す。が、悠々と避けられてしまった。元々、顔なんていう小さいのに、実力的に劣る人間が攻撃をあてられる訳がないので特になんとも思わない。続けざまに拳を繰り返す。

「笹川先輩必殺、極限ラッシュー!!」

やば、この技めちゃくちゃ疲れる。あの人、こんなのをあんな余裕

の表情でやってたのか……

しかし、それもやっぱり、簡単にかわされてしまった。……この人強すぎるよ。どうやって勝てばいいの？

「こんなものかい？」

ええ、はい。こんなもんです。

やっぱり、あれか。予想外の動きで不意打つしかないかな。しかも、1回で……

「ならこれで終りだ」

先輩のトンファーが僕の顎を狙う。

なら、僕は……

その手を取り、その力を利用して回転する。

笹川先輩の時にも使った、返し技だっっ!!

「喰えええええ!!」

僕は全力で拳撃を打ち出す。

「くっっ!!」「グヘッッ!？」

クロスカウンター!? このタイミングで合わせてくるの!?

両者ともに、後ろに倒れた。

と、とりあえず山本の分はやり返したし、ツナは自分でやり返した。獄寺君はもういいや……よし、逃げよう!!

その時、先輩が立ち上がる

「僕に一撃を入れるとは思わなかったよ。面白い子だね。いいだろう、君のことは全力で咬み殺す」

「先輩、僕は用事すんだので帰りますね。それじゃ、さよならさよならさよなら」

「……逃がさないよ」

やっぱり？

「ギヤヤヤヤヤヤヤ!!」

Side 綱吉

リボーンのせいで酷い目にあった。イテテ、雲雀さん強かったなあ。俺もあれくらい強ければ……

京子ちゃんを助けてカッコイイ俺を想像していると、向こうのほうで、人が集まっているのを見つけた。いるのは7…3で女子の方が多い。

その中心には、1人の倒れた少年がいた。

「……あれ、刹那じゃねーの？」

「やあ、山本達じゃないか」

その声で、刹那を囲んでいた人混みが割れて道が出来る

「なんで、そんなボロボロで倒れてんだよ、髪の毛」

と獄寺君が聞く。

「ちょっと、風紀委員長に……」

「んなー！ー！ー！？ 刹那もあの人にやられたの、なんで？まさか、リボーン？」

「違う違う。実は、君達が風紀委員長にボコボコにされたって小耳に挟んで。いやまあ、ホントは屋上で話を聞いてただけ。それで、敵討ちーって感じで応接室に行っ……」

「まじか？」

「まじだよ山本。山本がやられた分はやり返しといたからね」

雲雀さんに攻撃あてられたの!?

「獄寺君の分は無理だったからね」

「1発あてられただけかよ、髪の毛」

「なにも出来ずにやられたやつには言われたくないよ、小指」

「んだと、もやし。炒められて死ね」

「やるかい、タコヘッド。酢の物にされて食われて死ね」

またー!?

「はは、やっぱり仲わりーのな」

「黙ってろ、野球バカ」

「黙るのは君だろ、机の角にぶつけられて死ね」

「誰よりも黙るべきはてめえだったな、散髪屋で刈られて死ね」

2人ともいい加減に……

バァン

「リ・ボーン復活 死ぬ気で喧嘩を止める!!」

「10代目!？」

「いや僕、怪我人……」

「ツナ、任せた」

「「ギャヤヤヤヤヤヤ！」」

そして、影では

「協力的なファミリーゲット」

なんて呟く赤ん坊が居たとか、居なかったとか……

第椎話（前書き）

ども、クロサマです。

タイトルの雰囲気を変えました。怪異がはびこる物語的な。これからは、僕と○○じゃなく、気分でタイトル変えてきます。

名前は……よくわからないので

では、本編どうぞ

第権話

それは私が、ボスに出会った時のこと。私は学校から、帰宅している途中だった。いつも通りの道、いつも通りの生活。そんな私の代わり映えのない生活を打ち破ったのは、1匹の猫だった。周りのことを気にせず、自分の行きたい所に行く。彼は、もしくは彼女かもしれないけれど、そういう自由を身に纏い、私の前を悠々と歩いていった。私は何故か、足を止め、その姿を目で追っている。憧れの念を抱いたのかもしれないし、軽く妬んでいたのかもしれない。いや、そんなことはないだろう。今までに、自由という物を求めたことは無かったはずだ。だから、その理由は全く分からない。

彼は、当たり前の様に道路を渡ろうとしている。信号の色は赤、他方向の信号は丁度点滅していた。向こう側から、車が凄い勢いで直進して来ている。この信号で渡ってしまおうと急いでいたのだろう。案の定、猫はそのまま歩き続けた。

……引かれる

そんな言葉が私の頭を過る。考えるより早く、体が動いていた。助けなくてはならない。私は自然に、あたかもそれが、元から決められていたかのように駆け出していた。道路に出て彼を抱き抱える。車の運転手は分からないけれど、周りにいる人は皆、目を見開いて固まって居たかと思う。

……間に合わなかった

車がすぐそこに迫っている。猫を抱えるため、1度動きを止めてしまった。駆け抜けるだけなら間に合っただろう。でも実際はそうじゃない。完全にアウト。私は静かに目を閉じた。

ドンッ、キイイイイ

思ったより痛くない。いや、既に感覚がないのかも。走馬灯なんて、特にこれといって思い出がない私が見ることはない。私は死ぬ、このまま永遠の眠りにつく。

「大丈夫、怪我はない？」

「……え？」

私は無傷で転がっていた。勿論、腕の中の猫も無事。何が起こったんだろう。何故、私は無傷なのだろう。それは、私の目の前の少年に聞いた方がいいかもしれない

「何が起こったの？」

「いろいろ」

「いろいろじゃ分からない」

「君が死にそうになったのを助けた」

シンプルな答えしか返ってこない。でも、これだけは分かる。私は彼に、命を救われたのだ。

「ありがとう。でも、どうして？」

「どうしてって？」

「なんで私を助けたの？　あなたまで死んでいたかもしれないのに」

「んー、なんでだろ」

「分からないのにそんなことしたの？」

「それじゃあ、どうして君は、猫を助けたの？」

「あ……」

見透かされた？　違う、そういうのではない気がする。

彼は私の腕から猫を取り上げて、地面に下ろしてやり、私に手を差しのべてきた。

「人助けの理由なんて、何となくでいいんだよ。それ以外なのが、逆におかしいのさ」

「でも……」

「不満？　じゃあ、こうしよう……君が可愛かった。だから、僕は助けた」

「……もういい」

「あれ、怒った？」

「ううん……あなた、変わってる」

「そうかな、友達も皆こんなもんだよ」

私は、こんな善意だけで、自分の命を懸けられる人を初めてみた。
変わった子と言われていた私にも、そんな彼は眩しかった。

「まっ、とにかく君が無事でよかった。助かってくれてありがとう」

「どうしてあなたがお礼を言うの？」

「なんとなく」

彼は微笑む

「……また？」

私もまた、微笑んだ気がした。

「名前、なんていうの？」

「へ？」

「お礼、したいから」

人を助けて名前を聞かれるのが恥ずかしかったのだろう。頬を軽く
掻いて答える。

「雪見 刹那って言うんだ。よろしく。君は？」

「霧島 凧」

私の体が上気する。心臓もドキドキしている気がした。これは恋？

いや違う。きっとこれが憧れだ。

第憑話（前書き）

短いので2つ目……ムクロパイナッポ

第憑話

とある少年を拉致してから数日。僕は2人の供を連れて川辺を歩いていた。1人は髪を幾つものピンで無造作にとめてあり、もう1人はニット帽を被り、頬にバーコードの様なマークがあった。

「骸さん。あのガキ、どうするんれすか？ 全然、ボンゴレの情報吐きませんよ？」

「骸様のマインドコントロールを使っても言いません。それどころか、心を閉ざしてランキング能力すら失いました」

「クフフ。それはもう、考えてありますよ。これを見なさい」

僕が2人に示したのは1枚の紙

「んあ？ なんれすか、これ」

「並盛中ケンカ強いランキング？」

「ええ、彼のランキングブックにありました。ボンゴレ10代目とファミリィ、順に潰していけばどちらかは見つかるでしょう」

「なるほど。さすが骸さんだびょん」

その時、僕に向かって殺気が発せられたのを感じた。瞬間、すれ違おうとしていた少年が回し蹴りを繰り出してきた。

まあ、避けられますが……

「てめえ、いきなり骸さんになにするびょん!!」

彼は驚いた顔をする。

「完全不意打ちだと思ってたんだけどな……」

「あなた、ボンゴレの？」

だとしたら、僕はとても運がいい。

「はい？ ボンゴレ？ 生憎、僕は貝類が苦手なんだけど……」

ハズレか。いや、偽っている可能性もある。

「……………」

「なに？ 僕の顔になんかついてる？」

「いえ、何故僕に蹴りかかってきたのかと思ひまして」

「なんとなく、不吉な感じがしたから」

「なるほど。あなた、名前は？」

「知らない人に名前教えるわけ……」

「僕は、六道 骸です」

「……雪見 刹那」

「雪見 刹那……序列2位ですか」

ならば、とりあえず戦闘不能にしておきましょうか

「骸さん、俺にやらせて欲しいびよん」

「いえ。彼は僕がやります。記念すべき最初の相手ですから」

「1対1でやってくれるの？ それは有難い」

彼が殴りかかって来る。なかなかのスピードだが……

ガキィッ

出現させた槍で攻撃を受け止めてみせる。

「どこから出てきたの？ これ」

「輪廻の果てより」

「はあ？」

「あなたは、六道輪廻を信じますか？」

「よくわかんないけど、信じてあげるよ」

こうして、ボンゴレ VS 黒曜中 は始まりを告げた

第憑話（後書き）

そうそう、感想とかお待ちします。

捻挫だ!! by 了平(前書き)

今回は、ほぼ原作通りです。みなさん見知った話しかないかと……
でも飛ばすことはできないし……

では、本編をどうぞ

捻挫だ!! by 了平

Side 綱吉

ある朝、支度を終えてリビングに降りるとリボーン達は既に朝食を取っていて、母さんは大量のチラシを抱えている。パンをくわえながら聞いてみた。

「母さん、なにそれ」

「これは空手の、こっちは合気道、でこれが……」

「はあ？　なんでそんなもの」

「噂なんだけどね、昨日の夕方辺りから、並中生がなにかに襲われたらしいのよ。だからツツ君も自分の身くらいは守れるようにならなきゃと思って」

そう言えば、リボーンの時もチラシだったな

「そんなのいいよ。どうせ、不良どうしのいざこざだろう？」

「そんなことしなくても、了平のボクシング部に入ればいいじゃないか」

「そんなの、もっと無理だよ。極限トレーニングで殺される」

最後の一口を食べ終え、玄関に向かう。

「大丈夫だとは思うけど、気をつけてね」

「うん、それじゃ、行ってきます!!」

校門前、学ランを着た生徒がウロウロしていた。

「うわ、風紀委員が見張りやってる」

ヒィー、怖いなあ

「でも、なんで並中生が狙われてんだろ」

「身に覚えのないイタズラさ」

「うわっ!？」

俺の後ろには、雲雀さんが立っていた。

「もちろん、ふりかかる火の粉は、元から絶つけどね」

「ちやおツス、雲雀」

「やあ、赤ん坊」

「この事件、どんな感じになってるんだ？」

「風紀委員が何人もやられた。やられたやつは全員、歯を抜かれてる。最初のやつは全部抜かれた」

なああああ！？ 歯を！？ 怖^{こえ}ー

でも、風紀委員ってことはやっぱり不良どうしの……

緑たなびく並盛のー 大なく小なく並がいいー

「これってうちの校歌……」

「もしもし」

んなああああつつ、雲雀さんの着うたー！ー！？

「そう。わかった」

電話を終える

「どうしたんですか？」

「……知り合いじゃなかったっけ？ 笹川 了平、やられたよ」

え、なんで！？ お兄さんは不良なんかじゃ……

「……少し気になるな。ツナ、行くぞ」

「ど、どこに？」

「病院に決まってるだろうが」

そっか、お見舞いにいかないと……

「なっ！？ 病院、並中生ばかりー！ー！？」

待合室が並中生で埋め尽くされている。向こうから、見知ったかおが近づいてきた。

「よう、ツナ。お前も知り合いがやられたのか？」

「俺もってことは……」

「ああ、剣道部の持田先輩がやられた」

「あの人も！？」

「……ツナ、急ぐぞ」

「ああ、それじゃ」

クラスメートに別れを告げて、お兄さんの病室に行くと

「おお、沢田ではないか!!」

意外と元気――!!

「大丈夫ですか？」

「ああ、骨も大したことない。歯を6本持っていかれたが、元からボクシングで折っていて、差し歯だったからな。問題ない」

問題は大有りだ――!!

「それにしても、強いやつだった」

「相手を見たんですか!？」

「ああ、奴は俺の名を知っていた。制服は隣町の黒曜中のものだ」

「黒曜中? どうしてそんな人が？」

「極限にわからん!!」

ですよね――!!

「お兄ちゃん!!」

突然、病室のドアが開いて、女のコが入ってきた。

「む、京子ではないか!!」

「お兄ちゃん、どうして銭湯の煙突になんかのぼったの!!」

なんだその言い訳――!??

「何だに登りたくなったのだ!!」

「怪我はどうなの? 捻挫って聞いてたけど、その腕は?」

「これも捻挫だ!!」

「頭のは?」

「捻挫だ!!」

「胴体のは?」

「捻挫だ!!」

んなあああああ!?! 適当すぎ……

その時、京子ちゃんの頬を雫が伝う。

「とにかく、無事でよかった……」

「そうだ、無事だ。こんなもの痛くもないし、すぐに治る。だから泣くんじゃない」

俺は、静かに病室から出た……

「京子ちゃん泣いてた。……どうしてこんなことするんだ」

「それなんだけどな」

「リボーン!! なにか分かったのか？」

「ああ。恐らく、この騒動。狙われてるのはおめーだぞ、ツナ」

なんだって!?

「これを見てもろ」

リボーンが1枚の紙を差し出してくる。

「並盛中ケンカ強いランキング? これがどうしたんだ？」

バキッ、いてー!?

「良く見やがれダメツナ」

「あ、このランキングの順位と歯を抜かれた本数が同じだ!!」

「そうだぞ。それで、このランキングは、前にフウ太が作ったものだ」

フウ太が?

「んで、マフィア界には、沈黙オメルタの掟ってのがある。組織の秘密を絶対に外部に漏らさないという掟だ。フウ太のランキングは業界全体の最高機密なんだぞ。一般の人間が知るわけがない」

「それってつまり……」

「敵はマフィア。だから恐らく、狙うのはボンゴレファミリーの10代目候補であるツナ、お前なんだ」

「そんな……」

この時俺は、辛うじてしがみついていた普通の世界から、完全に手を離れた。

「これを見れば、次に誰が襲われるかわかるぞ」

「えっと5位は……草壁さん？」

少し遠くから声が聞こえる。

「草壁副委員長！！」「委員長が敵のアジトに向かったはずじゃ……」
「まさか……負けたのか！？」

んなああああ！？ ああ雲雀さんが！？
えっと、雲雀さんの順位は……

「……1位」

そんなー！。それってこの学校には、相手に勝てる人がいないってことじゃないか！！

その時、リボーンの帽子に乗っていた、形状記憶カメレオンのレオンの尻尾が切れた。

「ええええええ！？」

「レオンの尻尾が切れるとはな……不吉だ」

なんか変形しまくってる……

「大丈夫なのか、レオン」

「尻尾が切れて、形状をコントロール出来なくなっちまってるだけだ。直ぐに落ち着く

5位が破れたってことは……ツナ、4位は誰だ？」

「えっと……そ、そんな」

第4位 獄寺 隼人

「ちっ。ツナ、俺は調べたいことがある。お前は獄寺を探せ」

「俺ーーーー！？」

S i d e 隼人

「あ、電池切れた」

携帯の画面が黒くなる。折角来たのに10代目もいねえし……

「……早退します」

立ち上がって出口に向かう。

「こら獄寺。お前、遅刻して今来たばかりだろうが。おい」

無視無視

ああ、腹減った。ポケットに手を突っ込み小銭を数える。ちつ、全然たりねえ。

背後から声が聞こえた。

「お前が獄寺 隼人？」

「ああ、誰だてめえ？」

ちっ、ケンカかよ。結構、地味に生きてるつもりなんだけどな。

「売られたケンカは買う主義だ。かかってきな」

その時、野次馬らしき男が近づいて来た。

「なんだ、中坊のケン……え？」

「な!？」

気がつけば、男達の額に幾本もの針が刺さっていた。

プシャーーーーーー

そこから、真っ赤な血が吹き出す。

「見せ物じゃないんで」

「てめえ!!」

「早く済まそう。汗……かきたくないんだ」

そう言うと同時に、彼の手から何かが投げられた。

ヨーヨー!?

……とりあえず、爆発に乗じて、身を隠したほうがいいか。

導火線の短いダイナマイトを放り投げ、爆風に紛れて路地に隠れる。が、ヨーヨーが追いかけて来たかと思うと、そこから針が放出され

る。

「くっっ!!」

なんとか避けられたか……しかしこいつ。戦い方といい、殺気といい、プロの殺し屋だ。

「てめえ、どこのファミリーのもんだ？」

「……やつとアタリだ」

なに？

「お前には、ボンゴレのボスとファミリーの構成。全てを吐いてもらう」

狙いは10代目か！？ だったら

「負けられねえ。2倍ボム!!」

大量のダイナマイトを投げつける。しかし、相手はヨーヨーを巧みに操り、全ての導火線を刈り取った。

そしてそれは、そのまま近づいてきて両サイドを放出した針で塞ぐ。

くそっ、避けられねえ。使いたくなかったが……

すかさず服の袖からミニボムを取り出し、着火。それを自分の背中に投げる。

「いくらチビボムだからって、痛いんだからよ!!」

爆風による加速。この速さなら、突破できる!!

そのスピードで、相手の脇を通り抜ける。直ぐに振り返り

「2倍ボム!!」

「学習しないな……」

先ほど同じように、導火線を狙う。しかし……

「!?!」

数本だけ空振りし、爆発!!

「があつつつつ!!」

「遠近法だ。さっきすれ違うときにチビボムを投げておいたんだ。そして、俺がボムを投げた時にはそれと同じサイズに見えるまで接近してたんだよ」

右腕たる俺が、下手するわけにやいかねえからな。

「てめえの目的がなんだかは知らねえが……これで終わりだ」

「果てろ!!」

S i d e 綱吉

くそー。獄寺君はどこにいるんだ。こんなときに携帯は繋がらないし……

「あ、並中生だ。なんか、狙われてるらしいよ」

「そうなんだ。そういえば、さっきも商店街で並中生がケンカしてたよね」

……それって。とにかく行ってみよう!!

ドーン、ドカーン

この爆発音は……間違いない!!

「獄寺君!!」

「あ、10代目!？」

「大丈夫なの？ マフィアの人俺達を狙ってるって」

「はい、さっき倒したところッス」

「そうなの!? 凄いよ、獄寺君!！」

「いえ、10代目の右腕として当然です。やつなら、あそこに……いねえ!？」

えっ、どういう……？

「手間が省けた……」

んなあああつつ!! 黒曜生!？

「壊してから、連れていく」

に、逃げなきゃ……

「気をつけてください。奴の武器はヨーヨーです!!」

「そんなこと言われても……こ、怖くて足が動かないよ」

「な!？」

俺に向かって幾本もの針が飛んでくる。怖い、動けない、当たる!!

ドスッ

「……あれ？」

なかなか、針が来ない。目を開けると、そこには獄寺君の背中があった。

その獄寺君の体が、ゆっくりと傾いていく。彼の体には、大量の針が刺さっていた。

……庇われた？ そんな

「獄寺君……！！」

早く、早く治療しないと……

「じゃまが入った。でも、次で……」

2つのヨーヨーが俺に向かってくる。だれか……助けて！！

ガキーン

「滑りこみセーフってとこだな」

「山本！？ どうしてここに」

「学校閉鎖になってな。帰り道、並中生がケンカしてるっつーから、獄寺かと思って来たんだ。大丈夫か、ツナ？」

「うん。助かったよ」

「そっか。しかし、よく状況がわかんねーんだけど、穏やかじゃね

「な」

めったに怒らない山本が……

「……ランク3位 山本 武」

「山本だけじゃないよ」

「刹那!？」

「遅くなってごめん。」

さて、黒曜中 柿本 千種。そんな状態で僕達2人に勝てると思う?」

「……………」

「こっちも急いでるからさ、今は見逃してあげるよ」

刹那も怒ってる……でも、山本とは少し違う?

「……つかれた。帰ってシャワー浴びたい」

そう言って立ち去っていった。背中が見えなくなるまで、だれも目をそらさない。見えなくなった頃

「ツナ、電話しなきゃ」

そうだった。救急車って何番だっけ

「救急車じゃ駄目だよ。Dr. シヤマルだ。今回ばかりは傷が異常

だからね。病院が大騒ぎになっちゃうよ」

トマト100年分を贈ろう by 9代目（前書き）

クロサマです

アップルパイっておいしいですよね

では、本編をどうぞ

トマト100年分を贈ろう

by 9代目

Side 刹那

並盛中保健室

部屋のベッドには、包帯だらけの獄寺君が横たえられている。

「シャマル、獄寺君は？」

ツナが聞く

「問題ねーよ。女以外は診たくねーんだ。感謝しろよ」

「よかった。ありがとう」

その時、大きな音をたててビアンキが部屋に入ってきた。

「隼人は？」

「大丈夫みたいです」

この人も、なんだかんだ言って姉なんだよな。獄寺君のことはいつも心配してるんだ……。

シャマルとビアンキが討論している。それに紛れて、僕は部屋から退散する。目的地はなかったけれど、気づけば屋上に着いていた。

ガチャン

おもむろにフェンスを叩く。何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も……

知っていた。分かっていたはずなのに……守れなかった。

「くそっ」

一際強く、フェンスを叩く。

「やっぱり、知ってたんだな」

後ろから声。リボーン君だ

「まあね。意味はなかったけど……」

「無くねーぞ。主犯の情報が全く足りてねえ。お前の知識が必要だ」

「ありがとう」

「じゃあ、聞くぞ」

「うん」

「主犯、これは少し前に復讐者ヴァインディチエの牢獄から脱獄した、六道 骸・城島 犬・柿本 千種の3人で間違いないな」

「今のところはね。後から、M・M・バーズ・ヂヂ・ジジの4人が

加わるんだ」

「こいつらか」

1枚の写真を示す

「そう。でも、大事なのはここから」

「なんだ？」

「六道 骸の写真持ってる？」

「これだな」

差し出された写真を見る

「やっぱりね。リボン君、北イタリア最強ってのに覚えはある？」

「ああ、見たことはねーが、ファミリー惨殺事件のランチアとかいうやつだな」

「そう、そしてまさしく、この男こそがランチアなんだ」

「!？ 偽名ってことか」

「そうじゃない。本物の六道 骸によって、六道 骸にされてたんだ」

「なるほどな。しかし、北イタリア最強か……まだ素人の山本には荷が重いし、怪我してる獄寺は言わずもがな」

「死ぬ気弾もあと1個しかないから、本命がいるとわかっていて、そうそう使うことはできない」

「となると……」

「うん。僕がやる」

「……だが、おめーも素人だろうが」

「知識があるだけ山本よりはましだし、怪我してないだけ獄寺君よりはましだよ」

「死ぬ気ツナにやってもらえばいいだろ。本命前にやられちゃったら、意味がねー。それだったら、おめーらを温存して、全員で当たればいい」

「操られたランチアさんよか、六道 骸の方が強い。第一、僕は温存されても彼とは戦えない」

「どういうことだ？」

その時、屋上のドアが開いた。

「リボーン、刹那、こんなところにいたんだ。なんかあったの？」

「ああ、ツナこいつを見ろ」

今度は1枚の手紙をツナに放り投げる。

「なにこれ」

「9代目からの勅命状だ」

そんな大切なものを投げたんだ……

「実はかくがくしかじかでな、10代目候補であるお前に討伐の指令が来たんだ」

「へえ、ってかくがくしかじじゃわかんねーよ!!」

「これだからツナはダメツナなんだぞ。マフィアのボスなら、分かってみせろ」

「分かるわけないだろ。というか、まずボスじゃないし!!」

「まあまあ、僕が説明するよ」

説明を終えると

「なあああ、脱獄犯!? そんな怖い人達が来てたの? ひいーこえー」

「それをお前が退治するんだぞ」

「無理無理無理無理!!」

「でも、勅命きちゃったしな」

「絶対行かないからな!!」

「学校対抗のマフィアごっこだった？ 俺もいくぜ」

「山本まで!？」

かくいう僕も

「協力するよ。ボ・ス♪」

「なあああああ、ボスじゃないって!!」

「というより、さっきツナがボスってバレたんだから、ツナが黙ってても、相手から来るよね」

「そうだったー!!」

「獄寺君のお陰で1人脱落してて、チャンスだよねー」

「そうですよ、10代目。ふげええええ!!」

「大丈夫、隼人!？」

「攻撃は最大の防御ってな。やろうぜ、ツナ」

「え、え？」

「決まりだな。準備出来しだい、ツナんちに集合だ。ほら行くぞ、ダメツナ」

解散していく。さて、僕も帰ってしたくするかな……いや

「僕はこのままツナんち行くわ」

「準備はいいの？」

「帰っても、1億マイナス150万があるだけだしね」

「なあっ!？」

「ってわけで、奈々さんにご飯振る舞ってもらおうと」

「人の親を下の名前で呼ぶんだ……」

「仲良いからね。いっそ、ツナより仲良いよね」

「なっ!？」

「嘘だよ」

「さっさとしろ、バカども」

「ツナ、帰ってたの？ 刹那君もいらっしやい」

「お邪魔してます」

「あら？ お気に入りに着替えて遊びにくいの？」

あれ、お気に入りなんだ。正直、普通の服だなあ。

「今日はやめといったら？　まだ並中生襲われてるらしいじゃない」

その元凶に乗り込むために準備してるんですよ、奈々さん。

「ちょっと前までの日常が凄く幸せだった気がしてきたよ」

まあ、今まではなんだかんだで、命の危険はなかったからなー

「これ終わったらまた、のんきな生活に戻れんのかな」

「その為に奴らを倒すんだぞ」

足元から声が聞こえる。リボーン君……キモッ！？　漫画ってかなり可愛く描かれてたんだな……

「マユになったレオンも連れて行こうと思ってな」

「レオン大丈夫なの？」

「レオンより自分達の心配した方がいいぞ。特にツナはな。レオンがこうなる時は、俺の生徒はいつも死にかけんだ」

「不吉……!!」

「それって、ディーノさんもそうだったの？　リボーン君」

「そうだ。それとツナ。俺は戦わねーからな」

「マジでー！？　なんで」

「掟だからだよ。ねっ。それとツナ、死ぬ気弾も1発しかないみたいだよ。というのも、死ぬ気弾って、形状記憶カメレオンの体内に、ボンゴレ伝統の素弾を3日埋め込むことでできるからなんだ」

「そうなのー！？　てか、刹那はなんでそんなこと知ってんの？」

「僕が火星人だからさ」

「まだ引っ張ってるー！！　でもそっか、刹那はそうだったね。あっ、てことは……」

「未来のことなら教えないよ」

「なんで!？」

「もし勝つと言ったら、ツナは油断するかもしれない。負けると言ったら、絶望で力を発揮出来ないかもしれないからね」

それに、中心人物——主人公である君に教えたら、歴史が大きく変わってしまう。イレギュラーは僕だけで十分だ

「そっか……」

その時、チャイムになる。

「来たぜ、いよいよだな。茶と寿司、差し入れな」

マフィアごっこだと思ったままつれていいのかな……まあ、

いつか

「ケンカを売ってんの？ 山本 武。私の弁当へのケチかしら」

ビアンキさん、そこで競うんですか……言うまでもない、そのケンカ、山本の勝ちですよ。というか、異種格闘すぎて話になりません。

「あとは獄寺君だけだね」

もう来てるんだよ。ビアンキさん警戒して怪しい人になってるけどね。ふう、しょうがないなあ

「おい。変態小指ー！！！」

「んだと、髪の毛！！！」

「獄寺君、いたの！？！」

「10代目！？ 違います、素晴らしい門柱に見とれてただけです」

それはそれで変態だよ……門柱フェチ？

「ビアンキ、ゴーグルでも着けて顔半分かくしてあげてくれる」

「しょうがないわね」

よしこれで

「そろったな」

リボン君にセリフとられた!! いやしかし……!!

「骸退治に出発ッスね」

獄寺君にとられた――（涙）

「静かね」

「新道ができてから、ほとんど使われなくなりましたみたいですよ」

うわっ。僕達の目の前に広がる廃虚……これが

「黒曜センターですね」

やっと言えた!!

「不気味なところスね」

「複合娯楽施設だったみてーだが、一昨年の台風で土砂崩れがおきてな、それから閉鎖してこのありさまだ」

「夢のあとってわけね」

獄寺君が門に近づいていき、鍵をいじりだす。

「錆びきってますから、ここからは出入りしてないみたいです。どーします？」

「ビアンキさん」

「そうね、正面突破よ。ポイズンクッキング 溶解さくらもち」

ブシュウウウウウ

潜入成功ー！！

「よし、頂上を目指しつつ、建物をしらみ潰しに見ていくぞ」

「ひいい、緊張してきた……」

「いやーまじすげーなー。超本格マフィアごっこだな」

山本節半端ないなー

「そーいやツナ、来たことあるって言ってたよね。どんなところだった？」

「来たってもかなり前だからなあ。俺が覚えてんのは、ゲート入って暫くいくとガラス張りの動植物園があって……」

僕達の前にあるのは、ただただ土の山である、

「そんなものないじゃない。あなたの目は節穴ね」

「ん〜？」

山本が何か見つけたらしい

「何か動物の足跡だな……まだ新しい」

「ワンワンかな」

「犬って言え、モヤシ」

「萌やし？ 癒しの仲間かな？」

「違いよ」

「犬ではねーと思うな。跡がでかすぎる」

「爪の部分……血ね」

「ひい……」

ん？ あれは……

「ツナツナ。木の幹がえぐられてるよ。何かの歯形みたい」

「えゝえええええっ！！」

あひゃひゃひゃ、畏れろ！！

「10代目!! あそこ……見てください」

喰い千切られた檻が転がっている。

「気をつけてください。なんかいます!……後ろだ!!」

ゴオッ

現れたのは黒い犬。

「くっ」

山本がせき止める。すると、犬は血を吐き出して絶命した。

「こいつ、既にやられてた……」

また2匹襲いかかってくる。

「げっ、こいつもえぐられた死体だ!!」

まじで? じゃあ、僕は……避ける………避ける………避ける………避ける!!
ける!!

バキィ

「なにやってんだ、もやし!!」

「いやだって。服に血イ付いたら嫌じゃん。ありがと、獄寺君」

「てめえ」

「ひいいいっ!!」

「10代目!!」

サンキュー、ツナ

「狙われてるわ。早くこっちへ!!」

……ミシ

『かかったびょーん』

バリッ

突然何かが地面から飛び出して山本に襲いかかる。一撃目をなんとかかわしたが、その反動で転んでしまう。

ミシ……ミシ……ミシ……ミシ………バリッ

「うわああっ!」

「いらっしゃーい」

出てきた何かが、開いた穴に飛び込んでいった。

「何……? 今の……」

人影にみえたな……というか、ぶっちゃけ城島 犬だよね。

「つーか山本は!？」

「落ちたわ」

「ツナの記憶は正しかったな。動植物園は土砂の下に埋まっちゃまってたんだ」

「山本、大丈夫?」

「いっつゝ。まいったな、ハハハ……」

笑ってる……さすが山本クオリティー

ガサツ

「山本ッ!! 右に何かいる!!」

ガルルルル……

「何だあれ? け、獣!？」

「これだけはなれてたら、手は出せないね。爆弾なんか使った日には、山本は生き埋めになっちゃう」

「野球バカ、気をつけろよ。今からダイナマイト投げるぞ」

「獄寺君!?! だからダメだって!!」

山本
V
S
謎の獣（城島 犬）
開始！！

V S 城島 犬（前書き）

クロサマです

駅前のパン屋さんのメロンパンがとてもおいしそう。いつか食べるぞ、と思いながら、今日もポNDERリングを購入しました！！

では、本編をどうぞ

V S 城島 犬

Side 武

見渡す限りの暗闇。光と言えば、自分が落ちた時に開いた穴から漏れるものだけ。

ガルルルル

暗闇の中に潜む獣。正体が全く分からねー。その影がこちらに向かって歩いてくる。

「かんげーすんよ。山本 武」

人だったのか……

「柿ぴー寝たままでさー、暇してたんら」

あのニット帽のやつのことか？ それより

「お前、見かけによらず器用なんだな。さっきの死んだ犬の人形、すげーリアルだっぜ！」

「んあ？ なにそれ。もしかして天然？ まっいいけど……よいい……どんっ！！」

相手は突然駆け出すと、凄い高さまで跳躍した。

「なっ、人間業じゃねえ!!」

上から、獄寺の声が聞こえる。

「ギューーン」

跳躍から、ドームの壁を蹴り、その勢いで突進してきた。それを、バットで受け止めようとしたが

ガリッ

なっ、バットが噛み砕かれた!?

「フー、なるほどな。マフィアごっこってのは、加減せずに相手をぶっ倒していいんだな……なるほど、そういうルールな」

しかし、鉄を噛み砕くのか……あんなのに噛みつかれたらいてーだろうな。

「やりあう前に、1つ聞いていいか? お前、さっきとなり変わったねー? いつ変装した?」

「やっぱ、天然? まあいいや、教えてやんよ」

「まじか。自分の手の内明かすなんて……太っ腹なのか、それともただのバカなのか」

また上から声がする。今度は刹那か

「うるへー!! 説明してやんだから黙って聞いてろ!!」

「は〜い」

懷から、牙の様なものを取りだす

「ゲーム機って、カセット差し替えるといろんなゲームできるっしょ？ 俺はこのカートリッジを装着することで、それにあった動物の力を得られるんだよ」

何だそりゃ……

「例えばこいつなら……」

持っている内の1つを口にはめる

「コングチャンネル!!」

体に変化していく。筋肉が隆起し、元の倍ほどもある姿になった。

「出た、ゴリラチャンネル」

「ちげえ、コングチャンネルら!! 次はてめえだ。てめえを殺す!!」

ははっ、また刹那か

「でも、すげえな。新手のドーピングかよ」

「だーかーらー、ちげえって!!」

巨大な腕を振り下ろす。地面に穴があいた。

Side 刹那

穴の中で山本が戦っている。相手の攻撃は上手く避けているものの……

「このままだとまずいね」

「え、なんで？ 山本はまだ一度も攻撃を喰らってないよ？」

「でも、自分が当てられてるわけでもないんだよ」

「そう。山本 武には武器がない。圧倒的にリーチが足りないわ」

「相手も素手じゃん」

「相手は、一種のドーピング。あらゆる動物の能力を使えますからね。身体能力が違うんですよ」

「それに、素手である以上懐に入らなくちゃならない訳だけど、山本にはそんな戦いは出来ない……秋の大会前に、怪我するわけにはいかないだろうからね」

「あ……」

せめて、なにか武器があれば良いんだけど……そういえば

「リボン君って山本のバットのスピアもってなかったっけ？」

「そんなのあるわけ……」

「ん？ 持ってるぞ」

「あんのー！？ だったらどうしてもっと早くに出さなかったんだよ」

「だって、忘れてたんだもん」

キャラ変えて誤魔化そうとしてる……

「とにかく、早くそれを山本に!!」

「どうやって渡すんだ？」

あ。そこまで考えてなかったな。

「ここから落とせばいいだろ」

「山本に当たったらどうすんだ？ 鉄の塊だし、万が一刀身がでたら刺さって死ぬぞ。ここからの光を当てにしているから、離れられねーしな。離れたら、暗闇のなかでボコられるだけだぞ」

「そうだったー！！」

やっぱり、あれしかないのかな……できればやりたくはなかったんだけど

「リボン君」

「そだな。ツナ、山本を助けられる方法があるとしたらどうする？」

「あるのか！？ だったら早く」

「よし、行ってこい」

ゲシッ

「え？ うわあああああ。落とすのは危ないからダメなんじゃないかったのかよー！？」

「人なら大丈夫だよ。ある程度はプニプニしてるし、受け身がとれるもん。バットみたいに当たる面積は狭くない、空気抵抗も違うでしょ」

「なるほどー！！」

「まっ、戯言だけどね」

「なああああああ!?!」

この間たった3秒。ツナ、根拠はあるんだよ？
それはね……原作
で大丈夫だったからさ!!

Side 武

ドシャツ

「いてー!?!」

「んあ？ 誰こいつー？ 雑魚の友達れすか？」

「ひいいい!?!」

ツナ!?

「よし、山本逃げるし、先にウサギを狩っとくかな」

ツナに向かっていく。マズイ、間に合わねー。なんかないか？
…あれだ!!

ひゅっ……ビシッ

「お前の相手は俺だろ？」

「んあ？ 石？」

男に当たり、地面に落ちたのは小石。

この暗がりですてられるか心配だったけど……当たったみてーだな。少し大きめの石を手にとって、手の中で弄ぶ。そして、1個を指で上に弾き、もう一度キャッチする。

「ははっ。わりーけど、こいつをぶち当てるゲームセットだ」

「た、助かったー。山本ー」

「へっ、おもしれー。んじゃ、俺もちよっと本気でやってやるびよん」

尖った牙を装着する

「チーターチャンネル！！」

その瞬間、男は4足歩行になり、凄まじい速さで駆けてくる。それをよく狙って石を投げるが

「ひょい」

口で効果音を言いながらかわされてしまう。

「これで終わりだ!!」

飛び込んできて肉薄され、鋭い牙をもつ口を大きくあけてくる。

「いたらき!!」

ガリッ

「くっ」

「山本!？」

楯として差し出した左腕に噛みつかれた。牙は肉を容易く突き破り、骨まで到達している。

「このまま噛み碎いてやるびょん」

わりーがそうはさせねーよ

「終わりなのは……お前だぜ!!」

手に持っていた、バットのグリップを相手のこめかみへ振り下ろす。

「ギャンッ」

その反動で少年は転がっていき、壁にぶつかった後、沈黙した。

「よっしゃ。俺の勝ちだなっ!!」

勝者 山本 武

ツナが近づいて来て、頭を下げてきた。

「ごめん山本。俺のせいで腕を……野球の大会あんのに!!」

「おいおい、勘弁してくれよ、ツナ。いつの話してんだ？ ダチより野球を大事にするなんて、お前と屋上ダイウゝする前までだぜ」

「や……山本」

「それに、このくらいの怪我じゃ余裕で野球できるぜ」

ぐっぱっぐっぱっと手を動かして見せてやった。

S i d e 刹那

「今のが主要メンバーの1人、城島 犬だよ」

ツナと山本が穴から上がって来た後、確認をする。すると、リボーン君が1枚の写真を取り出した。

「こいつを見てみる」

「こ……これが敵の3人組!？」

「ああ、真ん中の奴が六道 骸だ」

「……これでいいわ」

ビアンキが山本の治療を終えたらしい。

「チビわりい。バット壊しちゃった」

「気にすんな。さっきも言ったが、スぺアあるからな」

「まっでも、メガネヤローはまだ寝てるらしいし、アニマルヤローは倒したし、意外と簡単に骸をぶっ飛ばせそうですよ」

『ぷぷっ、めでてー連中だぜ!!』

下から声がする

「さっきまで気を失ってたのに……」

うるさい奴だなあ

「きつと、オツポサムチャンネル使ってたんだよ」

『オポッサムチャンネルら！！ さっきからワザとやってんじゃねえだろうな！！』

……恥ずかしー 〃〃〃 今回は素で間違ってた

「……オツポサムは死んだふりが得意だからね」

誤魔化し続けるしかない

「自分の間違い誤魔化してんじゃねーよ。オポッサムだろうが」

獄寺君め！！

『口割らねーためにやったが、よく考えてみたら、お前たちに何いっても問題ないじゃん。ぜってー骸さんは倒せねーからな。全員、顔見る前におっ死ぬびょーん！！』

「んだと、砂まくぞコラ！！」

「甘いわ隼人」

ビアンキさんが、岩を穴に落とす。

「キャンッ」

………うわぁ

「ヒクヒクしてるけど、あれも死んだふりかしら」

「だが奴の言うとおり、六道 骸を侮らねーほうがいいぞ。奴は、幾度となくマフィアや警察の手で絶体絶命の危機に陥ってるんだ。だが、その度に人を殺してそれをくぐり抜けて来たんだ」

「この人、何してきたの――!? やっぱり六道 骸こえ――!!」

S i d e
骸

「骸様」

千種の声。目を覚ましたようですね。あの傷です。早い方でしょう。

「3位狩りは大変だった様ですね」

「ボンゴレのボスと接触しました」

「そのようですね。彼ら、遊びに来てますよ。犬がやられました」

「!?!」

立ち上がろうとする千種を止める。

「慌てなくて大丈夫ですよ。我々の援軍も到着しましたから」

自分の背後に目を向ける。

「相変わらず、無愛想な奴ねー！。久々に脱獄仲間に出会ったっていうのに」

そこにいるのは5人。右から、M・M、ランチア・ジジ・ヂヂ・バ
ーズ

「何しに来たの？」

「仕事よ。骸ちゃんは払いがいいんだもん」

「答える必要はない……」

「……………」

「スリルを欲してですよ」

理由はどうあれ、駒は多いにこしたことはない。

「千種はゆっくり休んでください」

ボンゴレは彼らに任せますからね。

ドサッ

音がした方向には少年がいる。大きな本をもった少年だ。

「クフフフフ」

さあ、どうしますか？

沢田 綱吉

V S M・M (前書き)

クロサマです。

前話と今回を見て気付いた人もいるかと思いますが、リボンと同じくらい僕は西尾維新先生の作品が大好きです。この先、もろ某雑誌団の人喰いキャラ出るんですよ。勿論、レギュラーじゃありませんがね

では、本編をどうぞ!!

V S M・M

Side 刹那

「ねえ、そろそろ休憩にしない?」

後ろからツナが提案してくる。

「そうですね。それなりに歩いたし、そろそろ休憩しましょう」

「それなら、あそこでお弁当食べちゃおうよ」

僕は、近くにあるテーブルを指さす。少し汚いけど、地面に座って食べるよりはずっといいはずだ。

テーブルにつくと、山本が茶と寿司。ビアンキさんは、お弁当箱に入った何かをてきぱきと並べ始める。僕はそれを見越して、山本の近くに陣取ったので、寿司ばかり食べていても、さほど違和感はないはずだ。

「さあ、ツナ。緑黄色野虫のコールドスープよ。寿司なんかよりずっとおいしいわ」

「虫ー!?!」

まだ競ってるよ。だから異種格闘過ぎるって。言うなれば、消しゴムの力と核爆弾の力。どちらが消す力が強いかを比べている様なものじゃないか。

しかし、折角のお寿司なのになぁ。来るんだろうな。やだなー。とか思いながら、出来る限り値の張るネタの寿司にパクつく。ボンツ、ってなっちゃうからさ。

案の定、ちらりと見ると、少なくとも料理ではない何かが沸騰していて、次の瞬間には爆発してしまった。

「熱っ!?!」

「爆発!?!? なにこのポイズンクッキング」

「私じゃないわ!! くっ、狙われてる、伏せて!!」

既に伏せていた僕を除いて、皆が身を低くする。でも、確かこの技って音波だよね。伏せてどうこう出来るものじゃない気がするけど……これなら、不慣れな僕でも安心してできるな。

寿司までもが爆発する。ああ、勿体無い……

「ちっ、そこか!!」

獄寺君が、瓦礫の山に向かって爆弾をなげつける。それは爆発によって粉々になり、土煙を散らせる。その中に、人影が映る。

「思ったより規模が小さいわね。どういうことかしら」

現れたのは、一人の少女。

「それにしてもダッサイ武器ね。こんな連中に柿ピーや犬は、何を

手こずったのかしら」

「黒曜生!？」

「私だってこんな服、骸ちゃんに言われなかったら着ないわよ」

骸……やっぱりこいつは………って僕はこんなこと考える必要ないんだった。

「それにしても、マフィアのくせにみすばらしい格好ね」

「なっ!？」

ツナはお気に入りの服だったね。僕は学校の制服さ

「やっぱり、男は金よ。やっぱり、付き合うなら骸ちゃんがいいわ。正直、あんたらになんて興味ないけど……とりあえず私は、あんたたちをあの世に送って、バッグと洋服、買い漁るだけ!!」

来る!!

ひゅんひゅん

「バーニングビブラート!!」

特殊な音波を浴びせることで、分子運動を活性化し、爆発させる。電子レンジと同じ様な仕組みだ。直接浴びれば人間なんてひとたまりもない。

そう……直接浴びれば。

おそらく、僕らの付近で爆発が起こるはずだったのだろう。しかし現実には、当てずっぽうな場所で爆発が起こるだけだった。

「!? どういうこと」

「こういうこと」

僕は着けていた指輪を見せる。

「何それ」

それをみて、ツナはクエスチョンマークを浮かべている

「それって、姉貴の結婚式（偽）の時の!!」

「俺が持ってきたピアノ線が飛び出す指輪だな」

そのとおり

「はぁ？ それがなんだったのよ」

「君のあれって、特殊な音波を使った技でしょ？」

「……………」

「そう、特殊な音波だ」

「なにが言いたいわけ？」

「例えば、糸の様なもので大気を弄り回せば、音波なんて意外と簡単に乱せるってことだよ」

「!？」

「勿論、そうそう出来ることじゃあないけどね。君のあの技みたいに、正確性を求められるものじゃないと何の意味も為さないよ。さつきは簡単とか言ったけど、実際は、あの程度で乱せる幅なんて、たかがしれてるからね」

「凄いよ刹那!! どこでそんな知識を？」

「フィクション小説」

「ええええ!?! フィクションを信じたの？」

「まあね」

なんて余裕ぶったはいいけど……これって問題が2つあるんだよね。まず1つ目。これを使ってる間は僕は動けないってこと。本職ならいざ知らず、僕みたいな素人が仲間に合わせて糸を操るなんて、かなり集中しなきゃ無理なんだ。だいたい、操れたことだって奇跡に等しい。そして2つ目。どんなに音波を乱したところで、そうするために、糸は直接音波を浴びる訳で……つまり、糸はもうボロボロ。あと1回が限界かな。

「(刹那、私がいくわ。リボーンは戦えないし、他は気がついてないみたいだから……)」

「(助かります)」

それじゃ、時間稼ぎしますかね

「君の攻撃は僕の前では無力だよ。降参したらどうかね」

「嫌よ」

「いくら？」

「はあ？ なんのこと？」

「いくらで降参してくれる？」

「……5000」

「5000円？ 思ったより安いね」

「5000万よ！！」

「ええ！？」

「骸ちゃんを裏切るのよ？ これでも、かなり減らしてやったんだから」

「もう一声！！」

「嫌よ」

「一介の中学生にはそんな額払えないよ」

いや、意外と払えるけどね

「あんたらボンゴレでしょ」

「まだ、正式にはボンゴレじゃないんだ」

「あっそ、なら交渉決裂ね」

M・Mはクラリネットに口をつける。

「だから、それは効かないってば」

「そんなことないわ。要するに、運にまかせて妨害してるだけじゃない。つまりは、運悪くあんたらのところに行くまで吹き続けられるのよ!!」

非現実的な方法だから、弱点には数えてなかったんだけど……

「バーニングビブラート!!」

ひゅんっ……バチッ

限界か……!!?

バキィン

指輪が弾ける

「くっ」

それを見て、彼女は満面の笑みになる

「なあに？ それ限界だったの？ さっきまでののは、はったりだったってわけね。上手く騙されちゃったわ。差し詰め、時間を稼いでいる間に作戦でも……！？」

「ふう、なんとか間に合ったかな」

僕の瞳に映るのはM・Mではなく、その後ろにいる女性

「待たせたかしら」

「ピッタリですよ」

「良かったわ」

ビアンキさんが手に持っているのは、辛うじてショートケーキの型をしている何か。M・Mは近接戦闘も得意だと言ってたけど、この距離では間に合わないでしょ？

「このっ」

「ポイズンクッキング ラストショートケーキ!!」

ブシューウウウウ

「きやああああああ」

M・Mは顔面にケーキをくっ付けたまんま、気絶してしまった。

刹那
&
ビアンキ
作戦勝利？

V S バーズ（前書き）

クロサマです。

さて、メダカボックスがアニメ化だとおーーーーー！？
僕が、西尾維新ののに字も知らなかった第1話、そして打ち切りにおびえていたところが懐かしいです。

では、本編をどうぞ！！

V S バーズ

Side 刹那

M・Mを倒したのも束の間、新たな刺客がやって来た。

「あの強欲娘がやられたのは、実にいい気分だ。しかし、私はそうはいきませんよ」

それと同時に壁に映像が映し出される。そこにいるのは、笹川さんと三浦さんである。笹川さんは先輩のお見舞いの帰り道らしく、クラスメートの黒川さんと歩いている。そして、三浦さんはイヤホンを付けて音楽を聞き、勉強しながら歩いていた。

「どうして京子ちゃんとハルが……」

なんでツナが呼び捨てで、僕が名字でさん付けなんだとかは余り追求して欲しくないけれど、説明しないのも変な気がする。その答えは簡単で、笹川さんは少なくとも今のところはただのクラスメートだし、三浦さんはほら……惚れたとか言われたのに、呼び捨てとか、何か恥ずかしいじゃん？ そりゃ、ハルって呼んでくださいとは言われてるけどさ。

「私はバーズと言うものです。名前の通り、鳥を飼うのも趣味でしてね。これは私の可愛い鳥達に埋め込まれた小型カメラから送られているものです」

可愛い鳥達にカメラを埋め込むな、と言いたところだけど、それよりも重要なことがある。

「おじさん。自分の年齢考えた方がいいんじゃないですか？」

だってこの人、たしか37歳だよ？　それが中学生の制服って……

「六道さんからの指令ですから、仕方ないですよ」

「そんなことはどうでもいい」

良くないよ、獄寺君

「敵だってんなら、ぶっ飛ばすだけだ」

「おやおや、そんなことでもいいのですか？」

バースが気持ち悪く笑い、映像に目を向ける。

僕らもそれを追って映像を見ると、それぞれに変な人っぽい奴がストーカーしていた。

「な、なに！？　この人達」

「彼らはジジとヂヂと言って、危険なあまり、両手を拘束されて投獄されていた双子の殺人鬼なんですよ」

「なんだって！？」

「彼女達は心配いりませんよ。あなたたちがこちらの言う通りにしてくれればですがね」

「てめえ!!」

「獄寺君!! 従おう。京子ちゃん達に何かあったら……」

「くっ……」

「それでは始めましょう。うーん、そうだなー。では、まずは皆さんでボンゴレ10代目をボコ殴りにしてください。……その沢田さんを殴れと言ったんですよ?」

「バレてるー!!」

「さては、メガネヤローが目を覚ましたな……」

「そんなー」

「彼女達を無事、お家に帰したいんでしょう? だったら出血するまで殴ってください……」

「せーい」

僕はその言葉通りにバースを殴った。いや嘘、本当は飛び蹴りをした。

「ぎゃっ!?!」

えい、えい、えい、えい

「ぐは、いた、ちょっ、やめっ」

なかなか出血しないな。おかしいな、この人事態は弱いはずなのに……

「刹那!？」

ツナに止められてしまった。

「おーいておーいて。おのれ許さんぞー、ガキの分際で。ヂヂ・ジジ!! こうなれば、皆殺してしまえ!!」

「そんなっ!？」

その時、スピーカーから声が聞こえた。

『ギギイイツ』

「どーした、ジジ!!」

聞こえて来たのは知った声だった。

『おめーみたいのが、ロリコンの印象を悪くすんだよ。ハイイ京子ちゃん、助けにきちゃったよ。おじさん、カワイコちゃんのためなら、次の日の筋肉痛もいとわないぜ』

現れたのは、Dr. シャマル。超一流の闇医者でありながら、天才殺し屋と言われ、トライデント・シャマルという異名をもつ。

「やるな、保健のおっさん」

「おせーんだよ。変態やぶ医者が!!」

いやいや、シャルさんカッコいいじゃん。

『こんにちは、シャル先生』

『どうして保健のおっさんがここに?』

黒川さんがもつともな質問をする。

『今日はすみやかに帰ることをお勧めするよ、レディ達。俺の戦いっぷりを見たら、惚れて眠れなくなっちまうぜ』

「何言ってるのー」

「あのエロオヤジ」

それ以前に、質問に答えてないじゃん。

『ヤバイよ! こいつ変態だって。いこいこ、京子』

『……フン。さーやろーか? にしても、つくづくお前、乙女達には刺激が強すぎる野郎だな』

ギィ、イイイイイ、とか言っているジジをゆったりと眺めている。

『ああ、一応医者として言つとくが、お前は振動症候群にかかっちゃった。あんまり激しく動かん方がいいぞ……つっても、もう遅かったか』

シャルさんは相手に背を向ける。

『発病だ』

ジジの全身から、血が吹き出した

シャルさんカッコいいなー。僕も将来はあんな男に……

「おのれシャル！！　こうなれば、もう一方だけでも」

「せーい」

えい、えい、えい、えい

「がつ、ぶつ、ころっ、せっ」

ほら、僕でもやっぱり好いてくれる子を殺してやる、だなんて聞きたくないもん。

『はひー、何の騒ぎですか？』

『俺達が来たからには、もう大丈夫ですよ』

『ほえ？』

『ランボ、ハルさんお願いね』

『オーケー、さあハルさん。ここはイーピンに任せて安全な場所へ』

僕は、ランボ戦わないのー！？　とか突っ込まないよ……断じて

……ランボ戦わないのー！ー！？

ヂヂもまたギイ、イイイイ、といいながらイーピンちゃんに腕を振り下ろす。

『哈っ！！』

イーピンちゃんは飛び上がることで攻撃をよけ、そのまま電柱を蹴って、ヂヂに接近する

『ハク白・ハツ撥・チュン中』

そんな掛け声と共に、右足を首に、左足を左腕に、両腕を右手にかけ、力を込める

『ハイサンゲン高三元！！』

ゴキゴキゴキッ

一撃で仕留めてしまった。さすが、将来有望ランキングベスト3の10年後の姿

「バカな、奴らは双子の悪魔と呼ばれた連続殺人鬼だぞ。こんなことが……やはり、六道さんのミッションはレベルが高い。くわばらくわばら」

そう言って、立ち去ろうとする。こんどは気絶させる攻撃をするか

「せい！！」

「ひげっ」

よし一発!!

「というか“双子の悪魔”とか、可愛い小悪魔系の双子姉妹の通り名にして欲しいよね」

なんて。どう？ シャマルさんっぽくなかった？

皆を見ると、残念なものを見るかのような視線を僕に向けていた。なんでだろ？

「……!？ 誰？」

ビアンキさんが森に向かって声をかける。

「そこにいるのはわかってるのよ。こないならこっちからいくわよ」

「ま……まって、僕だよ」

現れたのはフウ太君だった。知っていた僕からすれば、かなり複雑な気分だ。タイミングがわからなかったせいで、彼の誘拐そしもできなかったんだ。

「よかったー！ 元気そうじゃんかー！ 皆いるから、もう大丈夫だぞー！！ さあ、一緒に帰ろーぜ」

近づいて行くツナをフウ太君は制止する。僕は、この状況に目を向けられなかった。

「僕……皆のところには戻れない。骸さんについていく……」

「な……何言ってるんだ……?」

「さよなら……」

「ちよっ、待てよフウ太!!」

ツナはそれを追いかけていく。

「10代目!! 深追いは危険です!!」

獄寺君が止めようとする。しかし……

ビュッ

突然飛んできた鉄柱が行く手を阻む。

黒曜中の制服を身に纏い、帽子を深く被った男が現れた。おそらく、彼が投げてきたのだろう。

ドガガッ

「くっ、こっちも塞がれた……」

「やっば、10代目を追うには、こいつを倒すしかねえな」

獄寺君が前に踏み出すが……

「ぐっ!?!」

突然の痛みに怯む。治療の副作用か……

痛みを耐え、奮い立つ。

「さっさと終わらずぞ、怪力ヤロー。こっちや暇じゃねーんだ」

「……無駄だ」

男は帽子に手をそえ、帽子、学ランを続けざまに投げ捨てた

「俺には勝てん」

「お前は!?!」

「写真の!?!」

「六道 骸!?!」

遂に来たのか……

北イタリア最強

ランチア!?!

V S ランチア（前書き）

クロサマデス。

暴走しなイカ？

特に意味はありません。

では、本編をどうぞ

V S ランチア

Side 刹那

状況は極めて最悪。こちらは、副作用のせいで動けない獄寺君。既に左腕を負傷してしまっている山本。プロとは言え、近接戦闘は専門外のビアンキさん。掟によって戦えないリボーン君。そしてとりあえずは無傷な僕。

対する相手は、1人とは言え、エリア最強の称号をもつ歴戦の用心棒、ランチア。

屋上で、僕がやる、なんて威勢のいいことを言ったものの、実際に向き合ってみると分かる。僕なんかでは全く話にならないであろうことは歴然だ。弱体化した状態で、この威圧感というのに、冷や汗が頬を伝う。

隣にいる山本も、困った顔をしている。

「かかって来ないのならば、こちらから行くまでだ」

振り回していた鋼球——蛇鋼球を片手で弾く。

「千蛇烈覇!!」

狙われたのは山本。避けようとするが、鋼球に吸い寄せられて、正面から喰らってしまう。

「山本!!」

鋼球の持つ衝撃は、山本の体を簡単に吹き飛ばす。転がる体は、木に当たることによってやく止まった。

「いてて……咄嗟に、こいつを盾にしなかったらヤバかったな」

山本は背負っていたバットを正面に移動させることで、ガードに成功したようだ。僕はホッと一息をつく

「でも、なんだありゃ。鋼球に吸い寄せられたぜ？」

それは、あの鋼球に彫られた蛇の模様が原因なんだけど……

僕は、山本に伝えなかった。僕が異世界の人間であることを知っているのは、未だにツナとリボン君だけ。世界の事情を知っていることで、他のマフィアに狙われることを防ぐためだ。山本たちを信じていない訳ではないけれど、知っている人間が少ないにこしたことはないだろう。

またもや、ランチアが鋼球を押し出す。

「そのカラクリは、こいつで確かめてやるぜ」

バットを使って砂を巻き上げる。

その砂は、風によって鋼球に巻き込まれていった。

「なっ、気流!?!」

その風に態勢を崩され、山本は転倒してしまった。そのおかげで鋼

球も避けられたから、結果オーライだね。

「あれは鋼球に彫られた蛇の模様によるものだな。あれによって気流がねじ曲げられ、強力な風が生まれてるんだ」

「分かったところでどうにもならん」

今度は両手で打ち出す。

「暴蛇烈覇!!」

「だったら、基本的に忠実に確実に避けて、その隙をつくまでだ!!」

山本は駆け出す。しかし、鋼球は先ほどの風がそよ風に思える程の暴風を巻き起こす。

「なにっ!?!」

山本の体を易々と持ち上げ、正面に吸い寄せる。

ガッ

「ぐっ」

木に叩きつけられる。その衝撃は、生きた木々にヒビをいれた。その一撃に、さすがの山本も気を失ってしまった。

「次は……お前だな」

「なんで僕を狙わなかったんですか?」

「先ほどの奴の言葉ではないが……基本に忠実に、傷ついた奴から始末したただけだ」

「それは失敗でしたね。あなたは、僕に技を見せてしまいましたから」

「見ただけで、そうそう攻略できる技ではない」

いや、そうでもないよ

「暴蛇烈覇!!」

暴風を撒き散らし、鋼球が僕に向かってくる。

「刹那、避けなさい!!」

避けちゃだめなんだ、ビアンキさん。相当速く動かないと、暴風域からは逃れられないからね。山本が出来なかったのに、僕が出来る訳ないんだよ。

この技の怖いところは、態勢を崩されてしまうこと。それを引き起こすのは強い風で、それを作り出すのは鋼球の回転……つまり、正面にいれば風に体を持って行かれはしない

「あのバカ、鋼球を受け流すつもりだな」

「そんな。無茶よ、刹那!!」

ふふん、為せば為る!!

鋼球が触れる直前。左足を半歩下げることとで体を左向きに傾ける。そして右腕を球の左側に滑り込ませ、外側に押し出す。

「ぐっ!!」

この鋼球重い……。投擲物っていうのは、横向きに力は働かない筈なのにな。それにこの回転、すごいわい。でも……!!

「おおおおおおお!!」

ガッ、ドシン

鋼球は軌道をずれて、木々を粉碎した。

キャラに合わない掛け声しちゃった。

「……ほう」

凌いだのはいいけれど、右腕に激痛が走る。回転のせいで、右腕には凄まじい裂傷と火傷が刻まれていた。

受け流すので精一杯だったな……。ツナみたいに、あれを受け止められる力があればよかったんだけど……

「あれを凌げるとは思わなかったな。とは言え、傷だらけか……。そうなるとは思わなかったか？」

「いえまさか。ノーリスクノーリターン。リスクを払わないと、見返りなんてありませんよ」

「なるほどな……その歳でそのようなことを言うのか。ならば俺も、その粹に免じて本気で戦ってやろう」

接近戦か……蛇鋼球を使われなければ何とかなるか……？

「鋼球など、お遊びに過ぎん」

鋼球を宙に投げ、突進してくる。3歩で間合いを詰め、初撃を放つ。

何とかかわしたが……まずい！！

直ぐ様2撃目が僕を襲う。

顔面に直撃。いや、今のは何とか凌げたか？ 自ら後ろに飛ぶことで衝撃を緩和する。僕の身体はその攻撃で簡単に弾き飛ばされ、地面を転がる。受け身がとれてなかったら危なかったな……

先ほどまで僕がいたところに鋼球が落下した。

突然

「こらあ、なにやってるんだ！！」

そんな声が聞こえる。

「……ボンゴレか。降りてこい。こいつらを始末して待つ」

迂回して降るためだろう。ツナが森の中に消えていく。

「いたたた。いや、そうはさせませんよ」

「立たないほうがいいぞ。勝敗は見えている」

「いやいや、やってみなくちゃ分からないですって」

そして僕は山本を、獄寺君を、そしてビアンキさんとリボーン君を見る。

「さて、リボーン君。お願いだ」

「なんだ？」

「ツナが戻ってきてても、手を出させないで欲しいんだ。この人は僕が何とかするからさ♪」

Side 綱吉

森を駆ける。早く皆の所に戻らなくっちゃ。それにしても……

「さっきの黒曜の人質の人、なんか変な感じだったな」

何か不思議っていうか、不気味っていうか……フウ太といい、六道

骸に関わると変になっちゃうのかな？

木々が切れ、視界が開ける。大した時間、森の中にいたわけではないはずなのに日が眩しい。ようやく光になれると、目の前は崖だった。

「うわっ、危なかったー」

ホントに。心臓が止まるかと思った……

ん？

下では戦闘が繰り広げられていた。

あれは、六道 骸！？

無事なのはビアンキとリボーン。山本は木に寄っ掛かって倒れていて、獄寺君は何かの痛みに耐えるかのようにうずくまっている。刹那は今現在戦ってるけど、もうボロボロだ。

自然に言葉が出てくる

「こらあ、なにやってるんだー！！」

って、なんで六道 骸のこと家のチビたちを相手するみたいに叱ってんだー！！

「……ボンゴレか。降りてこい。こいつらを始末して待つ」

そんな！？ 早く行かないと。ってどうやって降りよう。こんな高いところからなんて、怖くて降りれないよー！！

あつ。あそこなら低くなってるから降りれるかも……

「リボーン!!」

「遅かったな、ツナ」

「獄寺君は大丈夫なの、ビアンキ？」

「ええ、これはシャマルのトライデント・モスキートの副作用なの」

「なんで!？」

「商店街での針に毒が塗ってあったのよ」

「そんな!？」

それじゃあ、獄寺君は俺のせいで……

「違います、10代目。もともとは爪を誤った自分の責任です。ぐっ……」

獄寺君……ありがとう

「山本は？」

「あいつにやられたんだぞ」

「安心して骨とかに問題はないわ」

よかった……

最後に戦っている刹那に目を向ける。見たところ、最も傷は酷い。

そして、その戦いは一方的なもの。殴り飛ばされても立ち上がる。しかし、直ぐに何も出来ずにやられてしまう。

「どうしよう。刹那を助けないと!!」

「でも、相手が強すぎるのよ。私では歯がたたないわ」

「そんな……だったら俺が死ぬ気になって」

「ダメだ」

「なんで!?!」

「あいつが、お前には手をださせるなって言ったんだぞ」

刹那が?

「今度は守りたいんだろ。獄寺の時には失敗しちゃったからな。知ってたのに何も出来なかった、それほどつれーもんは、なかなかねーぞ」

「そんなの!!」

「ああ、ただのあいつのわがままだ」

「そうだよ、自分かってすぎる。守ってもらったって、それで傷だらけになれたら、全然嬉しくないよ」

「刹那を助けたいか？」

「うん！！」

「そうか、でもマフィアは仲間との約束は守るもんだからな。違う方法で助けてやる」

リボーンは弾を銃に装填する。

「これで終りだ。剛蛇烈覇！！」

それってまさか……死ぬ気弾！？

ガァン、ドゴーン

銃声と鋼球が地面にぶつかる音が重なる。

鋼球の衝撃は土を撒き散らし、視界を塞いだ。

刹那は！？

土煙が徐々に晴れていく。

彼がいたはずのところには1つの影

完全に視界が暗れる。そこに立っていたのは1人の少年

「死ぬ気で倒す」

黒髪短髪。額には白い炎を煌めかせ

死ぬ気の刹那がそこにいた。

死ぬ気刹那 来る（前書き）

暴走したっていいじゃない、人間だもの。

死ぬ気刹那 来る

Side 刹那

手を出させないで？

なるほどね

そう頼むところなるのか……

「死ぬ気で倒す」

ふう、俺様が撃たれるとは思わなかったぜ

つーかいてーよ。何だよこの鋼球。なんか止められたけどさ、直撃したらこんな重いわけ？

「鋼球を……止めただど！？」 先ほどまでは受け流すのすら精一杯だったはずだ」

「……………」

「どうした？」

なんかよ、気持ちが高ぶって……

「ぎゃはははは、驚いたかよおにーさん。こいつが、死ぬ気ってや

つだぜ。所謂、火事場の馬鹿力ってやつだ、ぎやはは」

「!？」

「ぎやはは、俺様のカッコよさに見とれちまって、言葉がでねーってか？」

「お前、さっきの奴なのか？」

「何言っただ、ぼけたかよおにーさん。アルツハイマーには早すぎるんじゃないの？ でも分かってねーみたいだし、自己紹介してやろうか？　ぎやはは、プロフィールを公開しますか？　はい？　いいえ？　みたいな？　ぎやはははは」

なんだよ、揃いも揃って口あけて。

「雪見 刹那だぜ？　一瞬しか雪を見ないってか？　ぎやはははは。やべーやべー、時間ねーんだった。5分だっけか？　今、何分たつたかな。まあ、いいか。とにかく時間やべーからよ、俺様から行かせてもらうぜ？」

それで跳躍。おお、めっちゃ飛べんじゃないか。アイキャンフライ！！

思ったより、直ぐに着いたな。とにかくパンチしとくか。

顎？　鳩尾？　脛？　どうでもいいや、とにかく殴ろう

「くっ、剛蛇烈覇!!」

「ぐうっ」

いてーないてーな、邪魔だなそれ。んでも、あんなでかいの壊せないぜ？ おっ、いいのあんじゃん

足元に転がっているバットを蹴り上げてキャッチ。

止めた鋼球をドカンと地面に叩きつけて

「鋼球が壊せねーなら、鎖を叩っ斬る！！ さすが俺様、頭いー」

っておいおい、やるねー。隙は見逃さないってか？ んな早くに間合い詰めんのか。すげーな。俺様も出来るけどよ、ぎやはははは。

んでも、こいつは無理だな。連撃全てで急所狙えてんじゃん。当たったら痛いし、適当に受け流しとくか。

ガガガガガッ

「なあ、いつまで続けんだよ」

「5分だ」

「ぎやはははは、タイムリミットまでか。確実な手だね」

でも、つまんねー

「死ぬ気で倒してやるからさ、もっと楽しくやりましょう……ラン
チアさん」

Side 綱吉

「ひいいい、死ぬ気の刹那こえー」

でも、死ぬ気って感じではないよな。どっちかっていうと……

「二重人格って感じ」

「……………そうだな」

「どうしたんだ？ リボーン」

「いや、なんでもねー」

「？ ならいいけど」

刹那は凄まじい応酬をしている。両者ともに一行に譲らない。拳を突き出されれば往なして反撃をし、往なされる。そんな殴り合いが続く。

「さっきまではあんなにボロボロにされてたのに、今は互角に戦えている。死ぬ気になるだけでこんなに違うなんて」

「まあな。だが、理由はそれだけじゃねーぞ」

そうなのか？

「あいつがなんで了平に勝てたかわかるか？」

「見てないから何とも言えないけど、能力が高かったからじゃないの？」

「ちげーぞ。あいつはな、器用で反応が速いんだ。何度か見てわかったが、筋力とかそういったものは、平均値もしくはそれ以下。了平の足元にも及ばねー」

「そうなの！？ でも器用って……」

「なるほどね。だから、M・Mのときは」

「うわっ、ビアンキいたの！？」

「いたわよ」

「心読むなよ！！」

「読んでないわ」

「読んでんじゃん！！」

「そうだぞ。器用ってのはモデリング学習能力が高いって言ってもいいな。ド素人が、ワイヤーを使うなんて出来るもんじゃねーからな」

「でもそれにどういう意味が？」

「わかんねーのか？ おめーはホントダメツナだな」

ひどっ！！

「あいつは日常生活で、身体のより良い動かし方ってのを学習してんだ。つまり今までは、身のこなしだけで戦ってたんだぞ。それが今、死ぬ気弾によってパワーアップしてるからな、肉体的に不可能だったことが出来るようになった。言い換えれば、自分の考えや反応に身体が追いつくようになったってことだな。だが、身のこなしと基礎能力だけじゃ勝てねーのが現実。その2つすら決定的に劣ってるし、何分戦いに慣れてねー、まともにやってたら勝てねーぞ」

そんな……

まだ先ほどの応酬は続いている。このままでは、時間切れで刹那の敗けだ。

しかし、たったひと言が戦況を変える。

「死ぬ気で倒してやるからさ、もっと楽しくやりましょう……ランチアさん」

「!？」

え、ランチアさん？ 六道 骸じゃ……

「エリア最強でしたか？ そんな人が何を俺・なんか手こずってるんですか？」

そう言いながらも、手は休めない。

「何があったんです？ 帰ったら仲間が皆殺しにでもされてましたか？ んで、犯人探ししたら自分だったとか……。気がついたら、覚えのない死体の前にいるとかもあり得ますかね。狂ったと思って自殺を計るも許されず……。ねえ、六道 骸に操られた哀れな用心棒さん」

！？ どういうこと！？

相手の動きが鈍る。

「なぜそれを……！？」

「何たって俺は、火星人ですから。そして」

一瞬にして懐に入り込む。

「くっ」

「俺も友達のことがあるから。そんなグラグラな人には負けられないんです」

「ガハッ」

刹那の拳撃が敵の腹部に突き刺さる。

「悪いけど、俺の勝ちだよ。先に進まさせてもらいます」

刹那がニコッ、と笑う

「……俺が敗けるとはな」

「まあ、縛られたあなたにならね。でも、それも終わり。俺は知ってます。ランチアさん、あなたは悪くない」

「……ふっ、その名前で呼ばれるとファミリーを思い出すな。雪見刹那と言ったか？ 感謝する」

「どういたしまして。さて、そろそろか……コツはわかったし、僥倖かな」

そう言うのと額の炎が消え、刹那の身体が傾く。

「わっ、と」

「緊張が切れたのね、無理もないわ。ゆっくり休みなさい」

「すみません」

「けっ、今回だけは褒めて置いてやる」

「獄寺君、おさまったんだね。ツナのことしっかり守れよ、右腕」

「言われなくても」

最後に俺を見ってくる。

「ははっ、なんか僕が死にそうな雰囲気だね。いや、冗談はさておき、真面目な話」

「なに？」

「次に会った時、僕が眠ってたなら、ぶん殴ってでも起こして欲しい」

「どうということだろ……？」

「約束だ」

「う、うん」

そうして、刹那は気を失った。

「よし、んじゃぶん殴って起こすぞ」

「なっ！？　そういう事じゃないだろうっ！？　次に会った時って言うってたじゃん！！」

空気読めって、リボーン。怖くて直接は言えないけど……

「嫌だぞ」

心読むなよ！！

「読んでねーぞ」

読んでんじゃん！！

「……気絶したか」

「!! えっと、ランチアさん、でいいですか？」

「ああ、構わん。

……聞け、ボンゴレ。六道 骸、奴の真の目的は……」

目的？

「……!!? どけっ!!」

ドンッ

え？

「ぐあっ」

ランチアさんの身体には、大量の針が刺さっていた

「ランチアさん!!」

「くそっ、メガネヤローだ!!」

「口封じだな」

「……もういないわ。一撃離脱ね」

「しっかりして下さい、ランチアさん!!」

「ガハッ、ボンゴレ。六道 骸、奴は危険だ。お前の手で、ファミリーを守るんだ」

「ランチアさん!!」

「これで俺も、みんなの下へいける……な……」

ランチアさんもまた意識を失った。

「散々利用しといて、不要になった途端……クソッ、これがあいつらのやり方かよ」

「人をなんだと思ってるの？ 六道 骸」

……どうしてこんな酷いことをするんだ。

「皆、行こう。六道 骸、絶対に許せないよ」

「ええ、ついていきます!!」 「そうね」 「元から行くつもりだぞ」

「それとな、ランチアのやつはまだ無事だぞ。1時間以内に解毒剤を投与すれば大丈夫だ」

「きっとヨーヨー使いが持ってるわ」

「うん。なら急ごう!!」

「……山本と刹那は無理だな」

「安全な場所へ移しましょう」

「ごめんね……すぐ戻ってくるから待ってて……」

「まったく、これからって時によお……」

その時

「バーズやられた、バーズやられた」

と鳥が言った。

ってあの鳥しゃべんのー！？

そして、その場から飛び去っていく。

「今まで静かだったところを見ると、時間差で助けを呼ぶように訓練してあったんだな」

「あのオッサンらしい、セコい手だぜ」

見ると、一際大きな建物に向かっている様だった。

「黒曜ヘルシーセンター。あそこに骸が……」

俺たちは、足を踏み出した。

死ぬ気刹那 来る（後書き）

死ぬ気⇒コントロール下の死ぬ気 ハイパーじゃないです。バジル君もかなり冷静な死ぬ気でしたし……です。

キャラまんまパクんな。もう出ませんのであしからず。

V S 骸（前書き）

同じところはばっさり省略

ビアンキと獄寺を無力化した後からですね

VS 骸

Side 綱吉

城島 犬と柿本 千種は無力化したし、獄寺たちも神経を麻痺させることで眠らせた。なのに……何故戻らない。これ以上、憑依が出来る人はいないはずだ。

「リボーン。2人を頼んだ」

「急に威張んな」

神経を研ぎ澄ます。本体がここにあるから、遠くには行っていないはず。一般人に憑依しても意味はないし……

「クフフフ、その通りです」

その声は入口から発せられていた。口調は骸そのもの。だが……

「どういうことだ？」

あいつは、骸に会ってすらいないはず。いつ契約した……？

「特に難しいことはありませんよ。ただ、以前彼に喧嘩を売られまして、その時に契約しておいたんです」

「だが、意味はない。俺は神経に直接打撃することで無力化する術を直感している」

「果たしてそれが役に立つでしょうか」

彼は不適に笑う

「この、僕の修羅道のスキル、さらには戦闘経験を積んだ僕が憑依している雪見 刹那に」

S i d e 刹那

見渡すかぎり草原が広がっている。どこだろ、ここ。いや、なんか見覚えがあるようなないような。

こういう所に来たら、まずは大の字で寝転がるべきだね。

しかし、ここは風に揺れる草の音しかないな。外界から切り離されているかのような静寂が心地よい。

そうか……思い出した。

「悪くないね。精神世界っていうのも」

「同感です」

気がつけば、僕の隣には少年が佇んでいた。

「どこまで続いてるんだろうね。ここの散歩は、はたして楽しいのかな？　僕なら飽きちゃうかも」

「楽しいですよ。時々、面白い発見もありますしね」

「そっか」

優しい音、優しい風、そして優しい世界が僕たちを包む。

「で、こんな所までどうしたの？　もしかして終わったのかな？」

「いえ、真っ最中です。あなたの身体を借りに来ました」

「？　君なら、問答無用で奪い取るかと思ったんだけどな」

どうしてだろう。そんな疑問が頭に浮かぶ

「あなたからは、私たちと同じような“闇”を感じたので」

闇……ね。

「悪いけど……そんな大層なものじゃないよ」

ただ……過去に縛られているだけ

「クフフ。そう言ってしまうえば、僕らもそうですよ」

エストラーネオフアミリーの人体実験。どのような苦しみがあったのか、考えられない。いや、考えられるけど考えたくない。

「世界に対する復讐か」

「ええ」

「……うん。やっぱり君達のほうが、ずっと高尚で最悪だ。僕には、そんな理念もないし勇氣もない。闇なんておこがましい。ただの矮小で最低な、影であればましな程度の過去さ」

「言ってくれますね。確かに、あなたの過去は矮小で最低かもしれませんが」

君こそ、言ってくれるね。

「あーあ、やっぱり精神世界なんて嫌いだな」

心が流れ出るみたいだ。彼からは伝わってこないのにね。

「慣れていますから」

「便利な言葉だ……うん、持っていきな」

「いいのですか？」

「君がそれを聞くの？ でも、代わりと言ってはなんだけど、山本には手を出さないで欲しいかな」

「約束しましょう」

「あはは、信じていいのかな」

「クフフ、どうでしょうね」

そろそろお別れの時間だ。

「君はツナには勝てないよ」

「何故ですか？」

「なんとなく」

「なるほど」

暫しの静寂

「君とはもう友達だ。断られても関係ない。骸君って呼んでいいかな」

「では、僕は刹那と呼びましょう」

骸君が背を向け、僕は目を瞑る。

「それでは」

「それじゃあ」

「a r r i v e d e r c i」
またあいましゅう

S i d e 綱吉

同時に駆け出す。骸の欠けた三叉槍と俺の腕が交差する。
槍を受け流し、急所をつく

決まったか？

「どうか……しましたか？」

「なにっ!？」

確かに急所を叩いたはずだ。考えられるとすれば

「咄嗟に打点をずらしたのか」

「その通りです。思ったよりいい身体だ。考えるより先に身体が動いてくれますね」

厄介だな。あの修羅道のスキル……皆を同じ強さにする訳ではなく、

もとの素質にプラスするタイプみたいだ。

どれだけ狙っても、反射で打点をずらされてしまう。傷つけられないせいで、強い攻撃が打てないのが痛いな。

「あなたの秘策は通用しません。さて、これはどうですか？」

槍を巧みに操る。隙が出来たところに蹴りが来た。なんとか腕で防御したものの衝撃で吹き飛ばされる

「くっ」

どうしたらいいんだ。

刹那の言葉を思い出す

——次に会った時、僕が眠ってたなら、ぶん殴ってでも起こして欲しい

これを見越していたのか？ 刹那……

……ごめん

グローブを額の炎にかざした。グローブに炎が移る。

「そうだぞ、？（イクス）グローブは死ぬ気弾と同じ素材でできていて、死ぬ気の炎を灯すことができるんだ」

「まるで毛を逆立てて、体を大きくみせようとする猫ですね。だが、いくら闘気オーラの見てくれを変えたところで無意味だ」

「死ぬ気の炎は闘気オーラじゃない」

「ほう……面白いことをいう。ならば見せてもらいましょう」

いいだろう……いくぞ、骸！！

炎の推進力を利用して、高速移動をする。一瞬で骸の背後に回り、拳撃を放つ。

「なっ!?!」

骸はギリギリで三叉槍を盾にする。すると、槍があたかも熱で侵されたかのように曲がってしまった。

俺はその体勢のまま、手刀を繰り出す。

「つつ。まさか、闘気オーラ自体が熱を帯びているのか!?!」

「死ぬ気の炎と闘気オーラではエネルギーの密度が違う。限られた人間にしか見えない闘気と違って、死ぬ気の炎はそれ自体が破壊力をもった、超圧縮エネルギーだ」

「そのグローブは焼きゴテというわけか……」

でも……おかしい。憑依している骸は痛みを感じないんじゃないのか？ でも、現に骸は熱を感じている。

「まさかつ、刹那が自分から貸し出しているのか!?!」

「クフフフ、その通りです。いくら憑依弾が強力と言えども、ここ

まで馴染んではくれません。しかし、計算外と言えば計算外。犬や千種に憑依してもこうはなりません。彼の適当な性格ゆえかもしれない。憑依力が強すぎて、痛みまで感じてしまうようです」

槍を降りおろしてくる。それを瞬間移動でかわし、また背後に回る

「また背後に！！」

攻撃最中だったので反応が遅れる。殴られた衝撃で倒れ、同時に三叉槍の刃の部分がどこかへ飛んでいった

「がはっ……あなたのような人間が、仲間の身体を傷つけられるとは」

「刹那との約束だからな」

「約束……ですか？」

「次に会った時、僕が眠ってたなら、ぶん殴ってでも起こして欲しい。そう言われた」

「なるほど、最初から……。刹那も余計なことをしてくれる。ボンゴレのためにフェアな状況を作り出した訳ですか。まあ、彼はそういう人間かもしれないね」

「知ってるような口振りだな」

「僕と彼は友人、らしいですよ」

「！？ 以前に会った時は喧嘩をしたと言ってなかったか」

「つい先ほど、再開した時の話ですから」

……いつの間に、どこで？ そんな時間も場所も無かったはず

「時間の概念のない、精神世界にて。クフフフ、さて、僕も本気でやらなければならないようだ。君の成長は僕の予想を越えてしまった」

本気……だと？

「僕が未だに使用していなかった、最後のスキル第5の道“人間道”。これだけは使いたくありませんでした。何故ならそこは、6つの世界のなかで最も醜い世界ですからね。だから僕はこの世界を嫌い、このスキルを嫌う」

骸が自らの手を目に突っ込んでいく。

そこからどんどん血が溢れ出し、それが頬を染めていった。

くっ、刹那の身体を……

「しかし、他人の身体でこのスキルを使うことになるとは思いませんでした。人間道だけは、何故か本体でしか使うことが出来なかったんですね」

そして遂に、瞳に“五”の字が浮かび上がる。

それと同時に、骸の……刹那の身体を真っ黒な闘気が包んだ。

オーラ

「クフフフフ、それでは……始めましょうか」

全く以てなんとなく

Side 綱吉

先程から、凄まじい応酬が続いている。俺は超直感で回避し、骸は異常な反応で回避する。

骸も言っていたが、刹那は考えるより先に行動する。いや違う。おそらくは考えることを放棄して行動が出来るのだろう。獄寺との戦いが一番如実だったかと思う。刹那は、ダイナマイトが投げられた瞬間に移動を開始していた。自分に向かってくることはわかっている。敵の近くならば安全。確かにそうだが、それだけの理由で行動するのは案外難しい。なぜならば、肉を切らせて骨を断つという戦法もあるし、現実起こったことだが、相手がミスする可能性だつてあるのだ。人は実際には、それを考えずにはいられない。

そのリスクだけの成果は素晴らしく、そのスタートダッシュは脅威だ。

そしてそれだけではなく、考えた動きも出来るというのが、彼の厄介さに拍車をかけている。

そして、骸のスキルである人間道。幻覚を使える上に、修羅道以上の近接戦闘能力だ。

「見るがいい!!」

両者ともに一度間合いをとる。すると、骸から黒いオーラが飛んでくる。

これは幻覚、そう直感する。

「こんなことに意味はないぞ……くっ!？」

何故か顔面に激痛が走る。

幻覚に礫を潜ませていたのか。しまった……油断した。

「まだですよ」

上から骸が襲いかかる。だが、炎の推進力で背後をとる。

「厄介な技ですが、予想しておけば問題はありません……よっ!!」

予想していたのか、すかさず後ろに棒を横薙ぎにする。

「無駄だ」

「なっ、連続だど!？」

上空に蹴りあげ、自分もそれを追って跳躍する。何度か拳を交わしあう。だか僅かに俺の攻撃の方が速い。骸を殴り落とし、地面に叩きつける。

「これがボンゴレ10代目。僕を倒した相手か……」

骸は立ち上がれないようだ。

「クフフ、これは刹那の身体ですからね。これ以上のことは出来な

いのでしょうか？」

「くっ……」

俺が一瞬目を背ける。

「その甘さが命とりだ」

その隙について背後に接近され、腕を拘束されてしまう。

「骸、お前……」

「おっと、あの技が手の炎の力で起きているのは分かっている。手を封じれば怖くない」

ゴッ、ドッ

頭突きをされ、膝で脇腹を強打される。

「なぜ、多くの刺客に君を狙わせたのか分かりますか？ 君の能力を引き出してから乗っ取るためです。ご苦労でしたね。もう休んで……いいですよ!!」

思いつき蹴り飛ばされる。

「飛ばされた先を見るがいい」

先……？ つ……しまった!!

壁に先程弾き飛ばされた三叉槍の短剣部が刺さっている。空中では

受け身がとれない……!!

「ツナ、今こそ？（イクス）グローブの力を見せてやれ」

両手に気力を集め……手のひらから放射する。

「なっ、炎を逆噴射だど!? そうか……あの瞬間移動は、オーラ闘気の推進力を使っていたのか!!」

高速で骸に突進し、グローブの炎を顔面に押しつける。

「うああああ!! ……ああ……あ……」

顔に刻まれていた黒い模様が徐々に薄まり、最終的には完全に消えた。死ぬ気の炎が骸のどす黒いオーラ闘気を浄化したのだ。

……骸の気配が刹那から消えた。骸は？

「……………」

反応がない。

「オーラ闘気だけじゃなく、憑依していた骸も浄化したみたいだな。いくらシンクロしていても、人格があるなかに別人の精神がはいってんだ。異物として、追い出されちゃったんだろう。精神にダメージがいったんだ、暫くは目を覚まさねーぞ」

額の炎が消える。

「うっ……」

「刹那!？」

「終わったんだね。っていたたたっ」

「ご、ごめん。手加減できなくて」

「ああ、大丈夫大丈夫。……お疲れ、ツナ」

「うん、ありがとう。そうだ、皆の怪我は？」

「心配ねーぞ。ボンゴレの医療班も敷地内に到着したらしいしな。ランチアの毒も用意してきた解毒剤で間に合ったそうだ」

良かった……

骸を見ると

「骸さんに近づくんじゃねーびょん!!」

城島 犬と柿本 千種が、這いつくばって近づいて来ていた。

でも、なんで……？

「なんでそこまで骸のために？ 君達は骸に憑依されて利用されてたんだよ」

「分かった風な口をきくな……」

「だいたい、これくらい屁でもねーびょん。あの頃の苦しみに比べ

たら」

あの頃……？ 何があったんだ？

「俺らは自分のファミリーに、人体実験のモルモットにされてたんだよ」

人体実験！？

「その現状を、あの人はたった1人でぶっ壊したんだ。大人しくて目立つタイプじゃなかった。声を聞いたのもその時が初めてだった気がする。あの時、生まれて初めて、俺らに居場所が出来たんだ」

「それを……お前達なんか壊されてたまるか！！」

そうだったのか……でも、俺だって……

「仲間が傷つくのを黙って見てられない。だって……そこが俺の居場所だから」

「ぐっ！」

その時、入口に人影が見えた。医療班の人かな……？

ビュッ、ガッ

突然、3人の首に鎖がつけられる。現れたのは顔を包帯で隠し、黒一色の格好をした3人。

いったい何が……？

「ヴァインデイチェ復讐者”。マフィア界の掟の番人で、法で裁けない奴等を裁くんだけ」

奴等は3人を引きずっていく。

「ちょっと……何してるんですか!？」

「やめとけ。奴等に逆らうと厄介だ……」

「そん……」

「ちょっと待ってくださいよ、バミュータうんたらかんたらの名のもとに復讐する者さん達」

ちょっと刹那!？」

「……………ナンダ？」

「交渉しません？ 僕、面白い話を知ってるんですよ」

「……………」

「なんとか言ってくださいよ。透明の■■■■■」

「……!？ イイダロウ。キコウ」

一瞬、狼狽えた？

「聞いて、価値ないとか言われたらなー」

「なんのつもりだびょん!!」

確かに……

「なに？ 助かったんだからそれでいいじゃん」

「そうはいかねー。それに、あいつらに何を話しやがった」

リボーンが刹那に銃を突きつける。っておい!!

「君に教えたら……ていうか、他の人に話したら交渉決裂だよ」

「ちっ」

「でも、なんで骸たちを……？ やっぱり、気になるって言うかな…
…」

「んー、友達だから？ いや、とりあえずこう言っておこうかな…
…」

ニヤリと笑って言う

「全く以て、なんとなくさ」

Side 刹那

野球場。今日は野球部の秋の大会に山本の応援にきている。

カキーン

「おお、ホームランです!!」

「流石は山本!!」

ふん、僕でも出来るもん。2打席分位見れば……ライトのファールすれすれを狙ってね

「まったく、山本ごときに相手チームは何やってんスカね」

「全くです」

「……………」

突然後ろから声がかかり、振り返り声の主を見るとツナ・獄寺・ビアンキ・フウ太が固まる。

「って骸……!!?」

「犬と千種もいますよ」

「めんどい……」

「んあ？　なんか文句あつかよ？」

「ありませんっ！！　じゃなくてなんでここに？」

確かに、僕らから見ると不自然さが半端じゃない。

「今日の試合は、黒曜中VS並盛中ですからね」

「そうだったーーーーー！！」

因みに、今は並盛が勝っている。

「ん？　貴様はあの時の間違っって別の学校に入ってしまったせいで、我がボクシング部に入れなかった奴ではないか！！」

「げっ、あの時の」

「お兄ちゃん、知り合いなの？」

「ああ、とても強いやつだ。今からでも遅くはない、我がボクシング部に入れ！！」

「凄いですね。お兄ちゃんがこんなに喜ぶの、ツナ君の時以来です」

「んあ？　ボンゴレの次らと？」

「たりめーだ。10代目に勝るやつなんていねーんだからな」

「だと!？」

「犬、うるさい」

「うるへー」

あちらはあちらでかなり盛り上がっているようだ。

「並盛なんかには負けたら……クフフフフフフフフ」

「ひいっ!！」

怖いって骸君。何するつもりさ

「こんなことなら、野球部と契約しておくんですけどね。そうすれば、僕だけという素晴らしいチームが出来たと言うのに」

そんなことに? もったいなっ!!

「ところで、骸……怪我は？」

「相変わらず甘い男ですね。僕はまだボンゴレ10代目の座を諦めてはいませんよ」

「そうだよ、ツナ。骸の怪我のほとんどは僕が引き受けたんだからね。それで駄目ってどんだけ貧弱なんだって話さ」

「そうだった……」

まあ、だいたいこんな感じ。ボンゴレ側で骸君達の素性を知っている人は決して彼らを許さないし、骸君達は相変わらずボンゴレを狙い続けている。そんな歪な関係ではあるけれど、それなりに楽しい関係だと、僕は思う。僕とツナ達の関係は変わらないし、骸君達とはお茶したりボーリングしたりする関係。獄寺君は、ためーはどっちの味方なんだ、なんて聞いてくるけれど、僕の答えはただ1つ。

言わなくてもわかるよね。

理由？

そりゃ、全く以てなんとなくだよ

黒曜編 | 完 |

全く以てなんとなく（後書き）

奇をてらってこんなことに。意味はなくてもないんですが、唯彼で遊
びたかったってのが8割ほど。

ヴィンディチェに何を言ったか？ さあ、原作が進めばわかるんじ
やないですかね（笑）

嵐の始まり（前書き）

猫派

嵐の始まり

Side 綱吉

この間の黒曜センターでの死闘が嘘だったかのように平和な日常を送っている。普通の生活の素晴らしさが身に染みた。町が違っておかげで骸たちに会うなんてことはそうそうない。刹那は、結構仲良くやってるみたい。この前は皆でボーリングに行ったとか。

それにしても腹減ったな。

「母さーん、飯まだ？」

そう聞きながら階段を降りていく。途中ランボ達とすれ違い、その時に彼らが肉を持っているのを確認する。なんだ、もうできてんじやん。

「ってごちそうっ！？　なんで!？」

台所のテーブル一面に料理が並べられていた。母さんはなんか機嫌がよさそうだ。

「ママんどうしたのかしら。ツナがテストで100点でもとったの？」

「いや、今日もいつも通りのダメライフだったと思うけど」

……うん。やっぱり思い付かない。母さんは鼻歌を歌いながら、いまだに料理を続けている。本人に聞くしかないな。

「母さん!!」

「ふんふんふん♪」

「ねえ、母さんってば!!」

「あら、どうしたのツツ君」

やっと気がついた。って、危ないから包丁振り回すなよ。

「なんかあったの?」

「お父さんが帰ってくるのよ♪」

ええ、父さんが!?!? と言うか

「あの人、蒸発したんじゃないの?」

「やあねー。だったら、誰が私たちの食費とツナの学費を稼いでるのよ」

そういえばそうだった

「どんな人なの?」

「出稼ぎで外国で石油を掘っている泥の男なのよ」

……泥って

「でも、あの人は消えたって言ってたじゃん!!」

「ああ、それはね。『じゃあ奈々、行ってくるぜ。ツナには、俺は消えて星になった、とでも言っておいてくれ。その方がロマンチックだ』……って」

「なああああ!?!」

「面白いパパンね。それで、いつ頃帰ってくるのかしら?」

「もうすぐって書いてあったわ」

絵はがきが来てたの、と一枚のハガキが渡される。

写真は、一面が氷の大地でたくさんのペンギンが写っている。

そしてたったひと言

『もうすぐ帰る 父』

てか、ここ石油出んのかよ……

S i d e 刹那

「お父さんが帰ってくる？」

時は戦国嵐の時代……じゃなかった、ホントはとある日曜日。ツナと山本の補習のために登校中。僕と獄寺君はただのおまけ。

「ところで、なにやってる人なの？」

ホントは知ってるけど

「それがいい加減でさ。小さい時に聞いたら『世界中の工事現場で交通整理をしてんだ』って言ってて、結局なにしてたんだか知らないんだ」

「……世界中ツスカ？」

壮大な仕事だね。

「まっ良かったじゃねーか、ツナ」

「でも、ずっと帰ってこなかったんだよ。あんな父親……今更帰ってこられてもな」

ツナが暗い顔をしている。それを見かねたのか山本が

「今日、これから遊びにいかね？ どうせ補習だけだしさ」

と提案した。

「ナイスだ野球バカ。そうしましょう、10代目」

「え？ うん。ありがとう」

……ゲーセンか？ ゲーセンなのか？ まあ、見てればいいか

「それに、深く考えすぎないほうがいいッスよ。俺の家なんか、もつとドロドロのぐちゃぐちゃですから」

と獄寺君はニツコリと笑う。

まあ、腹違いの姉とかいるもんね。

「それじゃ、皆も呼んで賑やかにいこうよ」

「いいな、それ」

「アホと骸は呼ぶんじゃねーぞ」

「前向きに検討するよ」

アホは呼ぼう。骸君達は……ツナ達いるから呼んでも来ないな。

「はひ、皆さんで遊びに来るのは久しぶりですね」

「アホは呼ぶなっつったのに」

「誰のことですか!!」

三浦さんとランボ?

「おめーら、補習サボった分は、帰ってからネツチヨリやるからな」

「ネツチヨリやだー!!」

ガヤガヤと騒いでいるとランボがいなくなったらしい。ペットショップのケージの中にいるんだけど……

ふと、道の奥に知っている背中を見つけた。

「やつ、久しぶり」

「あ……雪見君。久しぶり」

思った通り、それは風ちゃんだった。彼女と会うのは、交通事故の時以来だ。アドレスは交換していたので、よくメールをしている。

「偶然だね。1人で買い物？」

「うん。麦チヨコを買いに」

ああ、麦チヨコ……ね。元から好きなんだ。

「そうだ。僕、今友達と遊びに来てるんだけど、一緒にどう？
いい人だから、仲良くなれると思うよ」
皆

「いいの？」

「大丈夫大丈夫。さっ、こっち来て。皆に紹介するよ」

と、凧ちゃんの手を引く。

「あ……」

「皆、紹介したい娘がいるんだけど」

皆が一斉に振り向く

「!？」

因みに、驚いたのは三浦さん。

「刹那の彼女？」

「違うよ山本、友達。さっ自己紹介して」

「……霧島 凧……です」

すかさず近づいてきて握手を求めたのは女のコの2人

「笹川 京子です。よろしくね」

「三浦 ハルです。むう、ライバルですか」

「ちやおツス、風。リボーンだ」

「……赤ん坊？」

それは気にしないでいいんだよ

まあ、そんな感じで自己紹介を済ませていく。

「ツナ、喉渴いた!!」

何だかんだ言いながらも、ジュースを買いに自販機までランボを連れていく。そして時間差でイーピンもジュースをせがみ、笹川さんも行ってしまった。

「なんだか……暖かいね」

「心地よい環境だよ」

風ちゃんも気に入ってくれたらしい。原作では人間関係が希薄な子みたいだったから、少し嬉しい。

ゲームセンターで、山本とフウ太がバトルしているのを見ると、突然爆音が聞こえ地面が揺れた。外では沢山の人々が逃げ惑っていた。

「自販機の方から聞こえたね。ツナ達が心配だ。様子見に行こうか」

「たりめーだ。急ぐぞ」

「ああ。ってん？　なんで俺のバットがあんだ？　今日は持ってきて

てねーんだけどな。でも折角だから持ってくか」

リボン君、いつの間に持ってきてたんだろう。というか、あのサイズでどこに隠してたんだ？ はつまさか、墮落した主人をもつ、耳がないネコ愛用の秘密道具を持っているのか！？ ……んな訳ない

「よし行こう！！」

ゲームセンターから出てすぐの広場では、戦いが繰り広げられていた。ツナはそれを座り込んで眺めている。

戦っているのは、額に青い炎を灯している少年、通称バジル君。もう1人は白髪……じゃない銀髪のロン毛……じゃないロングヘアーの男性、通称カス鯨……じゃないS・スクアーロ。スベルビ

「てめえら、何を企んでいやがる！！」

「答えるつもりはない！！」

「ならば、そっちのガキに聞くまでだああ！！」

「そうはいくか、その人に手え出してみろ。ただじゃおかねえ」

獄寺君が啖呵を切る。

「てめーらも関係あんのか？ よくわかんねーが1つだけ確かなことを教えてやんぜ。俺に楯突くと、死ぬぞお」

「その言葉、そのまま返すぜ」

「やめてください。おぬしらのかなう相手ではありません!!」

バジル君か忠告するが

「ありゃ、剣だな。俺が行くぜ」

スクアーロと山本の剣が交差する。何合か打ちあうと

「この太刀筋、剣技を習得してねえな」

「だからなんだよ？」

「軽いぞお!!」

ドシュッ

刀身から火薬が吐き出され、爆発する。最初の爆音はこれか。煙の中にはボロボロな山本が倒れていた。

「てめえ」

獄寺君もダイナマイトを構えるが、煙から現れたスクアーロに一撃で破れてしまった。

「あの人……なに？」

僕の隣から声が……って凧ちゃん!? なんでここに?

「行こうって言ったから……」

言っただけど!! まさかついてくるとは……

「何をやってるの? 教えて……?」

教えてあげたいのは山々だけど、教えたら君も危険な世界に巻き込んでしまう。それに今はそんなことしてる場合じゃない。早く避難させないと

「しょうがないなあ」

しまった、僕の女のコのお願いを断れないって言うキャラまだ生きてた!!

巻き返さなくては

「教えてあげるから、今は取りあえず避難しよう。僕じゃ、君を守りきれない」

「大丈夫。裸になった沢田くんと戦ってるから……今、教えて。今聞かないと、最後まで白をきられる気がする」

ごもつとも。はあ、腹をくくるか……

「じゃあ、良く聞いて。実は僕たちはマフィアの人間。ツナをトップに僕らは部下ってところだね」

「あの人も?」

「うん。彼は僕らと同じファミリー……組織に属しているんだけど……所謂、派閥が違うって奴だね。今、ツナは命を狙われてるんだ」

「獄寺君と山本君は行ったけど、雪見君は行かなくていいの？」

「残念ながら、僕じゃ歯がたたないからね。それに待ってれば心強い助っ人がくるから」

「そうなの？」

「そうなの」

「何でも知ってるんだね」

それは振り？ まあ、いいや

「なんでもは知らないよ、知ってることだけ」

決まった！！

「ひいいいっ」

ツナの悲鳴が聞こえる。死ぬ気の炎がちょうど消えてしまったところのようだ。

スクアーロの剣から火薬が放たれる。バジル君の武器がそれを防ぐ。爆風に乗じてその場を離脱する。

少しだけでも、時間を稼いだ方がいいだろうか。身体が震える。ラッチアさんの時は命の心配はなかったと言ってもいい。しかし、今回はそうじゃない。

「震えてるよ？」

気がつけば、凧ちゃんが僕の服の袖を掴まんで、僕を見上げていた

「いや、ただの武者……」

「私、あなたの力になりたい。あなたは、私の恩人だから」

「……駄目だ。危険な世界なんだ。命を失う可能性だってある。折角助かった命なんだから……」

「助けてもらったのは、命だけじゃ……ないよ」

……え？

「それに、あなたの命だって大切。守りさえばきっと大丈夫。あなたは私を守ってくれるでしょ？」

「勿論。どんなときでも!!」

大切な友達だから……絶対に……マフィアに関係がなくても、僕の助けが必要ならば

「だから、私はあなたのことを守りたい」

その時、一際大きな爆発が起こる。既に強力な助っ人、ディーノさんが到着していた。

「跳ね馬。お前に免じてこいつらの命は預けといてやる。だが……こいつは頂いていくぜえ!!」

「ああつ、ボンゴレリングが!!」

華麗な身のこなしで、スクアードは離脱する。

「無茶すんな、深追いは禁物だぞ」

「リボーン、なんで今頃出てくるんだよ!! どうして助けてくれなかったんだ!？」

「俺は攻撃しちやいけねーことになってるからな」

「な……なんでだよ」

「奴もボンゴレファミリーだからだ」

「ええええ!?! 俺、ボンゴレの人に殺されかけたの……!?!? どういうことだよ!?!」

遠くからサイレンが聞こえてきた。

「ボス、警察だ」

「捕まって面倒なことになるとマズイ。ここから離れるぞ。廃業になった病院を手配した。そこに行こう」

「でも、獄寺君達が!!」

「10代目!!」

獄寺君達が、ツナに近づいていく。

「よかった無事だったんだ」

「ええ、しかしあいつはいい……」

「それが」

リボン君がツナの言葉を遮る。

「お前らは今日は帰れ、お前らの戦闘力じゃ足手まといだ」

2人に辛辣な言葉を浴びせる。2人は言い返すことが出来ずに立ち去っていった。

「なんて酷いこというんだよ!! 2人とも俺のために!!」

「わかってるぞ。だが事実だ。それはアイツら自身も分かってるはずだぞ。それにアイツらは負けず嫌いだからな、あんだけ一方的にコテンパンにされてハラワタ煮え繰り返ってない訳ねーんだ」

「……あのう、ところで僕は？」

「おめーは来い。どうせ事情は知ってんだろ。急ぐぞ」

皆が去っていく。その背中を目で追い、それから隣の風ちゃんに目を向ける。

「こんな世界だ。後戻りは出来ないよ？」

「うん」

決意を秘めた眼差しで僕をみる。

「わかった。なら、これからは君もファミリーだよ、風。絶対に守ってみせるからね」

「ありがとう。ところで、勝手に決めていいの？」

「た……多分」

「それに、私の立ち位置はどうなるの？」

「……僕の部下ってことになるんじゃないかな？」

「そっか。じゃあ、これからはボスって呼ぶね」

「好きなように呼ぶがいいよ」

そうして、僕に部下（仮）が出来た。

なんで突然受け入れたかって？ 幾つか理由はあるけれど、今回は照れ隠しにこう言うておく。

全く以て、なんとなくさ

ボンゴレリング

Side 刹那

僕たちは、スクアーロの襲撃の後、傷ついたバジル君の治療をするために中山外科医院という廃病院に来ていた。

「バジルはどーだ？」

「命に別状はねえな」

「よく鍛えられてるみたいですね。あんな人と戦って、よくこれだけですんだなって感じ」

ツナがおずおずと口を挟む

「あの……で……彼は何者なの？ やっぱりボンゴレのマフィアなんでしょうか？」

「いいや、違う。だが1つだけ確実に言えることは……こいつはお前の味方だってことだ」

「ええー、どーなってんのー！ー!? ボンゴレが敵でそうじゃない人が味方って……っ！か俺、敵とか味方とかありませんから」

「それがな、そうも言ってられないみたいだぜ？ あのリングが動き出したからな」

「あのリング？ ロン毛の奴が奪っていった奴？」

「ああ、正式にはハーフボンゴレリングと言うんだ」

たしか、この頃の3年後まではしかるべき場所に保管されるはずだったんだよな。

「高級な指輪だとか？」

あれ、いくらで売れんだろ。アイツなら高く買いそうだけど……

「確かに値のつけられない代物だが、それだけじゃねー。長いボンゴレの歴史上、この指輪のためにどんだけの血が流れたかわかんねーって言う、いわくつきの物だ」

「まじかよ。ロン毛の人が持っていてくれて良かったー」

「それがなあ……ツナ……ここにあるんだ」

デイナーさんがボンゴレの紋章が刻まれた入れ物を取り出した。

「ええっ！？ さっき奪われたはずじゃ……」

「こっちが本物だ。ある人物から、これをお前に渡すように頼まれたんだ」

「えーまた俺に！？なんで俺なの！？」

「そりゃ、ツナがボンゴレの……」

「ストップ!!」

「10代目だからに決まってんじゃない」

「待てっていったじゃん!!」

そんなの知らん。僕を止められるのは、リボーンの単行本の発売日だけさ。

「あっそうだ。家に帰って勉強しなきゃ!! ガンバロ!!」

そう言うのと、さっさと逃げていった。逃げ足だけは速いんじゃないの？

「あいつ、逃げられると思ってんのか？」

「あの……バジル君は囧だったってことですよね」

「多分な。バジル自身も知らされてないと思う。あの人のことだ。こうなることは読んでたんだろうが、相当きつい決断だったと思うぜ。でだ、さっきから気にはなってたんだけどよ……」

僕の隣を見る

「その娘誰だ？」

「凧です。さっき僕の部下になりました」

いたんだよ最初から。喋ってないだけで。

「さっきって……」

「……お願いしていられたの」

「リボン君。構わないよね」

今更駄目だ、とか言われても困るけど。

「そう簡単にマフィアの世界に入れていいもんじゃ……」

「いんじゃないか？」

「いいのか!？」

ディーノさん頭が堅いなあ

「……良かった」

かくして、凧は部下（仮）から部下にランクアップした。

「じゃあ、今日は色々と込み入った話するし、帰った方がいいと思う。後でまた連絡するから」

「うん。わかった」

凧は部屋から出ていった。これだけの為に連れてくるなんて、僕はなんてバカなんだろう。

「で、本題に入った方がいいんじゃないです?」

「そうだな」

ディーノさんがケースを開くと、中には7つのリングが入っていた。
トゥリニセツテ
7?の一角、ボンゴレリング。

「誰に配るとかは決まってるんですか？」

「……………」

「なんです？　ディーノさん」

「いや、相変わらず動じねーなと思ってよ」

「ポーカーフェイスなんですよ」

「痛いところ突かれたからか、汗が流れ出てるぜ？」

「まじですか？　あ、ホントだ!!」

「聞かれたくねーなら聞かねーから安心しろよ」

「パアアアッ　ヤッタ!!」

「で、どうなんです？」

「決まってる」

「へえー。誰です？」

「先ずは大空は勿論ツナだ」

まあ、ボスのリングだからね

「んで、嵐が獄寺で、雨が山本だ」

うん、鉄板だね

「雷がアホ牛で、雲は雲雀だ」

まっ変化なしだろうね。

「で、晴が了平で、霧が……」

「それが僕が呼ばれた理由でいいのかな」

「ああ。アイツはお前じゃないと交渉すらできねーだろうからな」

「ん、任されましょう。どうせ骸君達には用があったし」

しかし、残念残念。特になんとかリングとかの追加は無かったな。僕が読んだ二次創作には、“無”とか“風”とかあったのに。

「僕は暇になっちゃうね。あ、でもヴァリアーを迎え撃つんでしょ？」

「ああ、その為には修行しねーとな」

「リボーン君が皆みるの？」

知ってるけど流れるに聞いておこう。

「時間ねーからな。1人1人カテキョーをつけることにした」

「例えば、俺は雲雀 恭弥ってやつらしいな。どんなやつなんだ？」

「戦闘狂じゃないですか？ もしくは狂戦士^{バーサーカー}。めっちゃ強いです」

「へえ、だがその強さがツナの守護者には必要だな」

「ですね」

「あと決まってるのはツナと了平だ。獄寺と山本は自分で見つけるはずだ。アホ牛はどうしようもねーな。その分、お前に頑張ってもらうことになるな」

「了解」

って守護者どうしのガチンコバトルになっちゃうから、無理なんだけどね。この時点じゃだれも知らないから、仕方ないけど

「でも、ツナはリボン君が見るとして、笹川先輩は？」

「コロネロが来る」

「コロネロ君かー。僕ってマフィアランドでは遊んでただけだから、あんまり面識はないんだよね。ツナの修行は何やんの？」

「まずは基礎体力作りだな。小言弾を使える様にしねーと話になんねー。次は死ぬ気のコントロール。あの奥義には絶対に必要なこと

だからな。バジルに手伝ってもらうつもりだ。で最後に」

「その奥義ってやつだね」

「そうだ」

「……僕に稽古つけてくれる人はいないの？」

「……考えてなかったな。お前、守護者じゃねーし」

ひどっ！！　　というか仲間外れみたいで寂しいから、そういう言い方しないでほしいかな。

「じゃあ、第1段階だけはツナと一緒にやらせてもらっていいかな？」

「構わねーぞ」

「じゃ、そういうことで。ディーノさん、皆さんはここに泊まるんですか？」

「ああ、そのつもりだ」

「よし。じゃあ今日は僕もここに泊まりますね？」

「刹那は家があんだろーが」

「人肌が恋しい時もあるんですよ。一人暮らしだから寂しいんです。僕のマンション入居者いないし」

「お前の？」

「言ってませんでしたっけ？　僕、マンションの所有者なんですよ」
築1年位のやつね。

「俺らがそこ行くか？」

「入居者が来るまで、新品にしておきたいので……」

「まあ、勝手にしろ。場所はあるしな」

「ありがとうございます。それじゃ、僕は部屋で休みますんで」
それだけ言って、退散した。

部屋に入ると携帯を開く。風呂に電話をするためだ。

プルルルプルルル

ガチャッ

「もしもし、ボス？」

「うん。話終わったから。明日って暇？」

「学校あるだけ」

「そうだった。学校あるんだった」

「どうかしたの？」

「いや、今回の件で皆修行するから、学校行かないつもりだったから忘れてた。朝、知り合いにちよつと風を紹介したいと思ってたんだ。それじゃあ、学校終わったら……」

「大丈夫、学校休む」

「あ、そう？」

止めるべきなんだろうけど、まあいいか。

「それじゃあ、明日今日の病院に来てくれる？」

「わかった」

「んじゃ、また明日ね」

「おやすみ」

「おやすみー」

ガチャッ

あ、骸君達も学校じゃん。いいや、電話して休んでもらお

リングを君に

Side 刹那

「ディーノさんいますか？」

入り口からツナの声が聞こえる。少し前に獄寺君と山本がやって来ていた。

「ようツナ」

「10代目、おはよーございます!!」

「ツナおはよー。寝癖で髪の毛ボサボサだよ？」

もともとって知ってるけどね

「みんな!?! どうしてここに!?!」

「いや、妙なことがあって。ポストにこんなもんがはいつててさ」

「もしかして、昨日の奴等絡みかと思ひまして。跳ね馬にこの場所聞いてたんで」

そういつて2人はリングを取り出す

「ああー!?! そのリングって!?!」

「なんだツナ。知ってたのか、これ」

「やっぱ、10代目も持ってんですね！」

「なんで、2人がそれを!？」

「選ばれたからだぞ」

後ろから声がした。

「ボンゴレリングは全部で7つあるんだ。そして7人のファミリーが持つてはじめて意味をもつんだぞ」

「!？」

「お前以外のリングは、次期ボンゴレボス、沢田綱吉を守護するに相応しい6名に届けられたぞ」

厳密には、霧はまだ僕の手の中にあるけど……それと、それだと僕が相応しくないみたいじゃないか。

「なあ!？ 俺以外にも指輪配られたの!？」

「ボンゴレの伝統だからな」

そう、ボンゴレリングは、初代ボンゴレファミリーの中核だった7人が、ボンゴレファミリーである証として後世に残したものだ。そしてファミリーは代々、必ず7人の中心メンバーが7つのリングを受け継ぐ掟になっている。

「10代目!! ありがたき幸せッス」

そりゃ喜ぶよね……

「獄寺は『嵐のリング』で山本が『雨のリング』だな」

「なんだ？　嵐とか雨とか……天気予報？」

「初代ボンゴレメンバーは、個性豊かなメンバーでな。その特徴がリングにも刻まれているんだ」

初代ボスはすべてに染まりつつ、すべてを飲みこみ包容する大空のようだったと言われている。ゆえに「大空のリング」

そして守護者になる部下達は、大空を染め上げる天候になぞらえられた

すべてを洗い流す恵みの村雨　「雨のリング」

荒々しく吹き荒れる疾風　「嵐のリング」

なにものにもとられねず我が道をいく浮き雲　「雲のリング」

明るく大空を照らす日輪　「晴のリング」

実体のつかめぬ幻影　「霧のリング」

激しい一撃を秘めた雷電　「雷のリング」

そのとき、入口が開いた。

「……おはよう」

3人はポカンとしている。まあ、さっきまであんな壮大な話していたのに、突然マフィアでもない娘が現れたのだから当然だろう。

「昨日の女じゃねーか」

「そう言えば昨日もいたよね？」

「どーしたんだ？」

「ボスと待ち合わせ」

「10代目と？」

「……10代目？」

「ちげーのか？」

「10分前に来るなんて風は律義だよね。僕だったら、ピッタリに着くよ」

皆が僕の方を見る

「刹那が……ボス？」

「てめー、いつの間に……！」

「昨日？」

「なあっ!？」

「それじゃあ、僕は用があるから行くね」

「あ、そうだ。刹那は……その……守護者に？」

「いやいや、僕はただのファミリー。ただのツナの友達さ」

扉に手をかける。

「それじゃ、用がすんだら行くから。リボン君、修行は先に進めておいていいよ」

黒曜センターに来ている。骸君に霧のリングを渡すためだ。電話で学校はサボタージュするように頼んでおいたから、3人ともいるはず……

「ここに誰かいるの？」

もつともな質問。実際、ここは普通の廃墟であり、誰だって人がいるなんて思わないだろう。

「うん、僕の友達が住んでるんだ」

「どんな人？」

んゝ、骸君達の特徴ね……

「1人は、ニット帽を被って、めんどいが口癖。もう1人は、なんかバカっぽい。で、リーダー格の人がクフフって笑って、髪型がパイナツ……」

「違います」

「うわっ!？」

いきなり出てこないでよ。びっくりしたなあ

「……やつほー、骸君」

「おはようございます。彼女は？」

凧に自己紹介を促す。

「……霧島 凧。ボスの部下です」

「部下？ 刹那にそんなのいましたか？」

「昨日出来たばかりだからね」

「なるほど……しかし。面白い娘を見つけましたね」

でしょ？

風はよくわからない、という顔をしている。

「さて、今日の用件を聞きましょうか。学校を休んでというところ……マフィア関係の話でしょう?」

「さすが」

話が早くて助かるな

「頼みたいことは2つ。まずは1つ目。ツナの守護者にならないイカ?」

海からの使者風に言ってみた。

「僕に、沢田 綱吉の仲間になれ、ということでしょうか」

「いんや、別に? 今まで通りでいいんじゃない?」

「敵をチームに入れることの意味が分かりますか?」

「敵っぽいのがいてこそパーティーは輝くんだよ」

「クフフフ、なるほど。しかし僕には関係ありませんね」

「ムー……ヴァリアーって知ってる?」

「ええ、ボンゴレの特殊暗殺部隊ですね」

「XANXUSは?」

「相当な実力者だそうですね。それにひどく非情な男だとか」

「うん。だから骸君、守護者やってよ」

「会話の流れが適當すぎますよ」

そんなことないと思うんだけどな。分かんない分は、ふいーりんぐでなんとか……

「まあいいや。つまりはこういうこと。XANXUSはとっても強い。骸君がボンゴレが欲しいなら強固な壁になる」

「僕が負けると？」

「さあ。それは、やってみないとわかんないよね。で、問題はこれから。もし奴に負けたら、確実に殺される。君達が今生きているのだって、この間の相手がツナだったからなんだから。流石に、ノーリスクノーリターンを謳う僕でも、行動するにはリスクが大きすぎて、XANXUSには手を出したくはないな」

「リスクとして妥当な沢田 綱吉をボスに据えられる様に協力した方が、リターンは大きいと……？」

「まあ、比率の問題。始まりはなるだけスムーズに、テンポを掴めってね」

「ふむ……いいでしょう。あなたには借りもありますし……しかし、ボンゴレの仕事は最低限もしないので、それだけは分かっておいてください」

「恩に着るよ」

ははは、骸君ってば素直じゃないなあ。借りとか言わずに友達の頼みだからって言えばいいのに……ツンデレなんだから

「違います。借りを返す以上の意味はありませんよ」

心読まないでよ!!

「断ります」

え、読めんの!?

「当然です」

「……凄いお友達だね」

まあねー

「1つ目は解決つと。んじゃ、2つ目」

「言わなくて結構です」

そ、そんな……いや

「敢えて言おう……雪見 せ……」

「彼女のことでしょう」

……はい。

冷静沈着も、僕を止められるらしい

「私？」

「才能を開花させてあげて欲しい」

「いいでしょう。友人の頼みですから」

やっぱツン……

「違います」

むうー

そして、凧に目を向ける

「彼に修行をつけてもらうことになったからね。彼みたいなスペシヤリストに見てもらえるなんて、幸運なことなんだ。がんばってね。それじゃあ、僕行くから」

「ボス」

「ん？」

「頑張るね」

僕は微笑む……にやけてないよね？ カッコ良く微笑めてることを願おう。

「待ってる」

そして黒曜センターを後にした。そう言えば犬と千種には会えなかったな。まあいいか。

しゅ☆ぎょう

Side 刹那

ひゅーー、ドボーン

「頂上まであと100mもありますぞ。これでは、ヴァリアーに太刀打ちできませんぞ」

修行場所に辿り着くと、丁度ツナが崖から落ちてきたところだった。リボーン君は英国紳士的な格好をしている。

さて、頂上を見てみよう。あー、首痛い。高すぎるんじゃないの？日本にこんなところがあるなんて、ビックリして耳が大きくなっちゃうよ。

「あれ、刹那？」

「うん、刹那。お待ちせ、リボーン君」

「思ったより早かったな。どうなった？」

「万事おーけー」

「お前に任せて正解だったな」

「2人ともなんの話？」

「ひ・み・つ」

「なあっ!？」

別に言ってもいいんだけど、サプライズとして黙っておこう。

「ところで、どうしてここに？」

「修行に決まってるじゃないか」

「一緒にやんの？」

「第1段階だけだけどね」

さて、喋ってないで登ろうかな

登っては落ち、登っては落ちの繰り返し。なんで死なないのか、甚だ疑問である。時刻は夕暮れ、部活をやっている人達が帰るところだろう。今は休憩中なのだが、僕はひたすらに地面を眺めていた。なぜかと言うと、そろそろ彼女がやってくる頃だと思ったからだ。そして、予想は的中した。

「はひー!?!? 助けてくださーい。降りられなくなっちゃいましたー!?!」

「ハル!？」

見ないぞ……英国紳士として……いや、日本男児だけど

「刹那、降ろすの手伝って!!」

な、なんだと!? 見ろと言うのか!? いや、まだだ。僕には心眼機能が備わっている。

ツルツ、ドボーン

「刹那!？」

前が見えなくて、足元の水場に落っこちた。

しょうがない、無心だ。心を無にするんだ……目を開く

「げほっごほっ」

無理だ……まだ早すぎたんだ。

まあ、なんとか降ろすのを成功させた。

「こんなところで、何やってんだよ!!」

ツナは顔を真っ赤にしている。きっと、下着見えたし、とか考えているに違いない。

「ダブルツナさんが修行してるって聞いたので差し入れに来たんです!! ジャージ履いて来れば良かったです……」

三浦さんも頬を赤く染めている。ダブルツナさんって……なんかダブルツナサンドとかいうサンドイッチありそう。

僕はほら、ツナと違って大人だからさ。いつも通りにしてるよ？

「うう、刹那さんが目を合わせてくれません……」

「そそそ、そんなことないって」

「じゃあ、ハルの目をみてください」

「……………」

「やっぱり見てないじゃないですか!!」

勘弁してー!!

「あ、見た見てないと言えば、さっき獄寺さんが修行してるの見たよ」

「獄寺君もここに？」

「はい。でも、あんな修行で大丈夫ですかね。ボロボロになってましたよ？」

「獄寺君の近くに誰かいた？」

「いえ、1人でしたよ？」

あちゃー、やっぱり

「獄寺のバカ、シャマルに断られたな」

「ええ！？ 獄寺君のカテキョーってシャマルだったの！？ それより行かなきゃ。獄寺君、すぐ無茶するから」

ツナは三浦さんに場所を聞いて駆けていった。よし、僕も行こー！。

ドーン、ドカーン

おお、やってるやってる。森の奥から爆発音が聞こえる。

「獄寺君、やっぱり傷だらけじゃないか。止めないと」

そこで、人影がそれを制止する。

「ほっとけ、あーゆー何時になっても成長しねー奴は」

スーパードンディー、シャマルさんだった。

「Dr. シャマル！！ 何してるの！？ ここにいること、獄寺君は知ってるの？ とうか、何で獄寺君は家庭教師をシャマルに？」

「そりゃ、ダイナマイトをすすめたのが俺だからだ」

「えゝゝーシャマルって、獄寺君のダイナマイトの師匠なのー

」

いいよなあ。僕もシャルさんに習いたかったよ。

「虫酸が走るから、その言い方はやめろ。弟子をとるならチューさせてくれるプリプリ乙女と決めてんだ」

ナチュラルイケメン来たー！！ え、僕の感性おかしいって？
シャルさんが言うだけでGだってカッコ良く聞こえるじゃん。あ、
G^{ジィ}じゃなくてG^{ゴキ}だからね

「でも、何で獄寺君を拒むの？　ここまで来てんのに……」

「見えちゃいねーからだ」

「見えるって……？」

「あいつにそれが見えない限り、ここで死のうが知ったこっちゃねーよ」

広場で獄寺君がよろめいている。そして、火がついたダイナマイトを落としてしまう。

「ああ、危ない！！」

そのまま倒れてしまった獄寺君が爆風に飲み込まれた。

煙が晴れる。獄寺君は、穴ぼこに落ちたお陰で助かっていた。

「と、父さん！？」

ほう、あれがツナパパか。ピッケルを手には、ランニングシャツ・ヘルメットをかぶっている。

遠いから、ところどころしか聞こえないけど、何か喋っているみたい。

少し経つと、どこかへ行ってしまった。

そして獄寺君が呟く

「俺に見えてなかったのは……自分の命だ……」

「獄寺君、大丈夫!?!」

「10代目!! お恥ずかしいばかりです。こんな無様なところを……」

「あはははは、ぶっざまー!!」

「もやし!! テメーもいたのか!!」

わーいわーい、無様無様

「いや、コイツの言う通りだ」

「なっ!?!」

「いいか、今度そんな無謀なマネしてみろ。いらねー命は俺が摘んでやる」

「……シャル」

「自分の怪我は自分で治せよ。つたく、この10日間で何人ナンパできると思ってたんだ」

これで全員そろった訳だ……

しかし、やっぱ、かっこいいなーシャルさん。

S i d e 武

バシッ

竹刀が綺麗に面に入る。

まじかよ……親父がこんな強いなんて……まるで別人だぜ

親父が俺を見下ろしている。

「武、覚悟がねえなら家に帰んな。剣道をやりてえ理由が遊びなら、

父ちゃん以外をあたれ」

理由……か

商店街で銀髪のやつに負けた時のことを思い出す

「遊びじゃ……ねー」

竹刀を思いっきり振り下ろす。しかし、親父は脇をすり抜けると背後から切りかかってきた。

「いってーっ。後ろからは卑怯だぞ親父」

「卑怯？ 笑わせちゃいけねえ。遊びじゃないってのはそう言うことよ」

「……………」

「父ちゃんが教えるのは、戦乱の世に多くの人間を闇に葬った人殺しの剣」

人殺し……？ 何だよそりゃ

「名を、時雨蒼燕流という」

Side 恭弥

並中の屋上。目の前には1人の男

「よう恭弥。今日は戦いの前に指輪の話をしてえ。騙してるみてーで、スツキリしないからな」

「興味ないな」

君をグチャグチャにする事以外に

「真剣にやらないと、この指輪捨てるよ？」

「なっまで、のやろー」

彼は持っていた鞭を張る

「わーったよ。じゃあ交換条件だ。真剣勝負で俺が勝ったら、お前にはツナのファミリーの一角を担ってもらうぜ」

面白い。でもそれは叶わないな。君は僕に咬み殺されるからね。

Side 了平

ドカン

「す、すごいぞ、コロネロ師匠!!」

俺の目の前の地面が抉れている。

「戦場ではこういう強烈な1発が、絶望的とも言える戦況をひっくり返すことがあるんだぜ、コラ!」

「それは極限に燃える話だな!!」

「この美学が分かるとは、さすが俺の見込んだ弟子だぜ、コラ!!
よし、この技をお前にくれてやるぜ」

な、なんとっ!!

「まずはあの岩をぶっこわせ、コラ!!」

目前にあるのは、自分の10倍はあろう大岩

「では、ライフルを」

「これは俺のだ。お前は素手でやれ」

なに!!? 何かの間違いではないのか?

「早くしろ」

「無理だー！！ 何もせずに寝ていただけだぞ。あんな岩を砕けるわけがない」

「逆だぜ。しっかり休んだお陰で、いつもお前が酷使させすぎている細胞がいい状態になってるんだ」

細胞だと……？

「お前が優れているのは筋肉なんてレベルじゃないぜ。細胞そのものが何億人に1人というバネとしなやかさを持つてるんだぜ、コラ！！」

本当か！？

「あとは使い方だ。そこで……俺が直接強烈な一撃を体に叩き込んでやるぜ」

「なぜそうなる！！」

「お前は身体で覚えるタイプだ。俺の一撃を受け、感じ、覚えろ！！」

なに、無理だ……！！

「SHOT^{ショット}」

ぐうううう！！

身体に凄まじい衝撃が走り、崖に叩きつけられた

「し……死ぬかと思ったぞ……」

だが、何かを掴んだ気がする。強烈な一撃を放つための何かを……

「今度はお前が放つ番だぜ」

身体をライフルに見立てる

右足を引き金に

拳に向け、1つ1つの細胞のエネルギーを凝縮して

撃つ――！

カッ……ドゴオッ

大岩が碎け散る。

「その感覚を忘れるなよ、コラ――！」

S i d e 刹那

3日間かけてやっと第1段階をクリアした。さりげなく、クリアし

たのはツナの方が先だったりする。第2段階をクリアした状態で第1段階を死ぬ気でやっても意味がないとかで、通常状態で崖登りをさせられたのだ。それでも凄いつて思われるかもしれないけど、最後は疑似死ぬ気みたいになってたからね。よく考えてみて？ 最後の日は一人で黙々とやってたんだよ？ この苦しみがわかるかい？

でまあ、たった今クリアしたところである。死ぬ気ツナと死ぬ気バジル君が戦っていて、横ではリボン君とツナパパが見守っていた。

「やっと終わったー」

「おせーぞ」

「君が刹那君だな」

「はい、そうですよ？ ツナパパさんは、なんでこんなところにいるんですかね？」

「こいつはな、ボンゴレでありボンゴレでない組織、門外顧問組織^{チエ} C D E Fと言われるとこのリーダーなんだ」

「へー」

知ってたからきょーみないや。

「バジル君はあなたの部下です？」

「ああ」

知ってたからきょーみないや

「バジル君も死ぬ気になってるみたいだけど、死ぬ気弾撃ったの？」

よし、自然に本題に近づけたかな

「そういや、あいつなんか飲んでたな。家光、ありゃなんだ？」

「俺が開発した、死ぬ気丸だ。死ぬ気弾よか死ぬ気度は落ちるが1人で使えるから、便利だろ」

「ほほう、そんな素晴らしいものが？ んー、欲しいなあ。欲・しい・な！！」

「そんなに欲しいのか？ 君はツナの最初のファミリーだと聞いている。こっちの都合で守護者にはしてあげられなかったし、六道骸との交渉もしてくれたようだからな。こんなものでよければ、いくらでもやろう」

と服の中から瓶を取り出して、僕に手渡してくれた。

「ありがとうございます。これで戦闘の幅が広がります！！」

「ファミリーの増強は不可欠だし、よかったな」

ふむ、死ぬ気丸ゲット。これで、ここにはもう用はない。

「それじゃあ、僕は自分の修行をするね。ツナによろしく伝えておいて」

「家庭教師は見つけたのか？」

「んーん。ランチアさんも考えたんだけど、今はそんなことしてる場合じゃないだろうし、第一連絡先知らなかったんだよ」

「じゃあどうすんだ？」

「家庭教師じゃないけど、修行を手伝ってくれそうな人がいるから、そこいくよ」

僕が向かうのは黒曜センター。犬と千種に手伝ってもらおうってね。暇な時は骸君も相手してくれるかもしれないし、凧の様子も見られるしね。

ノゾンダセカイ（前書き）

それっぽく書こうとして失敗した気がします。みなさんがどう思うかはわかりませんが……

折角なので言っておきます。『刹那』という名前は『セツナノキヲク』という歌由来ではありません。偶然です。2日ほど前に気付いて、結構びっくりしました（笑）

ノゾンダセカイ

Side 風

待ってる。そんなセリフを残してボスは去っていった。今までの私はただの一般人。ボスを助けられる力もない。だから多分、自分達の土俵まで上がってこい。そんな意味を含めて言ったのだと思う。

決意を胸にボスの友達をみる。確か、骸君と呼ばれていた気がする。きつと下の名前だと思う。いきなり呼んでもいいのかな？

「風、ついてきなさい」

小さく頷く。

「あの、なんて呼べばいいですか？」

「好きに呼んでくれて構いませんよ」

と骸君（仮）は微笑んでくれた

どうしよう。骸・骸君・骸様？ そうだ、先生だから……

「マスター師匠」

「わかりました。これからはそう呼んで下さい……さて、ここです」

扉を開けると、そこは旧映画館だった。ソファやテーブル、ゲーム機やお菓子のゴミなどがあり、少し生活感がする。その部屋には、既に2人の男の子がいた。

「あれ、なんれすか？ そのブス女」

「刹那の置き土産です。部下だそうですよ」

「なんら、アイツ俺らに会わないで帰ったのかよ」

「用は、なんだったんですか？」

「これです」

マスター
「師匠はさっきボスから受け取った指輪を放り投げる。」

「リング？ ……これボンゴレの紋章」

「そうです。僕は、ボンゴレの守護者に選ばれたそうで……関わりはほとんど持たないという条件で受け取りました」

「骸様が決めたことなら従うまでです」

「俺もだびょん」

すると、ボスが言う、バカっぽい人と思われる人が近づいてきた。

「で、なんれこいつを残してったんれすか？」

「……修行」

「んあ？ てめーには聞いてねーびょん」

どうしてそんなこと言うのだろう。私が、何かしただろうか。

「才能を開花させて欲しいと」

またそれだ。ボスも言っていたけど、なんの才能なんだろう。

マスター
師匠が私を振り返る

「あなたも分からない、という顔をしていますね」

「（コクコク）」

「あなたには、術士になる才能があるのですよ」

「……術士？」

なんだろう。魔法使いの一種だろうか

「幻覚というものは知っていますね？」

「はい」

薬物中毒とかで見えるようなやつ。あとは、蜃気楼もそうかな。

「あなたには、それを高レベルで使えるだけの能力を持っているのですよ」

「本当ですか！？ それなら……」

「ええ、刹那の役に立ってますね」

「！？ ……
／／／／／」

でも……ぺたぺたと自分の身体を触ってみる。変わったところは感じない。普通の身体としか思えない。

「クフフフ、身体に触っても意味はありませんよ。術というのは、肉体ではなく精神に関与するものですから」

そうなのか……だったら、どうして2人は才能が在るなんてわかるんだろう。

「僕は術士ですし、彼は少し特殊な人間ですからね」

「特殊？」

「クフフ、それはいつか、本人が話してくれるでしょう。」

さて、幻術を使えるようにするには、普通にやったら凄まじい時間がかかります」

「そんな……」

それじゃあ、いつになっても肩を並べられない

「しかし風、あなたは運がいい。私の方法ならば、本人次第で最低1日で身につけられます」

「!?!」

「しかし、命の危険があります。失敗すれば目を覚ますことは……」

「……やります」

「ほう？　クフフ、わかりました。では風、僕の日を見なさい」

瞳には“一”の文字が

突然、睡魔が襲う。違う。何か、意識を遮断させようとする力が働いているみたい。師匠マスターの声が遠くに聞こえる

「今から、僕の能力スキルを駆使してあなたをあなたの精神世界に送ります」

「……あ……」

声が出ない。精神世界とは何だろう。

「そこから出るには、風自身が力を使うしかありません。あなた自身で、才能を……なさい……」

目を覚ます。ここは……私の部屋？ 当然だ、昨日は自分の部屋で寝たのだから。

寝惚けた目をこすり、身体を起こす。パジャマのまま、ふらふらと部屋をでてリビングに向かう。そこでは、お父さんとお母さんが食卓を囲んでいた。

「おはよう」

「おはよう、風。はは、寝癖がすごいことになってるぞ？」

「ほら、ご飯は用意しておくから、身支度を済ましちゃいなさい」

何時も通りの朝。皆笑顔で朝食をとる。

洗面所に向かい鏡を見る。なるほど、これはひどい。顔を洗い、髪の毛を少し濡らしてドライヤーで乾かしつつ、髪をといっていく。

リビングに戻ると、ご飯は既に用意されていた。パンとスクランブルエッグ。美味しそうな匂いが漂ってくる。

「いただきます」

「はい、どうぞー。って、まだ制服にも着替えてないの？ 遅刻するわよ？」

「大丈夫だよ。間に合わなかったらお父さんの車に途中まで乗せてもらうから」

「こら！　あなた、絶対に乗せちゃだめですよ」

「んー」

とお父さんは新聞を読みながら返事をする。この返事の時、大抵話は聞こえていない。

朝食を終え、歯磨きを済ます。それから自分の部屋に向かってクロ―ゼットから制服を取り出す。スカート、ブラウス、リボンにベスト。

「これ、ボスの学校の……」

……ボスって誰？

何か違和感を感じる。

「って何言ってるんだろう」

私の学校の並中の制服なのに。

こんなことしてる場合じゃない。早く着替えないと、走るはめになってしまう。

とっとと仕度をし、玄関で靴をはく。

「いってきます」

「待ちなさい。お弁当！！」

「忘れてた。ありがとう」

「もう忘れ物はない？」

「うん。それじゃあ、改めて行ってきます」

予定通り時間ぴったり。この時間に出れば、歩いて丁度登校5分前に学校につくのだ。途中

「あ、凧ちゃん」

そう言って近づいてくる人がいた。

「おはよう、京子ちゃん」

クラスメートの笹川 京子ちゃん。太陽の様に明るい可愛い子で、大切な友達。

「凧ちゃんがいるなら安心だね。お兄ちゃんが寝坊して、待ってたせいでわたしまで遅刻しちゃうかと思ったよ」

「そうなんだ」

丁度、極限っ！！とか言いながら、京子ちゃんのお兄さんが横を駆け抜けていった。

相変わらず元気なお兄さんだ。兄妹共々、元気を与えてくれる。

学校に着いて、自分のクラスに向かう。

「おはよう、霧島さん、京子ちゃん」

クラスメートの沢田くん。通称ツナくん。

「霧島は相変わらず5分前登校なのな」

「同じ時間に家を出ても、普通こうはならないよね」

今度は山本君と雪見君だ。この三人は一緒にいることが多い。本当はもう1人いるんだけど……

「獄寺君は今日も遅刻？」

「た……多分」

「そうだろうな」

「2時間目の途中に来るとみた」

絶対に来なさそう。そんないつも通りの会話をしていると、いつも通りのタイミングで先生が入ってきた。

軽い連絡のみしてホームルームを終え、皆授業の準備を始める。1時間目は英語だ。

……しまった。教科書忘れた。お母さんに確認されたのに。

「あれ、教科書忘れたの？ よかったら、僕の使っているよ。どうせ授業聞かないし、イタリア語の本出してれば気づかれないさ」

他の人にも良くやっていることなので、お言葉に甘えて借りることにした。

昼食後、友達と楽しくお喋りした。話は、大抵京子ちゃんと雪見君が舵取りをする。あまり饒舌でない私。京子ちゃんを前に緊張しすぎの沢田君。話を聞かない獄寺君。野球一筋で野球以外にあまり詳しくない山本君。この構図になるのは必然と言えた。花ちゃんがいる時は、彼女が京子ちゃんの代わりになり、京子ちゃんも受け身になることが多いのだけど。

あっという間に放課後。野球部のある山本君を除いて、皆帰宅部だ。いつも、だいたい同じメンバーで帰宅する。するのはいつもの他愛もない話。途中の分かれ道で、2手に別れる。私と雪見君が皆とは違う方向なのだ。

「今日は英語の教科書ありがと。使わなくても、持っていないの見つかったら大変だったでしょ？　どうして貸してくれたの？」

ちなみに、見つからなかった。いや、見つかったいたけれど、先生が黙認したのかもしれない。雪見君はなんでも出来るから。適当にやって適当な結果を残すのだ。

「んー？　なんとなく……かな」

……なんとなく。その言葉が何故か胸に突き刺さる。最近、同じ言葉をどこかで誰かに聞いた気がする。いや、きつと気のせいだ。そう何故か、簡単に思い出すことを止めてしまった。まるで、鍵キとなるピースをなくしてしまったパズルを組み立てるのを諦めたかの様に。

家に帰ると、お母さんが笑顔で出迎えてくれる。学校であった楽しかったことや嬉しかったこと。そんなことを中心に話をする。それを終わると部屋に行って、宿題だったり復習だったり勉強を始める。そしてお父さんが家に帰るのを待ち、皆で夕食をとる。後はテレビを見たり、お風呂に入ったり、友達とメールや電話をしたりする。最後に、寝る前に日記を書いて就寝。前のページを見ると、何故か一抹の寂しさを覚えた。

そんな楽しい時間が2日、3日、4日と続いていく。どうしてそんな数え方なんだろう。いつも通りの時間が、並中に入学した日から続いているはずなのに……

そして、とある日曜日。私は不良に絡まれた。お母さんにお使いを頼まれてスーパーに来ていた。少し考え事をしていて、余所見して歩いていたせいで衝突。その時に、相手が持っていたアイスクリームが服に付いてしまった。という、物語で良く見かけるシチュエーション。学校の制服だったなら、風紀委員のおかげでこんなことはならないのだが、生憎というか当然ながら私服だったので今の状況になっているのである。いくら謝っても許してくれない。クリーニング代の請求とかされた。買い物を終えたばかりで持ち合わせがないため困っていると、今日彼らと一緒に遊んだらチャラにしてくれると言い出した。それだけは嫌なので、より困っていると

「それ、特売のTシャツじゃないですか。君はそんなものをクリーニングに出すの？　僕だったら、そんなの恥ずかしすぎてやりたくないな」

と雪見君が助けに来てくれた。

「なんだと、ガキ」

「いや、だからお前ら恥ずかしいよ? って」

「てめえ、殺されてえのか?」

「そんな勇気もないくせに、そーゆーこと言わない方がいいよ?」

「んだと?」

「語彙が足りないな。話にならないよ。霧島さん、行こうか」

「……え、あ……うん」

私は雪見君に手を引かれて、囲いの中から抜け出した。

「待ちやがれ!!」

バキィッ

雪見君が1人の顔面を殴り飛ばした。

「あ、やっちゃった。霧島さんに迷惑がかっちゃうね。とりあえず、走って逃げよう」

逃げた場所は公園。名前がわからないけれど、よくあるドームになっている遊具の中に隠れている。彼らはいつの間にか数が増えてい

て、まだ私たちを探しているようだ。

「まったく、埒が空かないなあ。帰るのが遅くなっちゃうよ」

「ごめんね」

「んん？ 霧島さんのせいじゃないよ。あっちのせい。このまま、飽きるのを待ってもいいんだけど……荷物大丈夫？」

「……お肉が入ってる」

「あちゃー、それはまずいね。んー、今は多分、探されてるのは僕なんだよね……」

雪見君はなにか考える素振りをする。

「よし、とりあえず僕が彼らを蹴散らしてくるよ。危ないからさ、ここで待……」

ズキン

胸が痛い。なんで？ どうして？ 違う、知ってる分かってる。違う、違うの、違うのよ。待つ？ どうして？ そう……私は、そんなことを言われたい訳じゃない。だって……だって……

空間が弾ける。

「待つのは私じゃない。待ってもらうのが……私だから」

目の前に広がる暗闇。なんにも見えないのに自分の姿ははっきりと見えている。そして、目の前の少年だけが私を見て佇んでるのがわかる。

「幸せだったろう？」

「うん、とっても」

「あの世界がなんだかわかるかい？」

「私が望んでいた世界」

「そう、君が望んだ、皆に必要とされている世界」

そして少年は1人の少女に姿を変える。

「現実では、あなたは無意味・無関心に取り囲まれている。お母さんもお父さんも、会っても会話なんて全くしない。友達も殆どいない。だから創り出したんだよ……この幻想を」

「知ってる」

「なら……どうして世界を壊したの？ どうして幻を破ったの？
どうして幻想を打ち碎いたの？」

彼女は語調を強め、そして最後に、静かに悲しげに涙を流しながら吐き出す様に

「どうして……夢から覚めようとするの？」

そう……呟いた

確かに、楽しかった嬉しかった。一生そこにいたら、どれだけ幸せだったか分からない。それはわかっている。

でも、それは所詮

創られた世界で

映し出された幻で

歪んでしまった幻想で

夢にまで見た夢だから。

それに、今の私には待っていてくれる人がいる。

私は彼女を抱き寄せて、私は私を抱き締めた。

私は私。彼女も私。私は今で、彼女は昔。

今の私は楽しくて、昔の私は寂しかった。

だから……だからこそ、私はこう呟く。

「……なんとなく」

「!？」

私は静かに微笑んで、私も静かに微笑んだ。

「……私は今、幸せなんだね」

「うん、とっても」

鳥の囀る声がする。

優しい光が、私の閉じた瞳にも飛び込んてくる。

私は静かに目を開けて

それに気付いた彼は、優しく微笑んだ。

「おはよう、凧」

「おはよう、ボス」

ヴァリアーにて（前書き）

第2のオリキャラ颯爽登場！！

リアルが最近忙しくて、執筆ができず、ついにストックがなくなっ
てしまいました（涙）少し間が空くことになります。落ち着いたら
元のペースには戻れると思います。

ヴァリアーにて

Side ???

目の前に広がる山。この山が、岩で、土でできていたならばどれだけ幸せだったか分からない。そう、この山はそんな物ではできていない。言うなれば木、樹木である。どうしてこの黒みがあった白い山が、モンテ・ビアンコでないのだろう。現実はその甘くはないと言うことか。その白は紙、黒は只のインクである。

「終わらん。こんなん、終わる気がするひん」

大体なんなんだ。しょっちゅうしたっばとか言うくせに、こういった仕事だけは大量に回してくる。こんなのやりたくない。もっと、強いやつと戦える仕事をやらせて欲しい。

しかし、そんなことを考えてもそうなる訳はなく

「辞めてやる辞めてやる辞めてやる辞めてやる辞めてやる辞めてやる辞めてやる辞めてやる辞めてやる……」

なんて愚痴りながら机に向かうしかないのだ。

「よし、休憩するしかあらへんね。こんな集中力でやったところで進まんし」

と言うわけで、結構簡単に後回しにした。

部屋をでて廊下を歩いている最中、とある重要案件について思考していた。

さて、ここを辞めたらどこへ行こうか……条件はリーダーが強いこと・住むところがあること・強いやつと戦えること。そしてなにより書類仕事がないことだ。理想が高い？ そんなことはない。ここはうちにしたら実家みたいなところだから。でもそれとこれは話が別。こんな暴力集団のところにいたらいつか身内に殺されてしまう。ボスとかボスとかボスとかボスとかボスとかボスとかボスとかボスとかボスとかボスとかにね。

「しかし、抜けることをあの師匠が認めるやろか……いや、絶対に許さへんな。3枚におろすぞおおおお！！　って叫ぶ姿が目の浮かぶようや」

となると……全員殺るか……？

「しししっ、その前にお前が俺に殺られるっての」

「ひゃい！？」

「驚きすぎだ。つか、アイツらを殺るんだったら王子も手伝ってやるよ」

「ええっ、な、ななな、なんの話？　や、殺るなんてそんな物騒な」

「さっきからお前の計画だもれだったぜ？」

「け、計画？ 誰かが書類仕事が嫌で、脱走でも企ててるん？」

「ししっ、おめーだろうが」

「な、何故それを！？ はっ、しまった。計画をもらしてしもた！
！」

「……最初から地の文を口に出してたことに気づいてなかったのかい。しかも、標準語でね」

そう言ったのはマーモン君だ。この子は果たして男の子なのだろうか、女のこなのだろうか。常時フードを被っているので分からない。男の子でいいのかな？ いやいや、今時の日本で有名なオタク文化的には僕っ娘というジャンルがあるそうなの。

「標準語？ そんなん言ったらあかん！！ うちのキャラが薄れるやろ！？」

「ムムッ、君のキャラは素が濃いから大丈夫だよ。大体、君にはほとんど仕事は回ってないはずだよ」

「回ってないやと……？ ほにゃらば、あの書類の山は……」

新しいキャラ作んな、とかベル君が言った気がするけど、きっと気のせいだ。

「まさかつ、誰かの陰謀！？」

「違うよ。陰謀だとしたら、それは君自信の陰謀だ。自らの策に溺れたんだよ」

「ししっ、1ヶ月休憩したら、あれくらい溜まるだろ」

「君は酷く書類仕事が出来ないからね。常人の倍かかるくせに出来は悪い」

「……待って、待って待って待って。ほんならあれか? 『ここは仕事多くて大変だなあ』って言うわれてたけど、もしかしてそれは皮肉られてたってこと?」

「ししっ、そうだろ」

「あゝああああああ!! 恥ずい!! 思いつきり、せやなあ、あんなんやってられん。とか言ってたやんかー!!」

「自業自得だよ」

そんな……1日最低1回は皮肉られてたなんて

「うふん、大丈夫よ。あなたがあれでも頑張っていることは、皆知ってるもの」

姐さんがやって来ていた

「あれでも!? あれでも!?」

「それに、コイツに任せても返ってくるのが目に見えてるしな。自分でやったほうがまし」

「ベル君。言っちゃいかんことがあると思うねん。年上には敬意を

払わなあかん」

「俺の方が上司だしっ」

「年功序列という言葉を知らんの？」

「関係ないね。だって俺、王子だもん♪」

「うがあああ！！ 貴族制度を廃止せええええ！！」

「ムムツ、ツツコむところが間違ってるよ」

「それより、これ食べない？ チェリーパイ作ったのよ」

「食べう」

怒りなんて甘いものの前では紙同然だ。

「ムムツ、ルッスーリアの料理は美味しいからね」

「オカマのくせにな」

「オカマだからやろ？ それと、食事中にそんなこと言わんといて。パイが不味くなるわ」

「どういう意味よう？」

「「調理過程を考えると、気持ち悪いってことやろ（だしっ）」

「まあ、酷いわあ」

「いやでも、やっぱり姐さんの腕は確かやな。5つ星やるわ」

「王子も認定してやるよ」

「流石の僕でも、金を払えるレベルだね」

「あらあん、うれしいわあ」

姐さんが悶えている……気持ち悪い

「そーいや、師匠まだ帰らんの？」

「今日中には着くって連絡きたよ」

「げ、もうかよ。うるさいのいなくてラッキーと思ってたのに」

「師匠の声でかいからなあ。あれでよく暗殺部隊に入れたな思うわ」

「うゝおゝおおおい。てめーら、和みながら俺の陰口言ってるじゃねーぞお!!」

「ムムツ、帰ってきたみたいだね」

「噂をすればなんとやら、やな」

「仕事は終わってんだろーうなあ!!」

「勿論だよ」

「終わってるわぁ」

「ししっ、当然だしっ」

え……嘘？

「……当然やしっ」

「嘘つけえ、目が泳いでんだよ!! ベルの流れで言ってんじゃねーぞお!!」

「あーあー、えろーすいません。うちが悪かったです（棒読み）」

「謝る気ねえだろ ぉ!!」

「ありがとうございます。あー、ほんま声でかくてうるさいわー（ボソ）」

「聞こえてっぞおお!!」

「まあまあ、スクアール。まずはボスに例のあれを届けるべきじゃない?」

「ちっ、そうだったな」

そう言って、ボスの部屋に向かっていく。

「姐さんありがとー」

「あなたも悪いのよお？　もう少し頑張りなさいね」

「はい」

ルッスーリアは母役だ。師匠も叱ってばかりいないで、たまには飴をあたえるべきだと、うちは思う。

叱責は無視して談笑を続けていると、ボスの部屋から大きな音がした。

『てめえ、何しやがる！！』

ボスの声は聞こえないのに、師匠の声は鮮明に聞こえてくる。あのセリフからすると、殴られたりしたんだろう。

いつものことなので、それも無視して会話を再開する。いくらか問答があったのか、少したった後ボスの部屋から師匠が出てきた。

「幹部ども、準備をはじめろ。日本に行くぞ！！」

「ししっ、1人で行け」

「殺すぞお。クソボスからの指令だぁ！！」

「ムムッ、ボスの？」

「なにしに行くのかしら？」

「ハーフボンゴレリングを取りに行く」

「あれ、師匠が持ってきたんとちゃうの？」

「フェイクだった」

「しししっ、だっせーの」

「うるせえぞお！！」

「師匠の方がうるさいわあ」

「黙りやがれ、カス弟子！！」

うちがカスやったら、誰がちゃうねん。

「大体、うちは話さなかったら只のすぺしゃるぷりちーな美少女やないの」

「只ののわりに特別スペシャルなのねえ」

「すごいやろ？ でや、強いやつと戦えんの？」

「相手は只の雑魚だ！！ 計画のため、奴等と戦うのは幹部のみだ！！」

「えゝえ！！ うち戦えへんの！？ てか、行きすらしなainkanか！？」

「いいや、全員出動だあ」

「全員？　なんでや？」

「標的の側に跳ね馬がいた。他にもつてがある可能性がある。計画完遂後、奴等を掃討するには、数が多いにこしたことはねえ。てめえには、別動隊の指揮を任せる！！」

「ややー。ダルい」

「いくらこの子が強くてもそれは無理だと思うわあ」

「確かに、彼女はリーダーシップ性に欠けるからね」

「ししっ、一緒に戦うって気がねえよな。まっ、王子もだけど」

「そーやそーや」

「んなことするかあ！！　こいつはリーダーにでもしておかねえと、なにしでかすか分かんねえだろうが！！」

「「「確かに」」」

「なんやね、皆して」

「とにかく決定事項だ。ところでレヴィはどーしたあ！！」

「知らね」

「知らないよ」

「知らないわあ」

「知らんわ」

「なら後で知らせておけえ」

そういつて立ち去っていく。

「ししっ、あの変態のことだからもう準備始めてんじゃねーの？」

「あはは、ありえる。ボスのストーカーやしな」

「ムムツ、僕は部屋に戻るよ」

「私はレヴィをさがすわあ」

ふむ、ならばうちも部屋に戻って焚火の準備しないと……燃やすものは部屋に山積みだからあ

と、どっか行っただはすの師匠に呼び止められた。

「うゝおおおい。久しぶりの戦場だあ。好きに暴れていいぞ、だからしっかりやりやがれ、暦い！！」

「なんや、許可されんでも楽しむつもりや」

それに、折角の大規模な任務だし、抜け出す計画は練っておかないと。人とか組織につかなくても構わないんだし、もう逃げるのは決定事項。雲はもともと、自由なものだ。ここの人たちのほとんどは嫌いじゃないし好きだけど、こういう組織的な組織は合わないんだ。それに、ここのボスだけは、あんまり好きになれないんだよ。好きな人には悪いけどさ。

ヴァリアーが来ました（前書き）

この作品を待ち望んでいた奇特な方がた、どうもお久しぶりデス。久しぶりすぎて書き方を忘れたクロサマデス。起きたら11月になってたので、僕からすれば昨日ぶりですが（笑）

まあ、あれです。漢字では3文字、最初が受、最後が生という職業なんで……。ゆっくりとお待ちくださいデス。

最後のやつ、オリジナルのバトルを完全に飛ばしてます。メダカボックスのめだかちゃんVS善吉みたらやりたくなりました（笑）

ヴァリアーが来ました

Side 綱吉

今日一日の修行を終えて、俺とリボーン、そしてバジル君は家の前にいた。

バジル君によると、今日の夕飯時には親方様って人が来るらしい。ボンゴレリングなんていうおっかないリングを俺に押し付けた人だから、あまりいいイメージがないんだけど、帰らない訳にはいかないうから、深呼吸をして、俺はドアを開けた。

「ただいまー」

「よっ、ツナおつかれさん」

俺が家に入ると、玄関には父さんがいて、ちょうど靴をはいてるところだった。

「こんな時間にどっか行くの？」

と俺が訊ねると、

「ああ。どうも予定より早く、招かれざる客がやって来たみたいだ」

と父さんは苦々しい表情を作って答えた。

「もう少しは持つんじゃないかったのか？」

「そのはずだったんだが……。考えられるとすれば、XANXUSの超直感か」

「え？」

「どういふことかと俺は首を捻る。どうして父さんがXANXUSのことを知ってるんだろう。」

「俺はこれから守護者をまわる。悪いがツナは雷の守護者のもとへ向かってくれ。バジル、ついてこい」

「はい、親方様」

バジル君が父さんに向かって返事をした。

「……？」

俺は父さんとバジル君の顔を交互に見て、それから再び父さんの方を向いて恐る恐る指をさす。

「親方……様？」

「親方様」

と父さんはニカッと笑って、

「母さんには内緒だぞ。男同士の約束だ」

「……え、ええええええええええ！？」

父さんが親方様？ そんな……ええええ！？

にわかに信じられない。あのがさつで寝てばっかの父さんが親方様だなんて……。

「そういうわけで、急いで雷の守護者の元へ頼む。彼はまだ幼く危険だ」

それだけ言うと、父さんはバジル君と何処かへ行ってしまった。

「なあ、リボーン。お前は知ってたのか？」

「何をだ？」

「だから、父さんが親方様だって」

「当然だぞ」

トリボーンは言った。だったら教えてくれれば良かったのに……。俺はガクッと項垂れる。

その時、道の反対側から京子ちゃんとハルが歩いてきた。なんだか慌てている様子だ。

「あっ、ツナくん。ランボ君たち帰ってる？」

俺に気付いた京子ちゃんが足早にこちらに向かってきて聞いてきた。それにハルも続いてくる。

「すみません。遊んでいる最中にはぐれてしまっ

「……帰ってなかったな。でも、心配しなくて大丈夫だよ」

俺は二人に笑いかけた。

それに、悪いけど今はランボなんかを捜してる場合じゃないし、と心の中で思った時、リボーンが舌打ちをした。

「どうしたんだ？」

「まずいことになった。急いでアホ牛を捜すぞ」

……？ どういうこと？

「えゝええ！？ ランボが雷の守護者だって？」

今日は驚くことだらけだ。

「あいつ、まだ5歳だぞ？ ていうか、あいつボンゴレじゃないじゃん！ 他のファミリーのやつ入れていいのかよ！？」

「そんなことしたのは初代のファミリーだけだな」

なんて、リボーンはなんともなさげに言う。

「大体、ボヴィーノファミリーのボスが許すのか？」

「光栄だと泣いてよろこんだそうだ」

「なあっ！？」

とそんな会話をしている途中にフウ太たちを発見した。黒い服を着た男に追いかけている。イーピンは怪我をしているようだ。もしかしたら戦ったのかもしれない。

3人は精一杯走っているが、いかんせん歩幅が違う。簡単に追い付かれ、黒服は武器を振るう。

「ああ、危ない!!」

と――突然男が横に跳んだ、いや、跳ばされた。

もの影からゆっくりと人影が現れる。その影は、京子ちゃんのお兄さんだった。お兄さんは叫ぶ。

「晴の守護者――笹川了平、推参!」

かなり派手な登場だった。

また、おそらく控えていた戦力だったのだろう。同じく黒服の男が二人襲いかかってきた。

だがそれも、片方はダイナマイト。片方は何か――竹刀の一閃で退けることに成功した。山本と獄寺君である。

四人で談話していると、また一人、黒服が現れた。

「貴様らがやったのか?」

声からして、なにやらさっきまでのやつらとは格を逸している感じだった。

「やつはヴァリアーの中でも別格だ。油断すんじゃないぞ」

トリボーンは目を細める。

そして、次々と人が増えていった。

「レヴィ。どうやら、そこには他のリングのホルダーもいるらしいんだ」

リボーンと同じくらいのサイズの目深にフードを被った赤ん坊が声を出す。新手の中には、以前にあったロン毛の男もいた。例のごとく、大音量で怒鳴りちらしてきた。

「うゝおおおおおい。てめーら、よくもフェイクなんざ掴ませやがったなあ！ で、雨の守護者はどいつだ？」

「俺だ」

と山本が一步踏み出して応じる。怯まずにそんなことが出来るなんて、さすがだと思う。

「……のけ」

と――突然。ゾクツと身体中を凄まじい悪寒が駆け巡った。それと同時に、また一人。他とは違い若干派手な衣服を纏った、顔に傷がある男だった。

俺のことを睨み、はっ、と笑ったかと思うと、やつの手が輝き始めた。

その時――

その男の目の前に、小さな俺が現れた……。って、俺エ！？

「あれは……リボーンさんサイズの10代目!!」

「ホントだ。ツナに弟なんていたのな」

流石、山本……。

「つか、なんだよあれ!？」

ミニ俺がカクカクと動き出す。

『よう、ヴァリアー。俺こそがボンゴレの10代目に最も相応しい、人類史上最強の男、沢田綱吉だぜ!!』

はあ!？ 何言ってるんだよ、あれ!! とうか、喋ったーっ
!!

「うるせえぞ、クソチビ!!」

ロン毛が剣を振るう。

『ぎゃー』

「俺エー……!？」

ちっちゃい俺が、ロン毛に斬り殺されたアアア!!
と思ったら、一瞬にして再生した。

『けたけたけた。よえーぞお。その程度で、よくもこの沢田綱吉様に歯向かって来やがったなア!! あはははははははははははは』

ミニ俺はクルクルと回りながら笑っている。

『うえっぷ……酔った』

「……………」

「あいつ……偽物だな!!」

獄寺君が叫ぶ。……ていうか、当たり前じゃん。本物ここにいるし……あれちっちゃいし。

「10代目があの程度で目ェ回すわけねー!!」

そんな理由で見分けたのオ!?

「スクアール、これは幻覚さ」

「っだと!?!」

「まだ、未熟だね。大した術じゃないよ。もしかして、これがあいつらの霧の守護者なのかな」

「違う」

その一言が空間を制する。高い、澄んだ声が暗い町中に響いた。ヴァリアーの人たち含め、この場にいる全員が驚いて声のした方を向く。

そこには、いつの間にか2人の男女がいた。全く気がつかなくなった……。

「てめえ。あの時に、横で突っ立ってたやつだな?」

ロン毛あらため、スクアールが言った。

「ええまあ。その通りデスネ。今回も暇に任せてやって来ました。……来ちゃいました」

民家の屋根の上に立っていた少年はジャンプして地面へと飛び降り、名乗りをあげた。

「見た目は子供、頭脳は大人。ボンゴレファミリーの実は守護者ですらない、ただの沢田綱吉サイドの一般構成員で、そのくせにかわいい部下を持っている。えーと、RPG専門で格ゲーは最弱……戯言好きの中学生」

長い！！ ランボと争う！！

「雪見刹那。颯爽登場！！」

「ボス……空気大丈夫かな？」

「霧島さん……」

というか、部下に空気を読ませるなよ刹那……。

「スーパークールにパーフェクト！！」

刹那は完全に霧島さんの言葉を無視した。

S i d e 刹那

「ふう、間に合ってよかったよ……」

僕はため息をついた。こんな重要なシーンに立ち寄れなかったなら、リボンファンの名折れだからだ。

「ボスがいつまでも身だしなみ整えてるから……」

凧が呟く。

「だって、久しぶりの登場だよ？ 気合いいれなきゃ。大体、凧だって鏡の前ですっと髪いじってたじゃん」

「私は女の子だから……。じゅ、準備には時間がかかるんだよ」

凧は頬を染める。あれ、赤っぱいのは生まれつきなんだっけ？

「ええー。僕に身だしなみには気を使えって言ったの凧だし」

ぶつくさと文句を言ってみる。

「でも、女の子より時間がかかるなんて、男の子としてカッコよくないよ？」

「まじっ？ 僕ってばカッコよくないの？ 僕って、カッコよさをコンセプトにキャラ作ってんのに！！ 確かに、女性が『俺』とか言って、自分なりの仲間論を持ってた方が女の子からすりゃいいかもしれないけどさ」

「ボスってどっちかと言えば、優男で草食系男子だよな。そんな人が増えた今、肉食系の方がカッコイイかも」

「いやいやいやいや。風は知らないかもしれないけどさ、僕はかなりの肉食系だよ？　ピーマン嫌いだしね！！　それに、前の話を見てもなよ。MM戦の時もランチアさん戦の時も大活躍だぜ？」

「でも、^{マスター}師匠戦の時は操られてた」

「あーあー、あーあーっ！！　それ言っちゃダメだよ。一回斬られたらゲームオーバーとか、不公平だもん。ノーカウントだよ。というか、あれだよな。風キャラ変わりすぎだよな。距離を詰めると結構饒舌だよな？」

「うん。私もびっくり。ボスがここまで仲良くなった初めての人だから……」

「僕たち、さいこーに仲いいよね！！」

寂しいこと言わないで欲しいな、風。ツナたちだって友達なんだからさ。

「あの……えくと、刹那？」

ツナが口を挟んできた。様子が変わだ……言うなれば、呆れてる？

「久しぶり、沢田くん。……今日もカッコイイね」

「え？」

ツナは驚いている。

「ちよーと、待ってくださいよ。ツナと僕に対する態度が違すぎるよ？ あのチビのどこがカッコイイんだい？ テストだったの○太君ばりに0点ばっかだよ」

「酷い！ 確かに事実だけど！！」

ツナまで巻き込み漫才をしていて、気がつくと、ツナパパとチェルベツロ機関の双子もしくはクローン人間みたいな女性たちが来ていた。

9代目からの死炎印つきの勅命書が投げられる。

あれ。守護者同士のガチンコバトルをしろってやつ。

この後は、細かく説明しなくてもいいだろう。並中でバトルをするとか、ルール説明とかして、XANXUSがツナを脅して解散。

お互い修行頑張ろうね、と励ましあって、僕たちツナ派としても解散した。

一気に飛ばすぜ!!

Side 刹那

というわけで、僕と風は今、門外顧問組織C E D E Fの皆さん、つまりはターメリックさん・オレガノさん・ラルⅡミルチさんとイタリアに來ている。時系列で言えば、雷の守護者戦の後だ。もしかしたら、他のバトルも幾つかは終わっているかもしれない。

9代目の身に何かあったのかもしれないので、ツナパパがイタリア本国に帰還。リング争奪戦では、はっきり言って何もすることがないので、僕たちはお手伝いに來たのだ。

ちなみに、原作と全く同じように笹川先輩は勝利して、原作と全く同じようにランボは敗北した。これは、ヴァリアーの辺りの単行本を読んでもらおうと思う。持っていないなら買いましょう。

今は既に、ツナパパを援護し彼を待っている状況。かなり時間がかかっているのは言うまでもない。

「ボス……遅いな」

とC E D E Fの巨漢、ターメリックさんが口を開いた。

「確かに、本部内で何か起こったのだと考えるべきかもしれない」

偽アルコバレーノのラルⅡミルチがそれに応じる。

何かが起こった。その通りである。

偽物のボンゴレ9代目により、沢田家光は負傷。地下のようなところで倒れている、というのがシナリオだ。

僕はそれを知っていた。だから、

「可能性は高いかと思えますね。いくら家光さんでも、不意でも突かれてしまえば……。搜索に出ますか？」

「しかし……あの人がそう簡単に不意を突かれるでしょうか。もし、勘違いだったなら、逆にボスに危険が及ぶのでは？」

秘書のメガネ美人、オレガノさんが異を唱える。

「確かにそうかもしれません。が、やっぱり連絡もないのはおかしいです。自分のボスですから言いたくはありませんけど、ツナとかと違って長年門外顧問のボスをやってる家光さんが、部下を心配させるような簡単なミスをするとは思えないんですよ」

僕は、僕が事実を知っているなどと勘繰られないよう、慎重に意見を述べていく。凧はそれを黙って聞いている。誰よりも素人の自分には出番はない、と考えているのだろう。

「ふむ、確かに。そう考えれば、家光の身に何かあったと考えるのが妥当だな」

ラルさんが同調してくれる。

「それに、霧島の幻術があれば、隠密に潜入することも可能だろう」

「あ……はい。私の術は師匠マスターには及びませんが、よっぽどの手練れじゃなければ……」

僕の意見を補強してくれようとしたのだろう。凧は言った。

「ボスの救出に関しては、俺に異論はない」

「ふう、そうですね。もし、ボスに危険が迫っていた場合、早く行かなければ手遅れになってしまうかもしれませんか」

ターメリックさんとオレガノさんが順に賛同し、本部への潜入が決定した。

僕たちは本部の地下スペース中にいた。風の幻術で容易く入り込むことは出来たのだが……僕らは猛ダッシュしている。

逃亡、というよりは回避というのが合っているだろう。

振り向くと、巨大な丸い岩が僕たちを追いかけて来ていた。

「あははは、地下にこんなスペースがあったことも驚きなのに、こんなベタなトラップが仕掛けてあったのはもっと驚きですねー」

「雪見、貴様はもう少し危機感をもて！！　　というか、これはお前のせいだろう？」

「そんなっ。このトラップを引いたのがたまたま僕だったってだけじゃないですか！！」

そう。ラルさん以外は皆も一人一回はトラップを発動させている。矢が飛んできたり、落とし穴だったり色々。

「確かに、彼のせいにするのは些か卑怯かもしれませんがね。私たちが引っかかっていた可能性は大ですし」

とオレガノさんが助けてくれた。なんとやさしい人だろう。それに比べてラルさんは……。

「雪見、なんだその目は？」

「知ってますか？ あれのスイッチ、ラルさんも踏んでるんですよ」

あのトラップは、ある床を踏むと、よくあるように石が沈んで発動するタイプだった。

「そんなはずは。第一、発動させたのはお前だろう？」

「ちっこくて軽いから、石が沈まなかったんですよ！！」

これホントの話。

「そう言えば、私の時も先にラルが引っかかっていた気がします」

「なっ！？」

「俺の時もだ」

「ぐう……」

「私の時も」

「だまれっ！！」

「あーあ。コロネロ君にちくつとこー」

「貴様!!」

いやー。鬼教官からかうの楽しー。
未来でも遊ぼーっと。

「いやしかし、おふざけもそろそろ止めにしましょうか」

「最初からするなっ!!」

鬼教官かーわーいーいー。これは萌えるしかねーぜ!!

「そうですね。あの岩をどうにかしなくては何も出来ません」

「……壊すのはどうだ？」

「破片が危険過ぎます。それに弾丸程度では破壊は出来ないでしょう？」

「私の幻術で壁を……すみません」

結局は幻だからねっ!!

ていうか、僕の部下かーわーいーいー。これは萌えるしかねーぜ
!!

「《A○フィールド全開、ただし敵は自分自身》みたいになっ!!」

「なに言ってるんだ？」

「一度言ってみただけです」

これが意味することを理解できる君は天才だ!!

「くっ、角が丸くなってなければ曲がっただけで終わりなんですけどね」

「そうしないために、逆に丸くなっているんだろぅな」

「……じゃあ、横の壁を破壊しましょうか？」

「出来ればもうやっている」

「？　僕出来ますけど？」

「なっ!？」

風以外は絶句している。でも壁破壊なんて基本じゃね？

「じゃあ、いきますよー」

と死ぬ気丸を飲み込む。

思いつきり壁を、ぶん殴る。

ドカーンと大きな音をたてて、壁が崩れさった。すかさず皆でその穴に飛び込んだ。

「雪見!!　出来るなら最初からやれ!!」

僕はカッ、と目を見開いた。

「そんなことしたら、ラルさんで遊べないじゃないですか。あの状況じゃなかったら喋った瞬間に眉間に穴があきかねないでしょ？」

「……今はフリーだ」

ラルさんは銃を構えた。まずい、この人本気かもしれない。

「……っ!?」

「コロナ君……どうして君が？」

「!？」

バッ、とラルさんは振り返る。そのスピードは音速を越えていたかもしれない。

.....

.....

僕はニツコリと笑つて、

「かーわーいーいーいー」

「クロスゾ？」

乱射乱射乱射乱射乱射乱射乱射乱射乱射乱射。

死ぬ気の僕は全て避けきってみせる。

「あんなに弄ばれるラルは珍しいわね」

「ああ。俺も、最強のヒットマンリボーン以外では初めてだ」

なんて二人が言っているけど気にしない。

「ボス……ここ、宝物庫みたいだよ」

一人冷静な風が辺りを見回して言った。確かに、高そうなものが一杯ある。

「不味いな……壁突破したときに何か壊してないといいんだけど」

「大丈夫みたい。変に転がってるのこれだけだから、衝撃で飛んだのはこれだけなんだと思う」

風は小さな箱——豪華な装飾を施された宝箱みたいなものを持っている。見たところは傷はついていないようだ。

「中身が気になるな」

「私もそう思ったんだけど……開かないの。鍵もついてないのに」

「聞いたことがあるな。開かずの箱なんて呼ばれている代物だ」

ラルさんが言った。

「色々噂はあるが……どれも眉唾物だ。絶望が入っていて、最後の最後に希望が出てくるとかな」

「完全にパンドラの箱じゃないですか」

「私も聞いたことがあります。その箱と一緒に開けた男女は絶対に結ばれるとか」

「学校の七不思議。伝説の桜の木みたいな箱だね」

「俺が聞いたのは、なにか特殊なリングが入っていて、それを使いこなす人間を待っているとか何とか」

「ターメリックさん。ここはボケるところだと思います。なんか、あり得そうな噂が出てきてガツカリです」

「いや……すまん」

「しかし……カッコイイ箱ですねえ。さて、僕は選ばれし人間か……風、箱貸してえ」

と僕が箱に触れた瞬間——いきなり開いた。磁石に斥力が働いたかのように、弾かれるように開いた。

「……………」

「……………」

中には、噂通りにリングが7つ入っていた。

「なんででしょう。このリング」

「わからん」

よくわからないので、とりあえず真ん中のやつを嵌めてみた。

「ぐあああああああああああああああ!!」

「!?!? どうした、雪見っ!?!」

「いや、別になにも起きてませんけど？ 乗りで苦しんでみただけです」

「……………」

「さて、中身は大丈夫でしたし……家光さんを探しましょう」

と、僕は皆に背を向けて、箱にリングを戻す――ふりをして、袖に忍び込ませて盗み出すことに成功した。
やった、謎のリングゲット！！

家光さん探しを再開してしばらくした時、突然に壁がこちら側に向かって破壊された。
それに巻き込まれてターメリックさんがぶっ飛んでいく。

「！？ なんだこいつは！？」

壁を破った正体。みなさんご存知、モスカさんシヨボいバージョンド。

オレガノさんとラルさんはすかさず弾丸を打ち込む。流石、プロの動きだ。しかし、効果はなくモスカの体にヒットした後弾かれてしまった。

二人が行動した同じ瞬間に、僕は風を後ろに庇い、死ぬ気丸を口に含む。

「くっ、俺の弾が効かないだど！？」

そして、

「どいててください。俺が破壊します」

と俺は地面を蹴り、飛びかかる。

「はあああああっ!!」

拳を中心にに向けて放ち、腹部を貫通。

もう片方の手でモスカの腕を掴み、力一杯壁に叩きつける。そして、高く飛び上がり真上から顔面に踵落としをして、思いつき体を潰した。

「モスカのスクラップ完成」

たった10秒でモスカを打ち倒した。

いや、ほら。ゴリラチャンネル（犬がどこからコングチャンネルら、って突っ込んできた気がするけど、きつと気のせい）固くてさ、修行してたら火力があがっちゃったんだよ。

「す、すごい」

3人が目を真ん丸くしている。

「あれ……俺の出番なかったですね」

と一人の男から声がかかった。聞いたことのある声だ。

その男とは、アッディオとかいう技を使う、殺され屋モレットイだった。

「モレッティさん。お久しぶりです」

「あなたは、10代目に会いに行った時の……」

「ん？ 雪見の知り合いか？」

「はい。一度だけですけど……」

「門外顧問の使いで来ました。ご案内します」

見つけたツナパパは、肩を打たれて血を流していた。こちらを見ると、

「……予想より一日だけ早かったな。オレガノ辺りが安全策をとって明日捜索に出ると思っていたんだが」

「はい。雪見君がその案を押したので……。議論の結果、捜索に出ることになりました」

「そうか……。刹那君、感謝する」

「ところで家光、その怪我は？」

「ああ、しくじった。9代目は影だった。ギリギリのところで気がついたが、この様だ」

家光さんは、自分の左側へ目配せする。
そこには、白髪のじーさまがいた。

「ひやはははは。もう遅い。ボンゴレ9代目はもう終りだ!!」

「!? どういう意味だ!!」

ラルさんがやつに銃口を突きつける。

「やつは日本に送られたモスカの動力源として、内部に詰め込まれている」

「なんてことを!?!」

「皆さん。そんなことを言っている場合じゃありません。まずは一刻も早くディーノさんに連絡しましょう」

「刹那君の言う通りだ。オレガノ先行して跳ね馬に連絡を。ターメリックとラルⅡミルチは俺の脱出を援護してくれ」

「はっ」

「了解」

「任せろ」

「家光さん。僕らはオレガノさんと一緒に行きます。貴方は日本にはすぐには発てないでしょ? ツナたちが心配です。早く戻りたい」

「わかった。オレガノに飛行機の手配を頼んでくれ」

「ありがとうございます」

僕たちはオレガノさんと地下を抜ける。

やっとだ。

イタリアに來たかいはあつたわけだ。

僕の願いは、達成された。

僕の、俺の、俺様の、手抜きな本気

Side 刹那

並盛の森林。

俺たちはそこにいる。

周囲に漂う硝煙の臭いが、俺が立っている場所が戦場だということに自覚させた。

場には大量のマフィア。ヴァリアーの構成員と、キャバローネフアミリーの面々。

「ローマリオさん。どうなってるんですか？」

僕は隣にいたおじさんに訊ねた。

「ああ、ヴァリアーの予備部隊だ。やつら、争奪戦後に俺らを奇襲するつもりだったんだ」

「なるほど……」

原作ではランチアさんにボコられた人たちが、と納得する。

「数は……こっちの方が大分多いですよね？」

なのに、状況は互角と言ったところ。それほどまでに、ヴァリアーは個人の戦闘力が高いのか、と僅かに不安がよぎる。

「それもあるんだが……。一人だけ化け物がいる。幹部クラスの実力だ。10人でかかれば、10人全員が一瞬で蹴散らされちまう」

この不利な戦況をたった一人で持たせてんのか……。確かにそれは化け物だな。

とその時――後ろから、ザッザッという草を踏みしめる音が聞こえてきた。鋭い殺気が自分達に向けられているのを、肌で感じる。振り向くとそこには女がいた。ヴァリアーの隊員服を着た、ショートボブの女。顔立ちは、どう見ても日本人のそれだった。年齢は20に達しているか否か。予想では18歳程度だろう。

両手に、わりかし短めの刀を持っている。彼女が発している雰囲気には、どこか雲雀先輩に似たところがある。

おそらくはバトルジャンキーだろう。戦闘を楽しむタイプだ。より強者との戦いを求める人種。

「君たちがこれのリーダーなんか？」

声をかけてきた。なんだかおかしい関西弁。エセ関西弁というやつだ。

「……見つけたか」

ローマリオさんが舌打ちをする。

「やあーっと見つけたわ。師匠に雑魚狩り押し付けられてん。いんのはホンマに雑魚ばっかやし、飽きてもうてあかんかったんや」

彼女はニッと笑った。

「リーダーなんやったら、自分等ある程度強いんやろ？」

ビンゴ。バトルジャンキーだ。

ローマリオさんにだけ聞こえるように、小声で話す。

「ローマリオさん。とりあえず、俺をリーダーってことにしてください。貴方が万が一やられたら、味方の士気に関わりますから」

「だが……それでは君が……」

「大丈夫です。見れば彼女の實力はわかります。あの程度なら、昼飯前ですよ」

「朝じゃないのか？」

「手ェ抜いては勝てませんからね。俺……本気っていうか色々かなぐり捨てれば、ツナにも雲雀先輩にも、XANXUSにだって負けない自信がありますから。彼女は確かに強いけど……俺らからは大分劣ります」

そう言って、俺は耳に付けた無線機を叩く。

『どうしたの、ボス』

今、雑魚の相手を任せている凧に連絡をいれる。

「ちょっとバトる。雑魚は頼むよ？」

『わかった。任せて』

凧はなにも聞かずに承諾してくれた。そして最後に、

『気を付けてね』

と小さな声で呟いた。

「んー？ なに話しとるの？」

目の前の彼女は、そう聞いてきた。あまり気が長い方ではないみたいだ。ちよつとくらい相談の時間をくれてもいいだろうに。

まあ、それが戦いか。いつも自分ばかりに有利に動いてはくれないよな。

だから、

「まずは、俺が戦ってやるよ」

と俺は一步前へ進み出した。

「俺の名前は、雪見刹那だ」

「うちの名前は、浮雲うきぐも暦や。……二人同時でもええんよ？ 見たらわかるで？ 君じゃ、うちには勝てん」

「はは、未熟だねえ。ホントに強いやつは、自分のキャラクターを変えてまで、自分の全力は隠すんだぜ？」

「能ある鷹は爪を隠すってやつ？」

「能ある狼は牙を隠すって感じだな。俺様の場合はよオ」

僕は、俺は、俺様は、最大限に笑った。

「今回は戯言はなしだ。全力で最短距離でてめえを喰い殺す!!」

Side 暦

「なんやねん、あれ……」

私は、痛む体をこらえつつ、自分の周りを見渡した。

先ほどまで広がっていた、緑の大地は跡形もない。何者かに喰い荒らされたかのような光景が瞳に映った。

「なんや突然、雰囲気が変わりよった。ありや、完全にバグキャラやん」

先ほどの戦いを思い出す。最初から最後まで、一方的な戦いだっ
た。いや、あれは戦いの様相をなしていない。

狩り。

それが正しい。自分が言ったことをやり返されるなんて、なんと
いう皮肉だろう。

大体、自分が生きていることからして不思議だ。まあきつと、殺
さないでいられる程の力量差があったということなのだろうが。

「うちの、クアットロ・カプリッチオ四季の奇想曲も全く意味なしやったし」

プリマヴェーラ
春の曲は出だしから押さえられ、

夏エスターテの 曲は刹那の歩法に抜き去られ、

秋アウトウンノの 曲は避けられて、

冬インヴェルノの 曲は正面から押し負けた。

「世界は広いなあ。うちはまだまだ弱いやん。……と」

なんとか自力で立ち上がる。

「仲間は全員、あのお嬢ちゃんが倒してくれたし……。うちは逃げるか」

正直、まだ戦えた。勝てないけど……。逃走用の体力は残しておいたのだ。

少年は絶対に気づいてたな。

「四季咲き四重奏を使えてたら、どうやったんやろ」
クアットロ・カルテット

まだ、未完成の最終奥義だ。

「いや……出来ないもんを想像してもしゃあないな」

私は笑って歩み出す。

「ボス……気を付けエ。あれは化け物や。人間には……。どうしようもない」

さて、自分はその領域にたどり着けるのか……。人生が楽しみになってきた。

並中にて（前書き）

どーもです。クロサマです。

受験のストレスを発散するために、カオスな話になっちゃいました。
リボーンを読みたい人は、ここらが潮時ですよ？

では、どーぞ！！

並中にて

まずいことになった、とりボーンは柄にもなく焦っていた。収束不可能な事態、というわけではない。ただ、自分の眼前で繰り広げられている戦いはいかががおかしかったのだ。

確かに、戦い自体の動機、目的。どちらにしても矛盾はない。どころか正当性すら感じる。

それでも、やっぱり何かがおかしいのである。

隣にいる、同じアルコバレーノであるコロネロにも、どこか焦りが見えているように思った。

「コロネロ。9代目の状態はどうだ？」

リボーンは遂に口を開く。

彼らは、この戦いが始まるにおいて、一ツナのせいではない怪我をおったボンゴレ9代目を安全な場所へ避難させ、自らも同じ場所に身を潜めていた。

「傷は浅いから、命に別状はない。だが、あのモスカとかいう兵器に詰め込まれていたことによる衰弱のせいで、総合的な状態は芳しくないぜ、コラー!!」

「そうか……。まあ、一刻も争うようなものじゃないだけましだな」

だが、この騒動が長引けば危険かもしれないねえ、とりボーンは言う。

「おい、リボーン。そろそろ説明しろ、コラー!!」

「何のことだ？」

「とぼけんじゃねえ、コラ！！」

コロネロはリボーンのスーツの襟を掴んだ。リボーンはこれとい
って抵抗をしない。

「どうして沢田は9代目を傷つかなかったんだ！！ あの激しい攻
防の中ありえねえぜ、コラ！！ 中の9代目を避けるかのように、
デカブツを攻撃しやがった」

素朴な疑問。しかし重要な疑問だった。

沢田綱吉はあらかじめ知っていなければ、するはずのない。出来
るはずのない行動をしたのである。それは、彼らにとって『謎』以
外のなにものでもなかった。

「俺にもわかんねえんだ。超直感かとも思ったが……。それにして
も迷いがなさすぎた」

そしてリボーンは一瞬だけ間をおいて、

「刹那」

と言った。

「雪見がどうしたんだ、コラ！！」

「まあ、お前なら安心か……。口外すんじゃないぞ。これを知ってる
やつは少ないに越したけとはねーんだ」

リボーンは話した。

刹那がこの世界の人間ではないこと。

自分達が住んでいるこの世界は、刹那の世界では物語として存在していること。

「つまり、雪見はこの世界の未来を知っているってことか？」

「そうだ。勿論、呪いの存在もな」

コロネロは驚愕した。そんな危険な人間が、自分の周りに存在いたのだという事実に。

情報は最大の武器、という言葉通り、彼——雪見刹那には一人で世界を滅ぼすことが可能なのではないかと。

「最初は、情報なんざこれっきしも漏らしちゃいなかったんだけど。最近になって突然——歴史を改変しようとするかのように、ペラペラと話し始めたんだぞ」

「雪見のやつが、沢田に9代目の存在を教えたってことか、コラ！
！」

「ああ、そう考えるのが妥当だろうな。それを俺に伝えなかったのは、やつの良心からか……。あいつは何がしてーんだかよく読めねーんだ」

リボーンは続ける。

「俺も、全てを聞いてるわけじゃない——どころか、ほとんど聞いてねーから。もしかしたら、あいつだけが知ってる細かい内容から、何か思うことがあったのかもしれない」

ただ——自分達に危害を加えようものなら、全力で殺す、と。

「まあ、まずはこいつをどうするかってことだぜ、コラー！」

二人は再び、目の前の戦場へと目を戻す。

グラウンドで戦っている3人に注目する。

二人は思った。

これでは、まるで——

相打ちだった。

黒曜センターでの一件の再戦。

獄寺隼人と柿本千種の戦いは相打ちで終わった。

しかし、嵐戦での傷を考慮すれば、それは獄寺の勝利であると言えるだろう。

「くそっ、10代目のところに早く行かなきゃなんねーのに」

体がもう動かねー、と意識が朦朧としていながらも、獄寺は吐き出すように言った。

横には自分と同じように倒れて、柿本千種がいる。彼にも意識はあるようだ。

「てめーら。なんで突然裏切りやがった」

「骸様が言ったからだ」

簡潔な答え。でも、これがこの男のパーソナリティーと言える。
六道骸の役に立つことこそが、千種――そして城島犬の存在理由
だった。

「認めたくねーから言いたくはねーけど、てめーらはモヤシの――
雪見の仲間なんじゃねーのかよ」

獄寺は、ライバル――というより一種敵である刹那の能天気な顔
を思い出す。

「確かに……仲間だ。骸様が刹那のいないときに行動を起こすとは
思ってたなかった」

「じゃあ、なんであいつは!!」

「わからない」

そう。わからなかった。

しかし、二人は同じことを感じていた。

こんなの、まるで――

もう1つの再戦は城島犬の勝利で終わった。山本は血を流しすぎ
て、既に気を失っている。

「へへっ、強くなったのはてめーらだけじゃねーびよん」

得意げに犬は鼻を擦っている。

しかし、当然体には大量の傷が刻まれており、満身創痍とまではいかないまでも、グラウンドで戦う3人に混じって戦えるほど元気ではなかった。

「刹那のやつの修行に付き合っておいて良かったびょん」

とは言え、このバトルには違和感が拭い去れなかった。そして今も、何か変な感覚に覆われている。

そして彼もまた思うのだった。

これって、まるで――

雲雀恭弥は足元にベルフェゴールを置いて佇んでいる。先ほどまでモスカと戦っていて、戦闘終了後に傷ついた足は流石に動かなくなっていた。

ベルフェゴールのワイヤーによる切傷から血が流れて、意識も弱い。

そんな中、雲雀の中を駆け巡る感情は、ひたすらに怒りだけだった。

仲間に裏切られた？

敵に斬られたところが痛い？

当然そんなものではない。

そして校舎を壊された、ということではなかった。

――目の前に咬み殺したいやつが3人もいるのに、動けない。

ということだった。

そんな彼が『これじゃあ、まるで――』なんて思うわけはなく、
ひたすらにストレスを溜めていた。

残りの二人は……まだ戦っていた。

「沢田アア！！ 無事かアア！！」

と叫びながら、了平は拳を振るう。

「ボスウウウ！！ 応答をオオオ！！」

と叫びながら、レヴィはサーベルを振るう。

「タコヘッドオオオ！！ どこにいるウウウ！！」

と叫びながら、了平は拳を振るう。

「ベルウウウ！！ ボスはどうなっているウウウ！！」

と叫びながら、レヴィはサーベルを振るう。

「山本オオオ！！ 雲雀イイイ！！」

と叫びながら、了平は拳を振るう。

「ボスウウウ！！ ご無事ですかアア！！」

と叫びながら、レヴィはサーベルを振るう。

「む、貴様。うるさいぞ。極限!!」

と叫びながら、了平は拳を振るう。

「貴様こそ。レヴィ・ボルタアアア!!」

と叫びながら、レヴィはサーベルを振るう。

まだまだ二人の戦いは続きそうであった。

並盛中学校にたどり着いた刹那は、そこで起きている戦いを苦々しい表情で眺めていた。

——これが僕の冒した罪か。

と独りでに思う。

軽い気持ちでやった歴史の改変が、こんな結果を導き出した。

この解決のため、

彼はイタリアに飛んだのだ。

責任を果たすために。

これからも、友達の力になりたいくて。

それこそが、リボンが気にしていた、刹那が歴史を改変し始めた理由でもあった。

「ボス……どうしたの？」

凧が小さな声で言った。

「うん。僕が冒した罪を繰り返さないために……忘れないために、目に焼き付けてるんだ」

「罪？」

「そう。罪だ」

刹那はグラウンドを臨んだ。大した面識のXANXUS、親友のツナと骸が戦い――殺し合いをしている。

刹那は唐突に訊ねた。

「因果っていう言葉を知ってるかな。まあ、これは運命とも言い換えられるんだけど……」

凧は黙っている。答えを求めていたわけではないのだろう、刹那は続ける。

「因果応報……今の僕にぴったりの言葉でもある。

『運命なんてあるわけがない』なんて、世界の人たちの大部分は思っているだろう。かくいう僕もその中の一人だったわけなんだけど、それはともかくとしてだ。まあ、それは過去の話だし。

いいかい？ 因果、運命は存在するんだよ。

物語。僕は無宗教ではあるのだけれど、あえて宗教っぽく言うな

らば『神の創り出したシナリオ』ということになるのだと思う。

何故、運命なんて眉唾物だ、と思われてしまうのかわかるかい？
そうだ。誰にも分からないからだよ。どんな人間にも、それが正しい道のりかなんてわからないんだ。

でもね。前にも言ったように、僕は異世界人だ。世界の正史を知っている、言わば神とコンタクトした人間なんだ。だから、気がついた」

「……………」

「そして、運命ってのは揺るがないものだ。

今起こっている戦いはそのせいだ。風も感じてるんじゃないかな、違和感を。どうしてこんなことが起こっているんだ。不幸が重なりすぎている、と。そして、こんなのまるで――

帳尻あわせをしているかのようだ

とね。

未来を知らなくても、そう思ってしまっただろうね。これの歪みは大きすぎるから……。

9代目はツナによって怪我するはずだったから、他のどうでもいい理由で怪我をした。

そして今。骸君が、何故ツナやXANXUSと三つ巴の乱戦をしているのか。それは、実際には骸君は復讐者^{ヴィンデイチエ}の牢獄に捕まっている

はずだったからだ。ここで負けて、帳尻をあわせようとしているんだ」

「でも……どうしてそれがボスの罪なの？　ボスは師匠マスターを助けようとしただけ」

「ありがとう。僕も、助けたことは罪だとは思っていないよ。ただ、考えなしで、覚悟もなしで助けたことが……どうしようもなく罪なんだ。」

「どうして、何も変わらないのか……考えてなかったんだよ。ただの乗りで、自己中心に助けちゃったんだ。」

正直言っ、僕はね。最初は皆のことなんかどうでもよかったんだよ。ストーリーは好きだけど、キャラなんかどうでもいいってさ。自分が楽しければそれでいいと思ってたんだよ。」

つまり、最初は情報なんか明かさずに、適当に掻き回して、どうなるかを眺める、ただの傍観者を気取ってたんだ」

「……………」

「でもね……そんな僕でもさ。気づいたら、何も起こってないのに、ただ皆といるだけで、楽しいと感じるようになってたんだよ。」

そう。皆のことが、大好きになってたんだ。

あろうことか、自覚したのは獄寺君が千種に殺されかけた時だ。もっと言えば、ランチアさんとのバトルの時『守ってもらったって、

それで傷だらけになられたら、全然嬉しくないよ』ってツナが言ってくれた時なんだけどね。

あれは驚いたよ。いや、感動したのかな？ 僕は昔、友達がいなくてかいうレベルじゃなく、友達がいなかったからね。ああ、うん。そうだね。

『いじめ』だよ。

いや違うな。靴に画鋲をいれられたり、教科書とか隠されたり、何かされたりしたわけじゃないしね。ただただ、怖がられていたっていうのが正しいかな。

だから、というと言い訳で卑怯かもしれないけど、あの時のツナの言葉には、一種のカルチャーショックを受けたよ。言いたくはないけど、なんとなく風にもわかるんじゃないかな？

いや、理解者がいなかったわけではないけどね。おっと、また間違えた。理解してくれようとした人はいたんだ、が正しい。妹——なんだけどね。

まあ、その話はあまり関係ないから脇に置いておくことにしよう。とにかく、感動したよ。心を打たれたんだ。

うん？　じゃあ何故、風を助けたのかって？　そうだね。あの時はまだ人間関係の楽しさを理解してなかったからね。あれは、言った通りなんとなく、だよ。目の前で人死にされなくなかったんだ、だって気分悪いだろ？　人の死体なんて気持ち悪いじゃん。風には悪いけどね。

ただまあ、今から思えば、そんなのは後付けの理由だったのかもしれない。うん、過去の愚かだった自分のフォローだ。でも、確かに君には自分を投影していた気がする。人間関係が希薄な人間同士、他人に思えなかったんじゃないかな。ホントに言い訳だけど、深層心理ってやつ。

ごめんごめん。また飛んじやったね。今のは、風発端だから許して欲しいな。

あの時から、僕は本当のツナたちの友達になったんだと思うよ。なったふり、見かけだけの関係からの脱却。まあ、そこで僕は過ちを冒した訳だ。

歴史の改変。

ツナたちの役に立とうと抗った結果だ。骸君を助けたのは、心から友達になりたかったんだ。きっと楽しいに違いない、という感情が芽生えていたのさ。運よく、骸君の救出は上手くいった。それで調子に乗っちゃったんだよね。

改変の反動って言うのかな？ ああ、歴史の修復機能がいいね。とにかくそれに気がついたのは、笹川先輩の晴戦の時だよ。あの日も、先輩にはサングラスを持っていた方がいって助言してたんだよ。でもね、

なんだか意味不明なことで、先輩は持ってきたサングラスを壊しちゃったんだよ。そんな変なことがどうして起こるんだ、って思った。

で、僕は思いついたんだ。運命の存在に。当てずっぽうではあっ

ただんだけど、よくある話だからね。

その事実を受けて、僕は怖くなったよ。また、同じように帳尻あわせて骸君が捕まるんじゃないかって。そして、死にかけるはずだった風が、本当に死にかけてしまうんじゃないかって。

それで僕は決意したんだ。イタリアに行くことをね。歴史のあるボンゴレ。時間・時空を司るトゥリニセツテを持つボンゴレの本部に行けば、運命を打ち破る方法が見つかるんじゃないかって考えたのさ。

見つかったのかって？ 見つかったからここに来たんだ。罪を償えるからこそ、戻ってきたんだよ。それこそが、風も見たこのリングだ。え？ パクってきたに決まってるじゃん。後で、9代目には謝るよ。で、こいつはね、

トゥリニセツテとはルーツの違うリング——混沌から生まれたりング。

——カオスリング

僕が苦しんだふりをしただろ？ あれは、実際には苦しんでたんだよ。リングが語りかけてきたんだ。『我は運命を切り裂くリング』ってさ。はっきり言って、ご都合主義的展開だとは思ってたんだけどね。

やっぱり、それでもありがたかったよ」

刹那は語り終えて一息をつき、

「僕はこういう人間だ」

と静かに告げた。

「それがわかった上でもまだ、僕についてきてくれると言うのなら……この霧のカオスリングを受け取って欲しい」

小さなリングを手のひらの上に乗せて、前に差し出した。
それを凧は、黙って受け取った。

「……………」

「……………」

「君は、変わってるね」

と刹那は言う。

「そうかな。友達も皆、こんなもんだよ」

と凧は答えた。

「それじゃあ。行ってくるよ。罪を清算しにさ……」

三つ巴っていうか四つ巴

隕石が落ちたのではないかという、巨大なクレーターができたグラウンド。雲戦の設備は戦闘によってあらかた破壊されてしまい、バトル開始当初より暗くなっている。薄暗いフィールドではまれに、オレンジの光が点滅していた。

その場には三人の男がいる。そのうちの二人がまだ中学生であるのは、酷く異様な光景であった。

額と両手に橙色の炎を灯した少年、沢田綱吉。対炎用にしたてられた並中の制服と同型の戦闘スーツは、度重なる攻撃により所々が摩耗してしまっている。

はたまた、同じ中学生でありながら、ツナとは違い背も高い三叉槍を構えた少年、六道骸。戦闘に弱った敵をより簡単に始末するために、参加するのが他の二人より遅かったので割りと軽傷だ。

そして、黒いズボンに白いシャツを着た青年、XANXUSである。肩にかけていた黒いコートはいつの間にかどこかにいつてしまった。彼は、？の文字が入った二丁拳銃を構えていた。

ツナは、自分達の繰り広げる異様な戦いに心を削っていた。焦燥というのが相応しいだろう。自分達が何故戦っているのか、自分ですらわからない。それは、戦い嫌いのツナには耐えられたものではない。

「骸———どうしてお前が！！　これ以上続ければ、今回ばかりは本当に復讐者^{ヴァインデイチエ}に連れて行かれるぞ！！」

「クフフ。あなたは本当に甘い男だ。今戦っている相手にそんなことを言うとは……。心配は要りませんよ。もうすぐ、終わります」

「なんだと……？」

骸の言葉に首を傾げる。普通に考えれば、もうすぐ自分が勝つ、という宣言ではある。だが、ブラッド・オブ・ボンゴレ——超直感がそういう意味ではないと告げていた。だから、骸の心中がわからない。

会話していると、二人に向かって橙色の光——槍のようにまっすぐな炎が放たれた。その軌道上の地面はえぐられている。

憤怒の炎。

XANXUSが持つ、固有の炎。破壊力の高い炎である。

骸は容易く避け、ツナは構える。

零地点突破・改だ。相手の炎を吸収し、自らの力に変換する奥義。先ほどもでは、炎圧が強すぎて吸収出来なかったが、銃一本分の炎なら可能だ。XANXUSのパワーを手にしたツナの炎が大きく燃え上がる。

それと同時にツナは行動を開始した。炎をグローブから逆噴射することによる推進力で高速移動をする。というより、今回のスピードでは、それはもう瞬間移動だった。

XANXUSが瞬きを一回する間に背後に回り込む。

「ちっ、カスが！！」

流星はプロと言うべきだろう。その事象に慌てることなく、姿が見えたと同時に、最小限の動きで銃をツナに突きつける。

ガキィ、と拳と銃がぶつかり合う。

そのままインファイトへと移行する。単純な近接戦闘が繰り広げられるその場所の足元が、突然盛り上がった。

——と次の瞬間、地面が割れて火柱が天へと昇る。ツナとXANXUSは衝突している相手の力を利用して、弾かれるように後ろに跳んだ。

「敵は一人ではありませんよ」

と、瞳に“一”を浮かべた骸が笑っている。

三つ巴の戦いの難しいところだ。意見が違う仲間同士の衝突（暴力とは限らず）においては、一時的に手を組むということが可能だが、この戦闘は全員が敵。しかも、全員の仲が壊滅的に悪い。そんな状況ではそんな戦法をとれるはずもない。

誰かが、ツナに申し出れば可能かもしれないが、後の二人がそんなことを言うのはあり得なかった。

今、三人は正三角形の形で布陣している。中心に向かって飛び出した。

と——そこに一つの影がストーンと落ちてきた。並中の制服を着た彼は、黒髪で短髪だ。『ワイルド』というよりは『優しげな』という顔立ち。額では、ツナのように、しかしツナの橙色のものとは違い、白い炎が揺れていた。

三人の攻撃が向かう中心に佇む彼は、舞うように動く。攻撃は全て紙一重で避けてみせる。

半歩後ろに下がり、銃を降り下ろす軌道から一瞬だけ外れ足払いをし、XANXUSの腹部を蹴り飛ばす。突き出された拳はしゃがむことでかわし、目の前にきた足を両手で掴み振り回す。ツナの体を武器のように振るい骸を殴り、その後手を離してツナも投げ飛ばした。

不意打ち、ではあったのだろう。そうでなければ、こんなことは出来なかった。三人が驚いた隙を突いたカウンターだった。最初にXANXUSを攻撃したのは、自分を見たところで躊躇わないからだ。

三人の体を地面が削った。

「初めまして、僕だよ」

雪見刹那の登場だった。

Side 綱吉

「初めましてって……」

と俺は言う。でも、なんとなくわかった。確かに初めまして、なんだろう。いつも感じていた、飄々とした雰囲気刹那にはなかった。目の前の問題に向き合おうという、真摯な雰囲気。例え、目が笑っていても隠しきれるものではなかった。

「ふふん。やっほー、ツナ。どうしたの、その擦り傷。痛そうだねっ……！」

「ついさっき、刹那に投げ飛ばされたせいでついた傷だ」

「……。酷いよ、ツナ。僕に責任を押し付けるんだね？」

「押し付けるもなにも、正真正銘刹那のせいだ。大体……、」

と言いかけたところで、俺の言葉は他の声に遮られた。

「ようやくですか……。待ちくたびれましたよ、刹那」

刹那はニツコリ笑って、

「待っててくれたのかい？　なんていじらしいんだ。僕のを愛を受け

止める決心をしてくれたんだね、ミスウィート!!」

「違います」

「恥ずかしがることはないよ。僕の胸に――飛び込んでおいで!!」

刹那は両腕を広げて、きらきらと輝いている。

「はあ。ふざけている場合じゃないでしょう?」

「いや、ふざけるべきだ。折角、XANXUSさんが黙って見ててくれるんだからねっ!!」

と、炎マンテロー・ディ・ファイアンマの鉄槌が刹那に向かって降り注いだ。

「散れ、クズが」

「断りまーす」

「!?!」

いつの間にか、刹那は骸の横に立っていた。あのタイミングでどうやって、と思う。

「いやいやいやいや、そんなに驚くことじゃないよ。週間少年ジャンプ的には日常茶飯事だ。サンデーにだってマガジンにだって存在するぜ? ただまあ、敢えて名前をつけるなら、僕は【刹那の歩法】と言おうかな」

「刹那の……歩法?」

「そう。一般的には、瞬動術というかもしれない。文字通り、刹那のうちに移動する」

「……歩法ってことは、足で瞬間移動をしてるのか？」

「んん？　こんなの、死ぬ気でやれば簡単だ。殴る時と同じように、インパクトの瞬間に死ぬ気を爆発させればいいんだからね——っと。そろそろ、暗殺部隊のボスさんは限界みたいだ」

XANXUSは既に次弾の装填を済ませており、銃が光っている。それに気がつき、俺を含めて全員が構えなおした。

Side 刹那

「三つ巴ならぬ、四つ巴ってね。戦いの続き、カッコよく言って第二ラウンドを始めようか」

目の前にいる三人を順に見て、僕は言う。

勝てるかな、なんて今更になって思ってしまう。普通よりはましだろうけど、僕はトップクラスの人間を三人同時に倒さなければいけないのだ。

——まっ、これも僕の責任か。

僕は拳を握りしめる。今回の切札。一撃必殺の牙。故郷の世界的には、【一喰い^{イーディングワン}】とか言えればいいだろう。

ただまあ、イメージ的というだけで、実際にはあんなクレイジーな技ではない。技とすら言えない代物だ。

手加減なんて簡単に出来るし、

ただ、死ぬ気でぶん殴るだけだ。

なら、【一喰い】^{イーディングワン}ではなく、ぶん殴りの中のぶん殴り【The・ぶん殴り】と言った方がいいかとも思ったが、やっぱりどうしようもなく、前者の方が近いだろう。

「はは、全員一撃で仕留める。死ぬなよ。運命から引き裂いてやるから」

と同時に、全員の姿が消える。二人は瞬間移動。もう一人は幻覚だろう。

僕のそばに一番最初に現れたのは、予想通りにXANXUSである。一番関係のない人物だ。

今のこの状況。僕が狙われるわけ。それはやっぱり、歪みの中心が僕だからに他ならない。世界が、イレギュラーである僕を排除しようとしている。

「まずは体術勝負ですか？」

XANXUSは銃を、鈍器として振るう。僕はそれを両手をつかい全て受け流す。

とそこにオレンジの拳が僕に襲いかかり、XANXUSには三叉槍が突き出された。

咄嗟に脇に倒れ込み回避する。XANXUSは地面に向かって発砲し、空中へと飛び上がり、その流れで次の行動へ移った。

ボッチョーロ・デイ・フィアンマ
【炎の薔】

空中から、高速移動をしながらの連射。中心に向かって橙色の光が撃ち込まれる。

倒れながら避けたことが仇となる。ツナと骸は輪の中には既にいる。僕も直撃するわけにはいかない。舞うように、なんとか炎を避ける。

「いてて、十発もかすった」

まあ、それだけで済んでよかったと言える。

XANXUSの横にツナが現れた。攻撃からまだ立ち直っていない彼に拳を振るう。

この場合は、やはり勝手に挟み撃ちに持ち込むべきだろう。万が一かわされても、同じく空振りしたツナを踏み台に地面に戻れる。力強く踏みつけるわけだから、ある程度はツナにもダメージを与えられるし。僕は地面を蹴った。

そして、XANXUSは本当に避けやがった。どんな戦闘力してやがる。

予定通りツナを踏み台にしようと蹴りをかます。それにギリギリ反応したツナの拳と僕の足が激突。その勢いで地面に帰還。

と、そこには骸が待ち構えていた。三叉槍による突き。僕はあえて踏ん張らずに、上空から降りてきた力で倒れ込むように逆立ちをし足を広げて、腕を支点に駒のように回転した。

当たった衝撃は思わぬところからだった。僕が見ていた骸は幻覚だったらしい。逆に身を隠した骸に蹴りが当たったわけである。

「ぎゃはは——っと、違う違う。ははは、残念でした」

「くっ、あなたと言う人はどんな運動能力をしているんですか」

「僕の死ぬ気は、運動能力に特化させたからね。ツナみたいに炎を

噴射出来ない僕は、そうせざるを得ないのさっ」

「知ってますよ」

僕は畳み掛けようと、体操選手のようにクルリと滑るように立ち上がると、力を込める。が、やっぱり邪魔が入った。

コルボ・ダッディオ
【決別の一撃】

くそう、さっきから技名があってズルいな、とか思いつつ、ラリアットしながら骸と回避をする。

だって、置いてったら骸君が死んじゃうじゃん。

XANXUSの一撃で辺り一面に砂ぼこりが舞い上がる。僥幸だ。

「骸君はゲームオーバーだよ」

「ゲームオーバー？　僕はやりたくてこのゲームをやっていたわけではありませんから――わざと負けてあげたんですよ」

「わざとは嘘だね。というか、やっぱり気づいてたの？」

「運命ごときに振り回されるとは、一生の不覚です」

「ははは、君――スペック高すぎるぜ？　どうすればそうになれるんだよ」

「輪廻を巡れば」

「残念。諦めるとしよう」

僕は倒れている骸の頭に手を添える。

——覚悟を炎に変えるイメージね。

僕が指にはめているのは、大空のカオスリングだ。

しかし僕の炎は白、なんだよなあ。なんもリングは増えてないのに、別色の炎が出るってどういうこと？ でもまあ、全ての光を集めると白になるって言うし、きっと灯るでしょう。

予想通りにリングには白い炎が灯る。うっ、と骸がうめく。

「……………」

よく考えれば、どうやって運命から切り離されのたかがわかるんだろうか。

「おそらく、もう大丈夫です。戦わなければならない、という焦りが消えました」

「そお？ まあ、信じるしかないか。危ないから逃げといてね。それじゃ、またね」

薄くなった砂のカーテンの中へと飛び出そうとして止めた。やべ、砂が目に入って痛い。ハンカチを取り出して砂を出す。よし、インターバルは終了。その時には砂は晴れていた。

見ると、勝手にツナとXANXUSは激闘を繰り広げていた。どっちかがくたばるの待とうかな、と思った。

戦いで生じるオレンジの光の尾がかっこいい。衝突するのにぐるぐる回るからか、DNAの螺旋構造みたいに光の跡が残る。

「しかし、三つ巴か。二人は気持ちよく戦ってるし、同時に仕留め

るのも——悪くない」

集中する。力を両腕に集めるイメージ。両腕を使った必殺技だ。
イクスバーナー

？― BURNER的な技なのに、チャージに時間が掛かるのが難点だよなあ、この技。隙も大きいから、まっすぐな方法じゃ当てられないし。

でもまあ、

「内容がウリってるし、殺しも解しも揃えも並べも晒すこともしないが——かるーく、零崎を始めるちゃ」

まっ、零崎じゃないけど。

攻撃し合いながら、ツナとXANXUSが地上へと降りてきた。

二人は一度間合いをとると、にらみ合う。

しかし、こんな近くにいるというのに、気がつかないとは——もしかして、僕って影が薄いのかな？

そんなことを思っていると、二人は同時に前進する。僕もそれに合わせて静かに突撃。二人はやっぱり気づかない。二人の攻撃がぶつかり合った瞬間。

というわけで、知っている皆さんは一緒に叫びましょう。はい、せーの、

「暴飲暴食ウウウ。イーディングワン一喰い！！！！！！！！」

「なっ!?!」

「ちいっ!?!」

本気で驚いている。マジで気づいてなかったらしい（涙）

広げた両手を思いつき振り抜く。直撃はさせない。当てたら死んじやうかもしれないから。

地面に直撃した結果巻き起こったのは、

爆発なの！
爆発なんだよ爆発なんです三段活用！！！！

爆発後、地面が異様にえぐれたグラウンドには、気絶したツナとXANXUSが横たわっていた。

僕はとりあえず、それっぽく笑うことにした。

[illegible]

正々堂々、真っ向から不意打ってごらんにいれたぜ！　しかし――
 ―異様に虚しいっ！！　でも、楽しかった！！！！　最初からこうすれ
 ば良かった！！！！！！

よいこの皆、

「殺戮するなら、一時間につき十五分の休憩をするんだよっ!!」

少し違う上に、誰も聞いていなかったのである。

トン、という着地音。僕の後ろからだった。

振り向くと風がいた。

「ボス……」

「!?!? 違う、今のは僕じゃない! 雪見刹那という男子中学生はあんなに痛い子じゃない!!」

「……？」

風は首を傾げている。つまり、さっきの僕のことには気にしていない、ということだ。だが、念には念をいれないと。

「そうっ、さっきのはあれだ。狼うさぎのアンドリュウ様っ!!」

「よくわからないけど、ボス。回復した獄寺君が怒ってるよ？」

「へ？」

と見ると、確かに獄寺君がいた。確かに怒っているように見える。

「モヤシてめえ——十代目に何してやがる!!」

その言葉を認識し、ツナを見る。……。……。はっ——もしかしてこれは、ガチで獄寺君は怒ってらっしゃる？

もう一度視線を戻すと、やっぱり獄寺君はムカつきマークを浮かべて、凄い表情で、ダイナマイトを構えていた。しかも、前のやつとデザインが違う。

というか、

「ロケットボム!!」

機動力の増した新型ボムだった。どうして加速時に暴発しないのかが甚だ疑問ではあるが、獄寺君のことだから、綿密な計算の上に火薬を仕込んでいるのだろう。

しかしどうしようか。さっきの一撃は真正銘の全力だった。気力を使い果たし、体がだるい。でも、爆死はしたくない。死ぬなら萌え死にと決めているのだ。

最後の気力を振り絞り、爆発から遠ざかった。

しかし、友達を攻撃した罪は思いの外重いらしい。逃げた先には、トンファーを構えた人外がいた。またの名を風紀委員長ばけもの。

「君、校舎壊しすぎ。今ここで咬み殺してあげるよ」

今日の教訓『友達は殴んな』

さてさて、今回の落ち。

リング争奪戦について。目を覚ました九代目の力で、勅命そのものが無効となった。つまり、一応は沢田綱吉サイドの勝利、ということだ。ヴァリアーの面々はグチグチ言いながらも、イタリヤに帰っていった。次、XANXUSにあったときには、僕は殺されるかもしれない。例の如く、スクアーロもミイラの状態で帰還。マーモンも発見されて保護らちされた。

次はカオスリングだ。九代目に謝ったら、一瞬だけ驚いて笑って許してくれた。開けたのが僕だ、ということに僕のものになった。返せと言われても、あの手この手で踏んだくるつもりだったから、手間が省けた。

因果云々の話は、翌日に風伝に手伝わってもらって解決させた。全リングが揃っていればもう少し楽だったのかもしれないが、なんとか儀式めいた方法で一気に解決。因果を既に崩壊させた骸・ツナ・XANXUSを核にしたお陰で可能だった。単位にして、十時間の瞑想。二十四時間位はかかるだろうと覚悟をしていたので、万々歳だ。

これで所謂、『ヴァリアー編』『リング争奪戦編』には早々に終止符が打たれるわけだが、ギャグではなく、シリアスなことを言わしてもらおう。

時間が解決してくれる、なんていう言葉がある。

罪滅ぼし、という言葉もある。

でも、やっぱりそれは間違っている。

時が経っても、どこかに罪は残るのだ。

どんなに素晴らしいことをしても、罪が薄まることはないのだ。

それだけじゃない。

今回の僕は、友達を傷つける羽目にあった。

今回の僕は、罪悪感に蝕まれた。

今回の僕は、皆に仕返しじみたことをされた。

そう。

自分の冒した罪は、

いつかは絶対に、

自分に返ってくるのである。

三つ巴っていうか四つ巴（後書き）

未来編が早くやりたくて、短くなりました。

ヴァリアー好きの方、ごめんちゃいなさい!!

あと、パロネタ嫌いな方、ごめんちゃいなさい!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6606w/>

家庭教師ヒットマンREBORN! ?の牙 来る！！

2011年11月21日12時38分発行